

2016年度巡検報告書 高岡の地域調査

はじめに

2位都市には独特の魅力がある。ここで2位都市とは、国（または州・県）において、首位都市の危機のときに役割を代替できるほどの規模と伝統をもった都市としておく。日本ならば大阪、韓国ならば釜山、マレーシアならばジョホールバルなど、その例は数多く、開発途上国の地域政策でもその役割が注目されてきた。首位都市は単に規模で一番というだけではなく、国家（または地方自治体）の機関、大企業の本社があり、全体を代表する。これに対して2位都市は、その性格が地域ごとで柔軟に異なる。2位都市であることには必ず歴史的理由があり、首位都市にはない創造性がある。富山県高岡市とは、そんな都市のひとつであると筆者には思えた。

今年度の巡検の場所に高岡を選んだのは、この2位都市からくるさまざまな性格を知るためであった。第1に、北陸新幹線開通で便利になったとはいえ、最速の新幹線停車駅は県庁所在地に置かれることが多く、高岡には多くの新幹線列車が通過するだけでなく、伝統ある高岡駅とは別の新駅で乗り換えとなる。このためか、観光地として目立たない存在となっている。第2に、全国の大学の地理学教室が実施する夏の巡検で、高岡が調査地選ばれた例はきわめて少なく、しかも瑞龍寺や大仏を見学した後は素通りする程度であったのである。高岡の規模が数十万都市でもなく農山村でもなく、地理学の調査地として中途半端に見えたのであろうか。第3に、このように素通りされがちな地方都市でありながら、高岡は明治中期には全国30都市とともに市制を敷いた重要都市であった。近世の城下町でもなく（わずか4年で廃城）、明治以降の開港都市でも企業城下町でもない高岡が、なぜそれだけの力をもっていたのか。第4に、戦時中のB29による空襲を受けなかった偶然により、歴史的な街並みがそのまま残った。北陸地方では、富山と福井が空襲により市街地が全焼していて、高岡が2位都市であることと空襲を受けなかったことには、どんな関係があるだろうか。

私事にわたって恐縮であるが、この巡検を計画し引率した筆者は能登生まれで、NHKの地方ニュースで高岡の情報をよく耳にし、また高校の遠足で高岡を訪れたりしていた。しかし少し知っている程度で、親類・知人はこの地にはいなかった。この「適度の距離感」を保てる都市は、不思議な魅力をもって存在していた。高校時代に、能登から国鉄七尾線で金沢方面に出て津幡駅で乗り換えて北陸本線で富山方面に向かうと、乗客が都市的雰囲気備えた人たちに見えた。その先入観は、高岡出身の作家、堀田善衛が少年時代を回想した文章の中で、自宅の3階から日本海を航行する船を眺めていたとか、英語の勉強のために金沢に電車で通っていたなどとあるのを筆者が読み、高岡は水田単作地帯にありながらどうしてこんな生活があるのかと思ったことに始まる。高岡のような商工業都市は遠隔地、外国を含む他者との交流が必然的にあり、そのことがこの都市を開けたものになっているのかもしれない。

いずれにせよ、このような多くの魅力に引っ張られて、2016年8月28日～9月1日までの4泊5日、学部3年生12名、大学院生2名を引率して、それぞれのテーマで調査を行った。28日午後には、高岡駅から御旅屋町、大仏、五福町、金屋町、山町筋などを巡検し、31日夕方には夜の中心商店街を歩き、駅地下の立ち飲み居酒屋で解散した。この大巡検の参加学生・院生には富山県出身者はおらず、また高岡に来たことがある者も、筆者を除いていなかった。この調査では、博士後期課程の三浦尚子さんがティーチング・アシスタントとして調査を支え、富山大学の山根拓教授にも初日の高岡市内巡検、学生たちの個々の現地調査へのアドバイスで協力いただいた。比較的人数の多い調査チームだったため、お二人の協力なしに無事、巡検を終えることはできなかった。

最後に、高岡市教育委員会文化財課の流森様、釣様をはじめ多くの関係機関・部署の方々、さらには調査でお世話になった市民の皆様には、紙面を借りてお礼申し上げます。わずか5日の滞在ではありましたが、それぞれの学生が関心をもったそれぞれの高岡を調査し、文章にまとめています。ご高覧いただければ幸いです。

2016年度「地理学フィールドワークA」担当
教授 水野 勲

目 次

砺波平野周辺の名水百選の比較考察	名取 幸花
地図に表れた高岡の地域理解－観光マップとイメージマップ－	寺垣 沙織
高岡における集落営農が抱える問題について－二つの営農組合の事例から－ 「飛越能の玄関口」としての高岡の現状と課題	大友 久代 長尾百合恵
富山県高岡市における中心商店街の活性化への取り組み －官，民，教育・産業の連携を基盤として－	吉川 綾乃
土蔵造りの町並みに見る山町筋の場所性－伝統と防災の観点から－	小野日菜子
金屋町における景観と住民意識	豊田 明奏
伝統的都市祭礼における文化財の継承とその課題－高岡御車山祭を事例に－	仲地 桃子
鋳物産業から生まれた「弥栄節」の存在	木村 由梨
芸術文化によるまちづくり－高岡市を事例に－	木村 翠
漫画家のふるさととしての地域振興の現状と課題－ドラえもん＆藤子・F・不二雄と高岡市－	本田真裕子
文化を活用したまちづくりと地域活性化－富山県高岡市「万葉のふるさとづくり」を事例に－	松島 璃子
高岡市における子育て環境の地域特性に関する一考察 －自治体，支援者及び当事者への聞き取り調査をもとに－	小原 尚子
富山県高岡市における多文化共生－外国人児童生徒に対する学習支援の現況と課題を中心に－	崎濱 奏子

砺波平野周辺の名水百選の比較考察

名取 幸花

I はじめに

富山県には、水量が豊富で良質な地下水をもつ広範な扇状地が黒部川、片貝川、早月川、常願寺川および庄川の各下流域に展開している。したがって、県内の各扇状地には、質・量ともに良好な井戸水が多数存在し、また、そのような井戸水を、どの扇状地でも新しく得ることが可能であるという恵まれた地下水環境にある(日本地下水学会 1994)。優れた水環境を形成する湧水も多く、名水百選に選定されているものもある。名水百選は観光資源としての役割も担っており、知名度が高いが、名水百選を扱った研究は比較的少ない。また、選定を行った環境省による継続したモニタリング調査等も行われておらず、現在の状況はあまり把握されていないと考えられる。そこで、今回の調査では、フィールドである高岡市に位置するものを含めた、砺波平野周辺の「名水百選」に選定された3地点の湧水を、その来歴、周辺環境の現状、成分などの観点から比較・考察する。調査する湧水は「弓の清水」(高岡市)、「不動滝の霊水」(南砺市)、「瓜裂清水」であり、位置する市町村は図1に示したとおりである。3つの湧水は名水百選に選定された時期、歴史、所在地の自治体などが異なっており、比較に適していると考えられる。それぞれの湧水の特徴と現状を明らかにし、地域の水環境・水資源の保全の在り方について考察する。

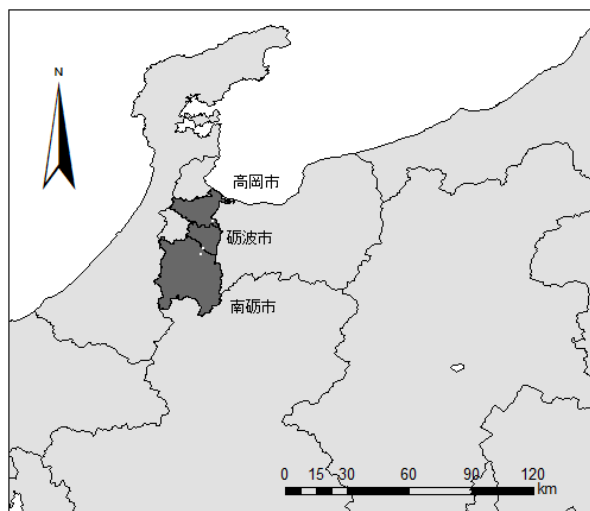


図1 各湧水の位置する市町村

II 「名水百選」と「とやまの名水」

1. 「名水百選」

「名水百選」とは、1985年に当時の環境庁が選定した全国100ヶ所の湧水・河川(用水)・地下水である。2008年に新たに選定した「平成の名水百選」と合わせて200ヶ所で、そのうち8つが富山県にある。これは熊本県と並んで全国最多となっている。平成の名水百選は、以下の評価軸に基づいて選定が行われた。(1)水質・水量、(2)周辺環境の状況(周囲の生態系や保全のための配慮など)、(3)親水性・近づきやすさ(水への近づきやすさや安全性を重視)、(4)水利用の状況(水利用の伝統を含む)、(5)保全活動(保全活動の内容・効果を重視)、(6)その他の特徴・PRポイント(故事来歴や希少性など)¹⁾。

このように、地域の生活に溶け込んでいる清澄な水及び水環境の中で、特に地域住民等による主体的かつ持続的な水環境等の保全が行われている点が重視されている。名水百選といえば、一般的には飲用や調理用水に適した水というイメージが定着しているが、飲用の可否は選定の基準にはない。主目的は、地域における水環境保全の推進である。名水百選はその多くが観光名所となり、水の付加価値を高める役割を果たしている。

選定の際は、国から県へ、県から市町村へと選定の案内が届けられ、市町村から県へ、県から国へと推薦の書類が提出される。推薦・選定件数は、名水百選・平成の名水百選ともに各県4ヶ所が上限である。昭和の名水百選は、各都道府県から1ヶ所以上選定されたが、平成の名水百選ではその規定がなくなったため、選定がない都道府県もある。

2. 「とやまの名水」

「とやまの名水」は、富山県が独自に選定したものであり、富山県内に数多くある優れた水環境を広く県民に紹介し、水に対する認識の高揚を図ることを目的としている²⁾。昭和61年2月に選ばれた55件と、平成18年に選ばれた11件を合わせた66件を指す。名水百選との重複もある。今回調査した3地点の湧水は「名水百選」と「とやまの名水」の両方に選出されている。とやまの名水の選定基準は名水百選のものと似通っており、全文は以下の

通りである。(1)きれいな水で、古くから生活形態や水利利用等において、水質保全のための社会的配慮が払われているもの。(2)湧き水等で、ある程度の水量を有する良質なものであり、地方公共団体等において、その保全に力を入れているもの。(3)いわゆる名水として、故事来歴を有するもの。(4)そのほか、特に自然性がゆたかであり、希少性や特異性を有するなど、優良な水環境として後世に残したいもの。

Ⅲ 調査方法

現地で行った調査は、各湧水の保全団体と湧水が位置する地域の自治体職員の方へのインタビュー調査、現地の景観の観察、湧水から採水した水のイオンクロマトグラフィーによる分析の3つである。このほか、各湧水に関する文献を収集した。

Ⅳ 各湧水の現状

1. 湧水の地点と標高

各湧水の地点と標高を図2に示した。弓の清水、瓜裂清水は低地・台地の湧水、不動滝の霊水は山地の湧水に区分できる。

2. 弓の清水

1) 湧水の概要

弓の清水は富山県高岡市中田常国に位置する。和田川水系にある。般若野台地にしみこんだ水が、湧水として河岸段丘から湧出していると考えられる。この地は1183年の、木曾義仲と平家一門の「盤若野の戦い」の古戦場としても知られている。兵の喉の渇きを潤すために、木曾義仲が崖の下に弓で矢を放ったところ、清水が湧き出したという伝承がある。義仲に清水の場所を進言したのは、この地域の住民であるとの言い伝えもある。弓の清

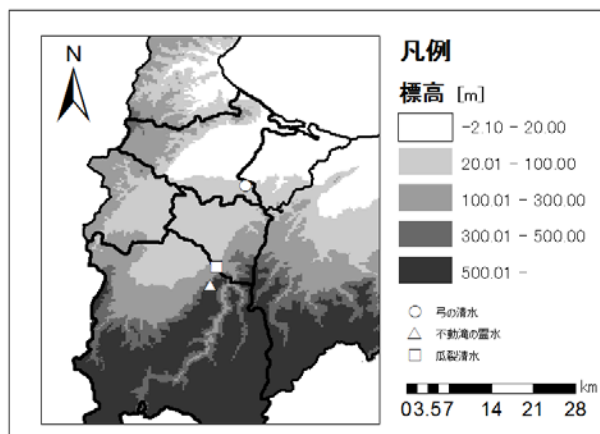


図2 各湧水の地点

水という名称も、この逸話に基づいている（日本地下水学会 2009）。

2) 周辺環境

周囲は水田が多く、民家もある。木の茂った崖があり、その下に源泉がある。屋根のある囲いの中から水が湧き出ており、そこから人工のため池へ、ため池から水汲み場へと水が流れ込んでいる。前述の通り、弓の清水の位置する場所は、木曾義仲と平家一門が戦った古戦場であるとされるが、一連の源平合戦において、初めて平家が敗退した場所でもある。湧水のすぐ上にはそれを示した石碑が設置されている。崖に続く道には木曾義仲像がある。

3) 保全の現状

弓の清水は、常国旧蹟保存会によって保全されている。常国旧蹟保存会会長のSさんと前会長のKさんからの聞き取りによれば、保存会は木曾義仲の伝説を持つ弓の清水の保全を主な目的として、大正2年に結成された。長い歴史を持つが、結成当時の記録はあまり残っていないという。弓の清水以外にも、義仲守護の観世音菩薩、常国一里塚などを、同保存会で管理している。

会員は中田常国地域の自治会員全員であり、維持管理費として旧蹟保存会費が集められている。役員は自治会役員と史跡の所有元である神社の役員が担当している。高岡市から史跡としての指定があり、補助を受けている。

この地には木曾義仲の伝承が残っており、弓の清水は、「弓の清水古戦場」として史跡に登録されている。弓の清水は名水としては有名だが、古戦場としては知名度が低く、石碑と水汲み場も切り離されてしまっていた。水とともに古戦場としての歴史にも触れてほしいという要望から、近年になって水汲み場から崖の上の石碑に続く道が整備された。地域住民にとっては、質の高い湧水の湧く場所というだけでなく、源平の戦いの場所としての意義も大きいと考えられる。湧水や周辺地域の謂れを伝承として住民が保全活動を続けてきた歴史があり、そういった背景が名水指定や行政の協力に繋がっているのではないかと考える。

Kさんによれば、弓の清水がある中田地域は井戸を使っている家庭が多く、弓の清水まで水を汲みに来る住民は少ない。少し離れた射水地域、福岡町などの地域からの利用者はある。中田地域では、上水道は整備されているが、農業用水としての使用が主で、生活用水には井戸水を使うことが多い。井戸水は大切にされており、「井戸水を守る会」も立ち上げられているという。地元では湧水の謂れはよく知られており、当たり前の場所として認知されているため、訪れる人はあまりいないが、名水とし

て対外的にも有名であることから、黒部や東京など、遠方からの訪問客もいるという。

Sさん、Kさんからの聞き取りによると、常国旧蹟保存会の主な活動は清掃である。水汲み場周辺は落葉などですぐに汚れてしまうため、清掃は重要であるという。年2回は地域住民全員による清掃活動があり、雪のない時期は月に2回数名で清掃を行っている。その他に、観音祭りの開催や、県政バスや子どもの「ヒストリックウォーク」の案内も引き受けている。その一方で、水量や水質の測定等、水そのものの管理は市が担当している。名水指定を受けているため、高岡市の地域安全課が、定期的な水質検査を実施しているという。検査結果は飲用可能かなどの判断に用いられる。

このように、水そのものは市が管理し、周辺環境は保存会で整備するという形を取っている。「とやまの名水」には県の定めた管理マニュアルがあり、それに従って水質検査等の管理が行われている。富山県は水環境の保全に力を入れているが、保存会はその活動を外部に向けて宣伝することは少ないという。その一方で、富山県が木曾義仲のPR活動を行っているため、その一環でメディアなどから取り上げられることもある。

3. 不動滝の霊水

1) 湧水の概要

不動滝の霊水は、富山県南砺市の早乙女山中腹の不動滝近くに位置する。西大谷川水系にある。平成の名水百選に指定された。江戸・天保期の干ばつの際に、井波の常永寺の住職が不動滝に祈ったところ、雨が降って住民を救ったとの伝説がある(日本地下水学会 2009)。湧水の保全団体である「七村郷Vセブン委員会」会長のMさんによると、湧水そのものは古くから利用されていたと考えられるが、詳しい歴史は伝説と関係のある常永寺にも残っていないという。水脈が豊富で山周辺の多くの場所から水が湧き出ており、平成の名水百選に選ばれているのもそのひとつである。

2) 周辺環境

山の中にある湧水であり、徒歩で訪れるには時間を要する。早乙女山を登る道の途中に東屋があり、その近くに、屋根のついた水汲み場が設置されている。水汲み場の奥には不動滝に続く道がある。水汲み場や滝への道などは七村郷Vセブン委員会によって設置されたものである。

3) 保全の現状

不動滝の霊水は、地元住民の団体である「七村郷Vセブン委員会」の活動によって保全されている。前述のMさん

と南砺市役所のKさんからの聞き取りによると、七村郷とは、不動滝周辺の井波地域南山美地区の7集落を指し、平成14年に各集落から2名ずつ代表を選出して結成された。当時は湧水のある八乙女山で家電製品などの不法投棄が問題になっており、その撲滅が結成の目的であった。

委員会の主な活動内容は、七村郷の自然と環境の保全、不動滝の周辺環境の美化活動、霊水を活かした地域おこしである。現在は、月に一度清掃活動があり、水汲み場の管理や林道の不法投棄ごみの回収を行っている。Mさんによると、初期の清掃活動では、ダンプカー2台分のゴミが回収され、清掃で湧水の水量も増えたという。そのほか、水汲み場周辺の環境整備、湧水の定期的な水質調査も実施されている。利用者からも様々な要望が届き、それに応える等の形で、徐々に整備が実施されている。普段の維持管理は委員会で行っており、道路整備などの大きな事業には市が対応している。

春と秋には南砺市役所や周辺の中学校、ボランティア団体などと連携した、計130名以上による大規模な清掃活動が行われている。初めは委員会と警察のみでの活動だったが、中学校に声をかけて標語を募集したことで、活動が広がっていったという。

15年間の活動により、来客数は月1000人から月5000人に増加し、観光スポットとしても紹介されるようになった。飲料や炊事などの生活水としての利用が多く、1日200人が訪れることもある。富山県と石川県からの利用者が約半数ずつである。愛知県などの遠方からの利用客もあるという。

Kさんからの聞き取りによると、富山県は名水の保全や地域の清掃活動をPRしたいと考えており、多くの地元住民が参加する七村郷Vセブン委員会の活動は、県にとっても大きな意義のあるものであるという。具体的には、マスメディアに取り上げられたり、県のホームページに記載されたりといった協力を得ている。メディアに多く取り上げられたり、多くの人が訪れたりするようになったのは、名水百選の効果もあるのではないかとのことである。

4. 瓜裂清水

1) 湧水の概要

瓜裂清水は、富山県砺波市庄川町岩畔地内の丘陵地の麓にある。今からおよそ600年前、当時地方教化中だった、本願寺5世で井波瑞泉寺の開祖である綽如上人がこの地で休息した際、馬のひづめが陥没し、その跡から清水がこんこんと湧き出してきた。その清水に里人が献上した瓜を冷やしたところ、瓜は自然に裂け、その冷たさとお

いしさに上人はことのほか満足し、自らこの清水を「瓜裂清水」と命名したという（日本地下水学会 1994）。昭和31年に庄川指定文化財に、昭和62年3月には「史跡名勝」として指定された。

2) 周辺環境

水田に面した道路の反対側に短い階段があり、降りた先に湧水のため池がある。地図上では民家も確認できるが、周辺は水田が多い。ため池の横には東屋があり、周囲には数体の石仏が置かれている。

3) 保全状況

瓜裂清水を管理している保全団体等は見つけることができなかった。管理元は行政となっているが、市役所等から現在の湧水の状況について情報を得ることはできなかった。市町村合併により、以前の湧水の様子に詳しい職員の方もいないとのことであった。とнами散居村ミュージアム職員のMさんと同施設に紹介していただいたSさんからの聞き取り調査によると、以前まで湧水の周辺の手入れをしていた方は既に亡くなり、後を継ぐ住民等

もいないという。現地調査の前に、町内会の方から1、2年前から水量が大きく減ったとの情報を得ていたが、実際に訪れた際には、肉眼では湧出は確認できなかった。

Sさんによると、かつてため池は洗い場となっており、大根やこの地方名産の根深ネギを洗うのに用いられていたという。また、江戸時代には湧水の近くに、渡し舟から通じる大切な道が通っていた可能性があり、江戸からの使いがこの湧水で喉を潤したとも考えられるという。

V 水質調査

1. 調査の手法

調べた項目は、水温、電気伝導度、pH、湧水に含まれる溶存化学成分量である。溶存化学成分は湧水をポリ瓶で持ち帰り、イオンクロマトグラフィーによって測定した。それ以外は現地で測定を行った。計測した数値は、日本地下水学会(1994, 2009)の同項目のデータと比較し、変化を調べた。結果は表1、図3、図4の通りである。

表1 各地点の水質

	採水年月日	EC (mS/cm)	pH	HCO ₃ ⁻ (mg/L)	Cl ⁻ (mg/L)	SO ₄ ²⁻ (mg/L)	NO ₃ ⁻ (mg/L)	Na ⁺ (mg/L)	K ⁺ (mg/L)	Ca ²⁺ (mg/L)	Mg ²⁺ (mg/L)
弓の清水*1	2006.11.29	156.0	6.0	25.9	15.0	12.2	23.2	8.8	1.2	13.2	3.7
-源泉	2016.8.30(曇り)	134.9	6.2	22.0	10.2	14.2	14.0	8.2	0.9	9.4	2.9
-ため池	2016.8.30(曇り)	136.8	6.8	18.8	10.3	14.5	13.7	8.0	0.9	8.8	3.0
-水汲み場	2016.8.30(曇り)	136.3	6.1	19.6	10.2	14.7	13.9	8.1	0.9	9.0	3.0
不動滝の霊水*1	2006.11.28	82.0	6.9	29.3	5.5	2.8	3.1	5.0	0.1	8.8	1.0
-不動滝	2016.8.31(雨)	50.8	7.8	20.4	2.6	2.9	2.8	4.5	0.2	3.5	0.8
-水汲み場	2016.8.31(雨)	94.3	7.4	40.8	5.3	3.3	3.0	6.2	0.1	8.5	1.1
瓜裂清水*2	1989.8.31	89.9	6.3	43.3	4.5	5.4	2.2	6.7	0.6	9.2	3.6
-ため池	2016.8.31(雨)	87.2	7.0	43.9	3.5	5.8	1.1	5.3	0.5	7.1	2.4

*1 日本地下水学会(2009)による *2 日本地下水学会(1994)による

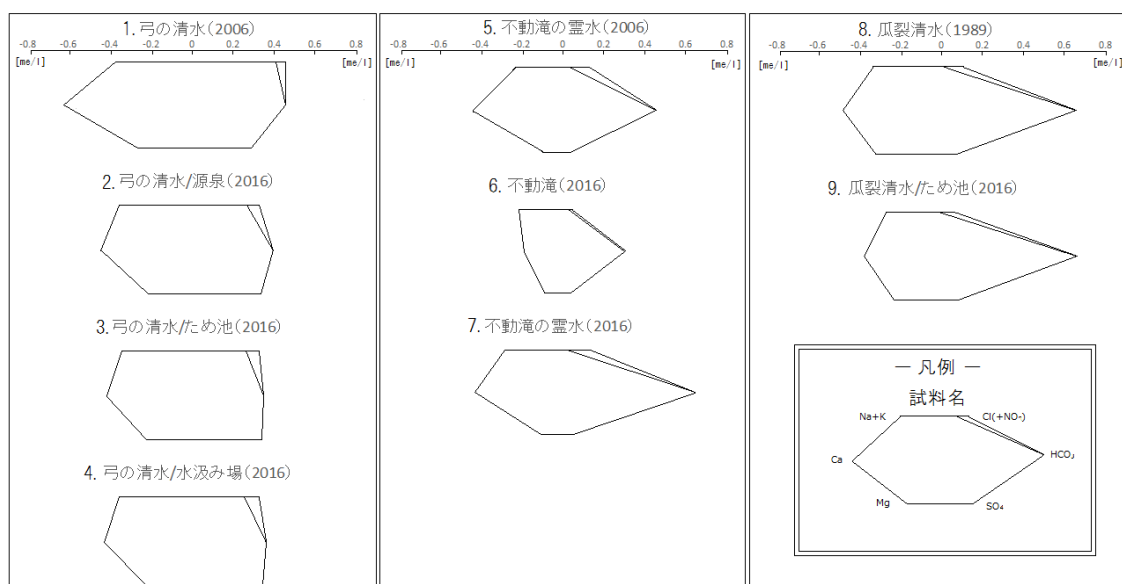


図3 水質組成図（スティフダイアグラム）

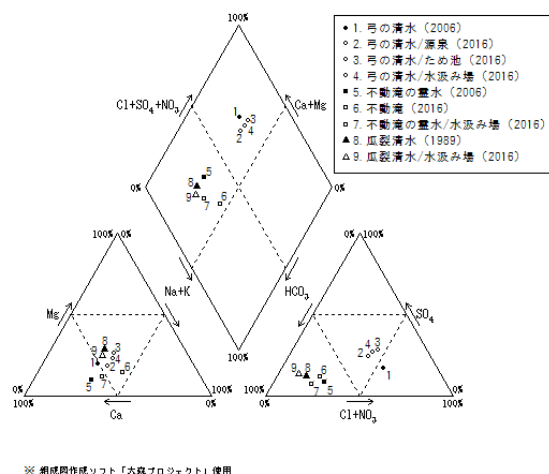


図4 水質組成図（トリリニアダイアグラム）

2. 採水場所とデータの入手先

「弓の清水」では、源泉・ため池・水汲み場の3地点から採水し、このほかに日本地下水学会(2008)から2006年のデータを得た。「不動滝の霊水」では、水汲み場と不動滝の滝つぼ付近から採水し、同じく日本地下水学会(2008)の2006年のデータを用いた。「瓜裂清水」は湧出が停止していたため、ため池から採水した。これに加え日本地下水学会(1994)の1989年のデータを使用した。高岡市役所と南砺市役所から2015年度の水質検査結果を入手したが、今回調べた項目と同一のものが少ないため、比較対象には用いない。自治体による水質検査は、主に飲用の可否と汚染の有無を調べるものであり、湧水の化学的性質を明らかにするものとは異なる。

3. 分析結果

「弓の清水」は河岸段丘から湧出する湧水であり、比較的濃度の高いCa-HCO₃型の水質である。日本地下水学会(2009)の2006年のデータでは、NO₃⁻濃度が10mg/L以上であり、日本地下水学会(2009)では、土地利用状況から、畑地への施肥が要因であると推察されていた。2016年8月のデータでは、2006年のデータと比較すると、Cl⁻、NO₃⁻、Ca²⁺の割合が下がっているが、そのほかは軒並み同様の結果となっており、Ca-HCO₃型の湧水の特徴を示している。NO₃⁻濃度の低下は、これが肥料由来の成分であるとするれば、周辺の土地利用の変化、施肥状況の変化、季節の影響などが原因として考えられる。源泉・ため池・水汲み場の3地点の水質に大きな違いはなく、周辺環境が保たれている様子がうかがえた。また、トリリニアダイアグラムを見ると、弓の清水は他ふたつの湧水とは異なる傾

向を示していることがわかる。弓の清水が、他ふたつの湧水と距離が離れていることが要因と推察される。

日本地下水学会(2009)によれば、とやまの名水の中では、「不動滝の霊水」はイオン濃度が比較的低く、性質はCa-HCO₃型に分類される。3地点の湧水のうち、もっともpHが高い。これは同じ富山県内の湧水では、山地・丘陵地のものに当てはまる特徴であり、「不動滝の霊水」も山地に位置する湧水である。2016年8月のデータは、HCO₃の数値が2006年より高かったが、そのほかは概ね同様の結果となった。今回の調査では不動滝からも採水し、成分の比較を試みた。不動滝の水質は、霊水の水質とは違う特徴を示した。霊水よりも更に濃度が低く、スティフダイアグラムの形状も大きく異なっている。

「瓜裂清水」は、湧出が確認できない状態ではあったが、スティフダイアグラムの形状は、1989年のデータと比較的近いものとなった。日本地下水学会(1994)によれば、蒸発残留物が64.0mg/Lとやや低めであり、また、溶存酸素飽和率が78.6%でまだかなりの酸素が含まれていることから、この清水は地表からの浸透水が浅層を流下し、わりあい早い時期に湧出してきたと考えられるという。1989年時点ではNO₃⁻の数値がいくぶん高めであり、日本地下水学会(1994)では、湧水の後背地の台地に水田が開けていることが原因として考察されている。また、水質はCa-HCO₃型に分類できるが、Na⁺の割合が高めであり、岩質的な影響が考えられると述べられている。

VI 各湧水の比較と考察

1. 歴史的観点

3地点の湧水にはすべて故事来歴があり、古くは平安時代、新しいものでも天保年間の伝承が残されていた。いずれも地域に古くから根付いた水環境であることがうかがえる。

このうち特に「弓の清水」は、地域において歴史的側面が重視されていると考えられる。「弓の清水」がある中田地域は、木曾義仲にまつわる遺物や物語がいくつも残されている場所であり、「弓の清水」はその一端を担う存在である。「弓の清水」のある中田地域は、地下水に恵まれており、井戸を所有している家庭が多い。そのため、同じ水源の湧水である「弓の清水」まで水を汲みに来る住人は少ない。その中で100年以上に渡って保全活動が行われてきた事実は、当地域における湧水の故事来歴の重要性を示しているといえる。木曾義仲ゆかりの地であることは、地域住民にとってのアイデンティティとも呼べるものであり、その文脈の中に位置付けられることで、「弓の清水」は地域と深い結びつきを得たと考えられる。

自然環境の保全が継続して行われるには、その環境が地域や住民にとって意義のあるものでなくてはならない。歴史や地域性との関わりが、活発な活動をもたらすのではないかと推察される。

また、名水に指定された時期は湧水によって異なっている。「瓜裂清水」は1985年の「名水百選」に選定され、「弓の清水」「不動滝の霊水」は2008年の「平成の名水百選」に選定されている。名水百選に選定された時期の違いが、現在の湧水の保全状況の違いとなって表れているとも考えられる。比較的最近になって選定された「平成の名水百選」の湧水は、保全団体等の基盤が整っているが、選定から30年以上が経過した昭和の「名水百選」については、湧水を取り巻く環境が変化し、地域の中で風化しつつあるものも存在する可能性がある。

2. 保全の観点

3地点の湧水のうち「弓の清水」と「不動滝の霊水」は、保全団体によって管理されている。保全団体設立の経緯や歴史は異なるが、その保全活動の様子は似ている。どちらも主な活動内容は清掃であり、日常的な環境の整備は保全団体が担っている。それに加えて行政との連携が取られており、大規模な整備や水質検査、対外的な宣伝の一部は行政が行っている。また、どちらの団体も地域住民から結成されており、組織的かつ継続的に活動が行われるような仕組みが整えられている。集落や自治会から決まった形で代表者を選出する方式を取ったり、若い世代への活動の普及を行ったりすることにより、活動を次世代へ繋げている様子が見えてきた。

一方、「瓜裂清水」は保全団体が見つからず、行政側からも湧水の現在の状況について情報を得ることはできなかった。市町村合併によって、情報の引継ぎや環境の管理が難しくなっているとも考えられる。湧水の手入れをしていた方が亡くなり、跡を継ぐ住民等がないという現状からは、地域の高齢化の影響も見て取れる。湧水が後世に伝えられていくには、地域内の組織的な保全の仕組みと、地域と行政との協力関係が重要であると考えられる。

3. 利用の観点

3つの湧水のうち、「弓の清水」と「不動滝の霊水」は日常的な利用がある様子が見られた。「弓の清水」は周辺の住民よりも、富山県内の近隣地域からの利用が多く、遠方からは木曾義仲にまつわる地として訪れる観光客もいる。「不動滝の霊水」は利用客数が月5000人にも登り、その半数近くは石川県からの利用客である。県内外から

定期的に水を汲みに来る人々が訪れ、ポリタンクをいくつも抱えて帰る姿も少なくないという。用途はいずれも飲料水や料理用水が主である。

「不動滝の霊水」は山の中腹にあり、3つの湧水の中では最もアクセスに時間を要する。このような条件下で利用客を集めているのは、宣伝の力も大きいと考えられる。水環境の保全を推進する行政が、対外的な宣伝に協力することで、湧水の知名度を高めていると考えられる。「弓の清水」は、湧水としてだけでなく、史跡として宣伝されている面もある。

4. 水質の観点

3つの湧水はすべて水質の分類では、Ca-HCO₃型に振り分けられる。今回の調査で計測したデータを過去のデータと比較すると、一部の項目では違いが見られたが、全体的には似た傾向であったといえる。特に「弓の清水」「不動滝の霊水」では、行政によって定期的に水質検査が行われており、厳正に管理されている様子が見えてきた。

VII まとめ

今回調査を行った湧水は、周辺環境の両面において、地域住民と行政によって熱心に保全されているものもあれば、保全が十分ではなく、水量が低下してしまっているものもあった。保全団体が存在する湧水については、湧水の話来歴や地域との結びつきには違いが見られたが、保全の仕組みは類似していた。端的に表せば、地域住民から成る保全団体が、行政と協力して維持管理を行い、対外的な宣伝や次世代の教育で湧水を普及させていくという形が取られていた。これが現代の地域の環境保全活動のスタンダードなのではないかと考えられる。地域の中だけで環境を守るのは難しい面もあり、行政の力も必要とされている。しかし、日常的な環境の整備もまた不可欠であり、地域内の活動がなければ保全は成り立たない。また、高齢化が進む現代においては、保全団体の世代交代は勿論のこと、他地域や次世代に存在を広めることが、湧水を後世に伝える上で重要だと考えられる。

名水百選は、その選定に数値的な基準は設けられておらず、指定から除外されたという例もない。特に選定から長く経つ昭和の「名水百選」は、現状が把握されていないものもあると考えられる。

名水百選は、飲料に適した水を選出することを目的としてはいない。しかし一般的には、名水百選といえば「おいしい水」「自然に湧いた飲料に適した水」というイメージが定着していると推察される。近年「名水ブーム」が

起こり、その状況は、田知本(2002)に記述されている、
「市販のミネラルウォーターに飽き足らない人は天然の
「名水」を求めるようになる。「名水」のある場所には天然水を求めて連日、多くの人が行列を作っている。」「ある「名水」のホームページには石川県の「名水」として45ヵ所が登録されている、名水探訪のためのガイドブックさえ出版されている」といった光景が象徴している。また、こうした名水ブームの背景には一般の水道水がまぎなくなってきたことに加え、ミネラルウォーターブームに見られる健康志向があげられると指摘されている。それが経済的な効果を生み、地域を活性化させている事例も少なくない。その一方で、水のブランド化の一面が強くなり、本来の目的である、地域における水環境の保全には、光が当たりにくくなっている側面があるといえる。保全の内容に関しても、水辺環境の整備だけでなく、飲用可能であるかを調べる水質検査も必要になっている現状がある。「名水百選」はその飲用を勧める指標ではないが、昨今の「名水ブーム」などにより、飲用可能かどうかなどの問い合わせも多く、保全団体・自治体は対応を迫られている。

地域外には知られることのなかった、優れた水環境を世に広める上で、「名水百選」は重要な役割を果たしたといえる。しかし、その一方で、観光客増加の弊害による周辺環境や水質の悪化が懸念されるなど、知名度の向上が必ずしも地域の水環境の保全を促進につながっているとはいえない事例も見られる。「名水」の美しい環境やおいしさだけに着目するのではなく、それを守り伝えようとする地域の活動や、水と切って切り離せない地域性こそを重視するべきであると考え。

また、時代の流れの中で地域が変容するにつれ、地域内でも湧水の価値が忘れ去られてしまっているケースも

あると考えられる。対外的な宣伝に力を入れるだけでなく、地域住民の湧水に対する認識を高めることが必要であると推察される。

選定から30年の節目を迎えた今、「名水百選」の消費されるコンテンツとしての在り方を見直し、改めてその地域資源としての持続の方策に目を向ける必要があると考える。

謝辞 本研究で現地調査をするにあたり、湧水の分析調査にご協力いただいた大八木英夫先生（現日本大学文理学部地球科学科助教）、お忙しい中インタビューと現地の案内に応じてくださった、湧水の保護団体の皆様、市役所の職員の皆様、地域にお住いの皆様に、心から感謝申し上げます。

注

- 1) 環境省「「平成の名水百選」について」（2008年6月5日）
[<https://water-pub.env.go.jp/water-pub/mizu-site/newmeisui/info/kijyun.html>]（2016年11月30日最終閲覧）
- 2) 富山県「とやまの名水」（2016年10月13日）
[http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1207/kj00001259.html]（2016年11月30日最終閲覧）

文献・使用ソフト

- 田知本 正夫 2002. 石川県の名水の水質調査. 石川農短大報 31: 1-3
- 日本地下水学会 1994. 『名水を科学する』, 技法堂出版.
- 日本地下水学会 2009. 『新・名水を科学する』, 技法堂出版.
- 「大森プロジェクト」<http://bugs.la.coocan.jp/> (2016年3月現在)

地図に表れた高岡の地域理解

ー観光マップとイメージマップー

寺垣 沙織

I はじめに

1. 調査目的

地域創成、まちづくりが叫ばれる今日、画一的な地域づくりではなく、その土地の魅力や価値を見据えた都市開発・地域づくりが求められている。こうした地域・まちづくりを進める上で、「内発型観光」をしていくことに意義があるということをまとめた論文がある（芳賀・倉原 1997）。従来の観光は企業などの一元的事業主体により経済性・効率性優位に進められ、その中で利潤性や利便性は高められてきた一方で、地域住民の生活が豊かになったかということには疑問がある。しかし、本来「観光」というものは、観光客に自分達のまちの誇り・良さを感じてもらおうという面もある。地元生活者がまちに対して「何を知っているか、見ているか、理解しているか」を認識・評価するとともに、そのことを通じてわがまちへの関心・愛着・自信が高まっていくような観光の視点が必要である。それにより、地域の魅力を地域内外で響き合わせながら進められる観光開発を「内発型観光」と位置づける。芳賀らの論文の中では、内発型観光の例としてある地域でワークショップを行い、住民たちの中でその地域の魅力を出し合い、地域の理解を深め、最終的にそれを観光マップにまとめるということを行っている。その中でワークショップそのものが地域の理解を深めまちづくりの一端を担っていること、従来型の観光と異なり、住民自身がまちに誇りをもって紹介できるようになることが述べられている。この論文から、地域を理解・認識することは住民にとっても、また観光をする外部の人間にとっても意義のあることだといえる。

外部者が知らない土地を訪れる際、必ずネットや紙などの媒体は何であれ、地図を見るのではないだろうか。地図から、地域を理解することはできないのだろうか。芳賀らの論文内でも最終的にまとめる手段として観光地図が使われているように、地図はある特定の地域空間を情報化するのに適したメディアである。ではその地図から、外部者はどのように地域を理解しているのだろうか。

今回の調査を通して高岡の外部者である筆者が地図を

通してどのように高岡を理解したのかについて述べ、そこから地図がどのように地域を理解するのに役立つのかについて考察したい。

2. 調査方法

今回の調査では、主に観光マップとイメージマップの分析を行う。最近では観光地を訪れると、イラストが入っているもの、美しい配色のもの、コメント付きのものなど、各都市によって様々な工夫を凝らした観光用地図が作成されている（岩川・前田 2010）。この観光用地図には作成者の考えるその土地の魅力が詰まっていると考えられる。また、観光地である高岡では多くの観光用地図を無料で入手することができるため、今回の調査に適していることから、本研究ではこれらを総称して「観光マップ」と呼び、主な分析の対象とする。また、住民の方がどのように地域を認識しているのか知るために、直接的ではあるが高岡市民の方に「高岡の地図を書いてください」とお願いし、高岡のイメージマップを書いてもらったものを分析の対象とする。また高岡を知る補足の調査として、聞き取り調査を行った。

1) 観光マップの収集

事前に観光協会の方に高岡で各種発行されている観光マップを郵送していただいた。また、観光地などを訪れるなどして街をめぐり、さらに観光マップを入手した。結果、計14の観光マップを入手した。

2) イメージマップの収集

まちを歩いている中で話かけられそうな方をお願いをし、高岡のイメージマップを書いていただいた。「東京からきた学生で今大学の授業で高岡の地域調査を行っています。住民の方が高岡をどう理解しているのかについて知りたいと思っています。唐突ですみませんが、高岡の地図書いていただけませんか。高岡駅を起点に書いていただければと思います。お名前とよろしければお住いの地域を教えてください。」という質問を繰り返し、お願いした。書く際は近くで見させてもらい何を始めに書くかなども見させてもらった。10枚とサンプル数が少ないこと、またその集めたサンプルが高岡駅周辺のみであるこ

表 1 観光マップ一覧

	名前	作成者
「高岡」を紹介したもの	歴史都市高岡まち歩きマップ まわるん	高岡市観光交流課
	高岡おもしろめぐり	公益社団法人高岡市観光協会
	ほのぼのイラストマップ	大川陽子
	たかおか福つかみマップ	沢田真弓
特定のテーマ	高岡公共交通マップ	高岡市公共交通利用促進協議会
	まちなかアート散策マップ	高岡市都市創造部都市計画課
	ふるさと高岡ポケットガイド	高岡市経営企画部文化創造課
	万葉線沿線マップ	万葉線株式会社
	たかまちMAP	寿酒販
	山町筋フロアガイド	山町筋フロアガイド制作委員会
特定の場所	IKOKANAいこまいけ金屋町	金屋町まちづくり協議会他
	伏木・吉久・二上山・雨晴見どころ20選	高岡市観光協会
	高岡古城公園散策ガイド	高岡古城公園管理事務所
	戸出のいま・昔ものがたり	清都勢憲

(出典) 調査に基づき、筆者作成

と、こちらの言葉の説明のあいまいさもあるため、今回の研究では補助的なものとして用いたい。

3) 聞き取り調査

多くの観光地で置いてあり、かなり利用されている「歴史都市高岡街歩きマップ まわるん」を作成している高岡市観光交流課の方にどのように観光地図を作成しているかについてお話を伺った。また、戸出町にまちおこしのための手書きの観光地図を作成した方にお話を伺った。そのさい高岡の吉久地区の地域振興に力を入れておられる前年まで富山大学芸術文化学部の教授であった丸谷教授にもお話を伺った。以上が調査方法であり、本稿の構成は以下に示す。

Ⅱでは入手した観光マップとイメージマップの分析を行う。ⅢではⅡの分析からわかった「高岡」について述べ、また今回の調査を通して筆者が理解した高岡の魅力や、高岡がどういった場所なのかについて述べる。最後のⅣで本稿の内容を簡潔にまとめる。

Ⅱ 地図の分析

1. 観光マップの分析

収集した観光マップを分析し、「高岡」を紹介したもの、特定の場所を紹介しているもの、特定のテーマに沿って描かれたものの3つに分類した(表1)。また、この15個の地図の範囲を地図に表した(図1)。ここから、「高岡」の観光は、福岡、伏木、戸出といった一部を扱った地図

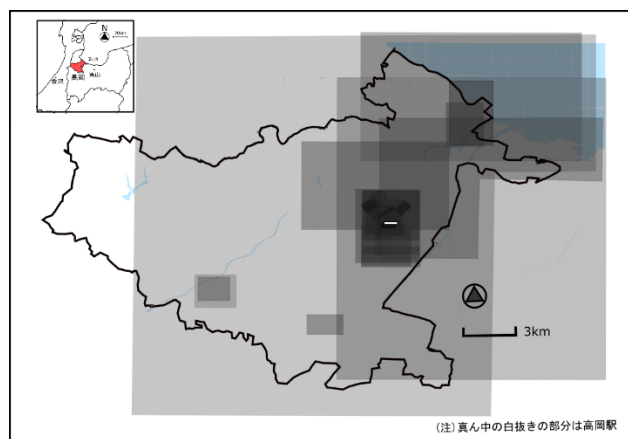


図 1 観光マップの描画範囲 (筆者作成)

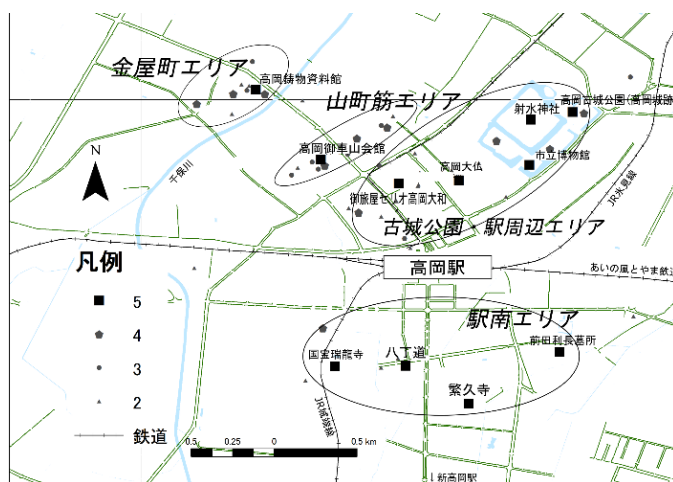


図 2 高岡駅周辺観光スポットの分布 (筆者作成)

が存在しているものの、高岡駅周辺が観光地としてアピールされていることがわかる。そこで、今回は具体的な小地域ではなく、「高岡」といったときに注目すべきスポットがどこなのかについて分析した。上記から、中心スポットは駅周辺にあると考え、およそ駅周辺の同じ範囲を扱っているまわるん、高岡おもしろめぐり、福つかみマップ、ほのぼのまちめぐり、藤子F不二夫ふるさとポケットガイドの5つの地図を中心に分析した。

分析のため、五枚の地図に直接書き込まれている観光地、お店、像、といったポイントをすべて抜き出した。そこから、5枚の地図すべてに描かれていたスポットを5、4枚の地図に描かれていたものを4といったようにして、地図に表した(図2)。

この点の分布から、注目すべきスポットは、金屋町、山町筋、古城公園・駅周辺、駅南に集中していることがわかる。これは、金屋町、山町筋、古城公園の詳細地図があることから、そのことがいえる。

観光マップからは、どのあたりにスポットが集中しているかといった範囲を規定することはできるが、具体的にそこに何があるのか、どうしてそれが注目すべきスポ

ットなのかといったことまでを書き込むのは紙面の限界もあり、難しい。そのためその土地を深く理解することは難しいかもしれないが、しかしながら地図を眺めることで街の全体を把握することができ、現地で実際に得た情報をその範囲にあることをイメージできる。

2. イメージマップの分析

書いてくださった方によってさまざまな「高岡」があった。地図を書くという行為の中には、どういう要素が描かれるのか、どういう順番で描かれるのか、どういう太さ・濃さでそこを描くのか、その場所に対するその人の気持ちや考えが如実に表れると考える。サンプル数は10と多くないが、大まかに分け、高岡駅周辺を高岡と認識し、観光マップとほぼ同じ要素が書かれているものが8、高岡市全体を書かれたものが1、お店などをこまかく書き込まれたものが1に分類した。高岡駅周辺を書かれたものにも一つ一つ特徴があったが、今回は特に特徴的なものをいくつか紹介したい。

シンプルに要素と道がかかれているもの。観光案内所の方に書いてもらったもので、1で分析した金屋町、山町筋、古城公園周辺、駅南といった観光名所が簡潔に書き込まれている。藤子・F・不二夫ミュージアムが描かれているのが新しい。

範囲はほぼ上記のものと同じだが、細かく書き込みがある。(ペンは書きにくいということで、鉛筆で書いていただいた。)道を思い出しながら説明してくださり、細かい道も書き込んでおられた。見たことのある地図を思い出すというより、自分の歩いている道を想像しながら書いておられる感じであった。高岡駅を中心に書いてもらおうとして前もって筆者が高岡駅を真ん中に入れていたのだが、北を上にするとうどうも書きにくいようで、しかし地図は北が上という考えがあったようで、結果高岡駅のみ文字が反転した地図になった。地図の上が南になっており、普段過ごされている頭の中の地図では、高岡駅が上という意識が存在していることがよく分かる。

大まかな市区町村が細かく書いてあり、また二上山なども書いてある。この地図を書いてくださった方の中で「高岡」とは高岡市全体を指すものであることがわかる。駅が書き込まれているが、鉄道の線はなく、反対に8号という太い道路の線が描かれていて、鉄道の印象が薄いことがわかる。

切り取られた範囲がかなり小さく、お店が細かく書き込まれている。おすすめのお店や、通りによってどんな雰囲気のお店があるのかについて紹介しながら書いてくださった。観光地図には書き込まれていない、夜開いて

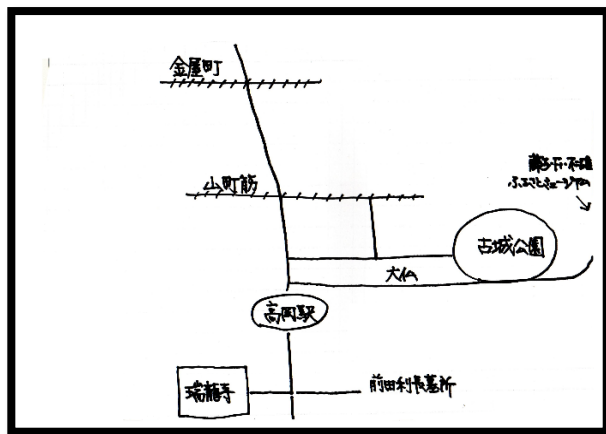


図3 観光マップとほぼ同じ要素が書かれているもの

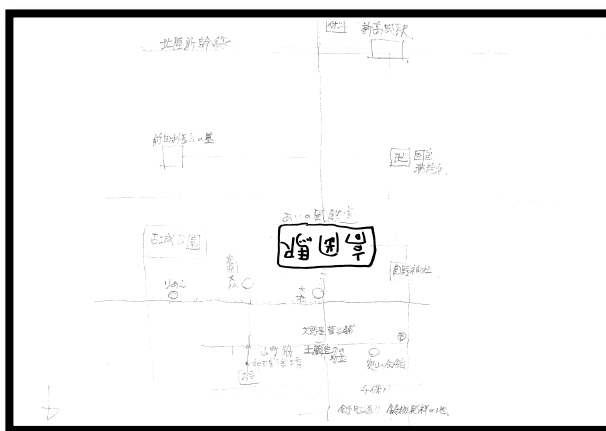


図4 観光マップとほぼ同じ要素が書かれているもの

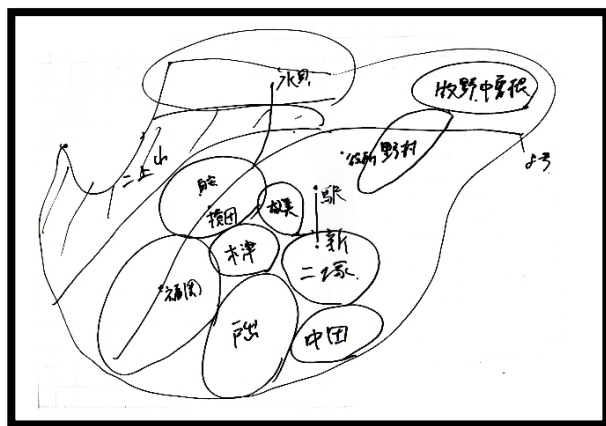


図5 高岡市全体を書かれたもの

いる飲み屋さんなどについて書かれており、他の地図とは違う目線から高岡を見ることができる。

III 調査からの考察

1. 地図から理解できた高岡

今回の調査で驚いたことは、「高岡」という地名の指す狭さである。初めは高岡市全体を高岡と認識していたが、



図6 お店などをこまかく書き込まれたもの

観光マップが高岡駅周辺に集中していること、手書き地図を書いていただいた際に、「出身が伏木だから、高岡はようかかん」と言われたことや、戸出町でお話を伺った際も合併の結果だからといったお話を伺ったことから、高岡市民の方にとって、「高岡」という地名のイメージは図2で示した程度の範囲に限られていると推測できる。

また地図から高岡で重要とされている観光施設がどこで有名なお店がどこにあるのかについても分かった。一方で、そこが具体的にどんなところなのか、どうして有名なのかは紙情報の限界から文字や絵、写真の少ない情報しか得られなかった。これから、地域について詳細なことが観光マップから言えるわけではないが、全体的にどのようなものがどこにあるのか、といったことは俯瞰してみることができる。

ただ、観光マップや手書き地図から狭義の高岡(図2)についてはおおよそ理解できたように思うが、広義の高岡(高岡市全体)についてよく分からないことが問題のように思う。高岡という地名イメージが現地の人にとっては駅周辺でしかない一方、外部者としては市全体を高岡としてとらえてしまう。まわるんの中に戸出の七夕祭りといった周辺部の情報が載っていたり、伏木に国府があったことからでたつながりであろう万葉から「万葉の

里 高岡」という道の駅があったり、氷見に近い雨晴海岸を手書き地図に書いておられる方がいたり、「高岡」の地名イメージの中には、広義の高岡の要素が埋め込まれているように感じた。にもかかわらず、高岡で収集した地図からは狭義の高岡のイメージが強かった。内部化している、広義の高岡を形作っている周辺部についても知りたいと感じた。そこを知ることでもっと多面的な「高岡」を知ることができると思う。今回中心部から離れた戸出町に訪れたが、高岡駅周辺とは違うのどこか、田舎の静けさを感じることができた。「高岡」の都市イメージに周辺部が利用されているなら、その分周辺部もそこにうまく乗つけられるとよいと思った。狭義の高岡だけで高岡に行った気になるのを避けられるとよい。地図は情報の深さはともかく、そこに町が存在していることを示す分、周辺部を忘れる危険を示唆し、また地図の濃淡を見ることで、情報がどこに偏っていて、どこに情報が少ないのかを考えることができる。

2. 地図から理解できる地域

地図を見ることである地名が指すイメージの範囲を考えることができる。また、全ての情報は書き込めないもので、作成者の情報の選択が行われることで、どこを作成者がこの地域において重要だと考えているかがわかる。一方そうして選択された分、抜け落ちた情報について注意しなければならない。

限られた範囲になるが、地図を眺めることで全体像を把握することができ、現地で得た情報をその地図の中に落とし込むことができる。これはその土地で理解していることまとめるのに地図が適しているということが言える。また知らない人との会話においても、場所についての共有をしたうえで会話ができるので、地図を見せることや、書いて説明をすることは会話の円滑材として利用できる。また自分の中で縮尺の違う地図を持っておくことで、縮尺を小さくする(地図の拡大をする)と情報の書き込みをすることができ、縮尺を大きくする(地図を縮小する)と情報量の密なところ、疎なところを一步引いてみる事が出来、情報がない部分についても考えることができる。

IV おわりに

地域を理解するために地図は必要条件だが、十分条件ではない。初めの土地の全体イメージをつかむとつかかりとして、よいと考える。興味をもっているそのうえで、範囲や特に重要なところがどこなのか理解するのに役立つ。一方で、土地についてのより深い理解をするために

は、地図を見るだけでは足りない。その理解の箱を作った上で、より深く理解するためには、さらなる何かをする必要（お話を聞く、現地を巡る、ご飯を食べる、感想を人に話す、など）があると考えてる。

その土地にあった様々な地図の描き方を模索することでその地域についてより深く考えることが出来ると思う。そういう形で、地図は地域振興に役立てるのではないだろうか。

謝辞 高岡市観光協会の木谷様、高岡市役所観光課の青木様、戸出によっといで事務局の清都さま、丸谷様、また街頭で地図を書いてくださった皆様、調査中質問があいまいで困らせてしまうこともあり、本当に申し訳ありませんでした。拙い調査にご協力、本当にありがとうございました。

文献

- 明石賢作・小浦久子 2012. 散策のための観光マップのメディア特性に関する調査研究－奈良町の観光マップを事例として. 日本建築学会近畿支部研究報告書, 計画系 52:657-660. .
- 荒川俊介・谷口守 1995. 認識に基づく地域設定法とその経年的分析への応用. 土木学会論文集 524 : 59-67.
- 岩川健志・前田博子 2010. 観光マップが観光者の歩行ルートとまちの魅力の感じ方に与える影響. 豊田工業高等専門学校研究紀要 42 : 87-92. .
- 高橋美江 2011. 地図の可能性を表現する. 地図49(2):25-32.
- 芳賀伸也・倉原宗孝 1997. 住民主体のまちづくりに向けた内発型観光の取り組みと評価－オホーツク 5 町村の観光マップづくり事業を通して－. 日本建築学会北海道支部研究報告集 70:409-412.

高岡における集落営農が抱える問題について —二つの営農組合の事例から—

大友久代

I はじめに

日本における集落営農は、農地や農業機械を共同管理することで少ない人数で比較的大きな農地の管理を可能にする仕組みであり、近年の農業従事人口の現象に伴う農の担い手が減少する傾向において重要な存在となっている。また、集落営農による農地の管理は農地荒廃を防ぎ、生態系や住環境の保全に寄与している。そして伝統的な集落単位で行われることの多い集落営農は、コミュニティ内の交流を促進する機能も担っている。このように集落営農は多様な重要性を有する。しかし、近年の少子高齢化・東京一極集中による集落の人口減少から、後継者を確保することが困難であることが考えられる。現代農業2015年8月号では、「集落営農の世代交代をうまくやる」という特集が生まれ、関西地域の集落営農組合を事例に世代交代の問題点や解決法が紹介されている。これらは個々の営農組合の状況によって異なるため、高岡の集落営農には独自の問題があることが予想される。高岡市の営農組合はどのような後継者問題を抱えているかを調査・分析し、どのような解決方法があるかを考察することを本研究の目的とする。

高岡市の集落営農組合について論じられた論文は存在しないものの、雑誌記事など（吉本2011、関2012）では高岡市のO営農組合が後継者不足を感じていること、K営農組合では代替わりがうまくいっているという情報が得られた。そこで、両営農組合への後継者についてどのような問題を抱えているのか、また存続について他に不安な点はないかを中心としたインタビューを通じて、高岡の集落営農組合における課題を明らかにすることを試みた。

一方、近年の経済低迷に際して大都市指向が鈍化し、農業に従事するライフスタイルが見直されており、新卒で農業に従事するべくIターンやUターンをする人々や、定年後にライフスタイル移住を行う人々の存在に注目が集まっている（鬼丸他 2015、藻谷2013）。高岡市ではそのような移住傾向が見られるのかどうか、市役所の移住関連を担当している都市経営課、農業関連を担当している農業水産課への聞き取りを通じて明らかにした。また、

里山交流センターへのインタビュー調査を通じて都市・農村間の交流が農村への人口移動を促進しているのかどうかを明らかにすることで、後継者不足解消への貢献可能性があるかどうかを考察した。

結果、現況に関しては後継者不足よりも経営状況などの方が深刻な問題である場合があり、高岡市内でも規模の大小や状況によって直面する問題に差異が生じることからひとくくりに高岡の集落営農の問題を結論付けることは不可能であり、規模・形態・ロケーション別の調査が必要とされることが判明した。また、移住者に関しては、農業従事者人数に比して非常に少数であるため現時点では大きな存在としては認識することができなかった。むしろ経営状態を安定させるための大規模化・広域化や雇用形態のサラリーマン化の方が効果的かつ現実的な改善方法であり、現実に進行している取り組みも確認されることが判明した。

以上のことを詳しく述べるにあたり、本稿の構成は以下の通りである。IIでは研究対象地域と調査の概要を述べる。IIIでは集落営農組合への聞き取り調査の内容を分析し、現状の集落営農が抱える問題について記述する。IVでは高岡市の移住状況やIターン・Uターン・都市・農村交流事業についての調査結果の分析を通じて移住者の傾向が農業に与える影響の大きさを評価し、現在進行している広域化・形態の変化について触れる。VではIVまでに述べることのできなかった聞き取り調査で得られた知見に触れ、全体の内容をまとめて今後の課題を述べる。

II 研究対象と調査概要

1. 集落営農の概要

1) 集落営農沿革

10年前ごろより増加した集落営農は、小規模農家と大規模な農業法人との間をとったようなスタイル¹⁾であり、集落を単位として農地を共有し、組合員が生産工程の全部または一部を共同で取り組む組織のことを指す（草取りや水管理のみ各戸の責任で行う場合や、すべてを分担する場合や逆にすべてを共同で行う場合が存在する）。政府による農地の大規模化・効率化の奨励（農業経営基盤強化推進法など）で増えているが、もともと集落で大規



図1 研究対象地域周辺地図 地理院地図より

模な作業（収穫など）を協力して行うこと（江波など）は古くから行われている場合があり、その性質を生かした農業経営形態となっている。

2) 高岡市の集落営農

集落営農には地域差が存在し、中国山地に多い集落の維持を目的に限られた構成員で行うタイプと、東北で見られる専業農家による大規模受託型、そして北陸に多い集落の構成員全員が参加するタイプがあり、高岡市の集落営農もこの最後のタイプに当てはまる傾向にある。²⁾ 農地の30%以上を集落営農がカバーし、高岡市の農業にとって大きな存在となっている。高岡市の集落営農の平均的な組合員数は約28.5戸、面積は約28.6ha、水稻と大豆または麦生産が中心で、補助金を含めず黒字の営農組合は1割程度、補助金を含めて黒字の組合は全部で8割程度である。

2. 高岡市の概要

1) 自然環境と農業

高岡の平地は‘暴れ川’庄川が作った扇状地であり、雪深い北陸に位置するため畑には向いていない。また水が豊富にあるため古くより稲作中心である。（畑作への転

向は土地に合わない、蓄積がない、兼業には手間だ、とネガティブな表現も調査時には聞かれた。）しかし1970年代より減反政策の影響で米作から大豆などの畑作への転作が徐々に行われており、3割程度の集落営農は野菜の生産に取り組んでいる。

O営農組合とK営農組合は高岡市戸出町に位置し、市街地から1kmほど離れていて、一定の大きさの農地につき一つの戸建ての家が散らばるように分布する散村の様相を呈する地域である（図1）。

3. 調査概要

1) 調査方法

2016年8月28日～9月1日の期間に高岡市にて、高岡市役所、里山交流センター、O営農組合、K営農組合へインタビュー調査を行った。聞き取り内容やいただいた資料の分析や文献調査を通じて高岡市の集落営農の後継者の問題の分析と解決方法の模索を行った。しかし、高岡市には大小さまざまな規模の集落営農が存在し、平均的な規模であるO営農組合、比較的大規模なK営農組合のみを対象としたため、小規模な組合の抱える問題を分析するにはさらなる調査が必要である。

2) O営農組合概要

戸出駅の北東に位置する農事組合法人で、組合員数は25戸、経営面積は28ha。2004年に設立、2008年に法人化し農事組合法人として事業を展開している。作付面積は水稻19.4ha、大麦5.6ha、小麦2.9ha、ネギ0.3haである。今回は組合長であるY氏にお話をうかがった。

3) K営農組合概要

農事組合法人で、組合員59戸、経営面積は60ha。設立は2008年で、2016年に法人化し、農事組合法人として事業を展開している。作付面積は水稻42.7ha、大麦15.7ha、育苗ハウス0.4haである。今回は組合長であるB氏にお話をうかがった。

Ⅲ 集落営農が抱える問題

1. 後継者の問題

1) 代替わりの方法

調査対象の2集落営農組合では、運営をする理事や運営委員会の10名弱と、比較的若い機械のオペレーターで役割分担をしている。一戸の農家につき一人の組合員を出し、組合員が高齢になって身体を壊すなど引き続き続けるのが困難になると、子どもが組合員となるという方法で代替わりをしている。K集落営農組合では設立当時に機械の購入で兼業のもう一つの収入が失われる「機械貧乏」などで採算が合わないことが若い人の農離れを促進していたが、集落営農によって採算が合うようになり、今の50代後半～60代前半、そして40代の人の一部戻ってきて後継者育成が順調になっており、設立からいる70代前半の組合員は軽作業を担って参画している。

2) 集落内の少子高齢化・東京への人口流出

一方、集落内では少子高齢化が進んでおり、後継者のいない組合員の家も存在する。O営農組合ではすでに組合員がいなくなってしまった家の草取りや水管理は組合員で手分けをして行っている（基本的に農作業はすべて組合員共同で行うが、草取り・水管理のみ各戸の担当になっている）。高岡市人口減少対策報告書によれば大学進学、就職等での高岡市から若年層が転出しており、最終的に3割ほどは戻ってこない状況になっている。対象地域の戸出地区も人口減少傾向にある（2012年には人口増減率-2.5%）。今後、後継者を集落内で確保するのが困難になっていくことが予想される。

3) 会計ができる人材の確保

また、法人化にあたり経理などが必要になったものの、平均年齢の高い営農組合（O営農組合では平均68歳）においてはコンピュータ操作に慣れている人が少なく、会計のできる人材を確保するのが困難である、との声も聞かれた。

2. 経営上の問題

1) 安定しているが低い収入

集落営農組合では、国による補助金や農協が定価格で買い取りを行うことにより、基本的には経営は採算が取れるレベルで安定している。しかし、採算が取れる範囲で農地・景観・暮らしを守っていこうという基本理念で余剰利益を求めない存在である営農組合は「夢を持ってできるほど収入は高くない。老後に、片手間にやるもの（K営農組合B氏）」であり、専業で人ひとり暮らしていくのに十分な収入が得られるわけではないことがうかがえる。

2) 自由化により採算が取れなくなる懸念

安定はしているものの、年々米価が低くなっていること、2030年には米価が自由化し、米価が採算の取れる価格を下回る可能性がある。（採算ラインは事業主体によって異なる。小規模な農業経営体においてはすでに下回っているというお話も耳にした。）K営農組合では、当面心配のない後継者不足よりも、米価自由化のほうが先にやってきて採算が取れなくなり組合員が営農をやるインセンティブを失ってしまうことのほうが大きな懸念であると組合長のB氏は語る。

Ⅳ 移住者の傾向と進行する後継者・経営対策

1. 移住者と農業

1) 農業のために移住する人々

定年後に農業に従事する人の動向をデータから認識することは困難である。今回の調査地域では前述の代替わりの方式で述べたように老後に自分の家に戻ってきて農地管理を引き継ぐといういわゆる定年帰農者に当たる人の存在は確認できたものの、必ずしも住民票を移すわけでもないため、データ上に動向が反映されることがない。老後のIターンはどうであろうかと農林水産課の方に伺ったところ、定年後の60代からでは新たに農業に参入するための職業訓練や機械調達の補助金が下りない（40歳まで）ため参入ハードルが非常に高く、ほとんど不可能であるという結論に至った。

一方、市を通じて移住し、かつライフスタイル移住である人の存在は都市経営課の方のお話から年3名程度を確認することができ、そのうち農業に従事する暮らしを選んできた移住者はこの2年で5名ほどに上ることが分かった。緑の協力隊というインターンシップを通じて移住された人や、酪農をライフワークというビジョンを掲げて移住された人などであり、少数ながら存在感を放っている。2016年度から高岡への移住促進事業が拡大しPR

も大々的に行うようになるため、窓口を通じた移住者は増えると考えられるものの、農業をアピールしたライフスタイルというより、小都市の良さや伝統的な街並みをアピールしたライフスタイルの提案が多いため現状では農業への移住者は増えても微増であると考えられる。しかし国吉地区の里山交流センターで催されるタケノコ掘りイベントや一畝オーナーの仕組み（週末農業を手軽にできる有料サービス）には人が殺到するなど、土に触れることを生活に加えたい人々の存在は、高岡市へ農業に携わるために移住することを望む人の存在を潜在的に示唆している。

2) 集落営農の代替わりのシステム

前述のとおり集落内では少子高齢化が進み、組合員の世帯で交代する人がおらず割り当ての管理ができないことや、長期的には組合員が少なくなり、集落の住民だけで運営していくことが困難になってしまうことが懸念される。そのため市街地や大都市からの移住者によって高岡市の農業従事者を確保する、というプランについての検討を試みた。兼業ライフスタイルが高岡市街地の製造業の職を求めて移住してくる人に合う潜在性が感じられたが、調査対象の2集落においては現状として集落側の認識として外部者にできるだけ頼らずに自分たちの力で営農をやりたいという集落内の共通認識があり、実現は難しいことが判明した。

2. 進行している後継者・経営問題への対策

O集落営農組合はさらに大きなスケールでは是戸地域の一部に該当しており、是戸地域の農地約198haを一つの大きな営農へと統合する首都農地プラン検討会に参画している。県や市、農協や集落営農など農業経営主体が連携して広域化を行っている取り組みである。

規模が大きくなるほど採算ライン（採算が取れる下限の作物買取価格）が下がり補助金も降りて経営が安定し、後継者のいない農地管理を共同で行うことができる上に、人材を引きつける・引き留める効果も見込める。また、高付加価値な大豆や国産作物を導入などの対策も行っている。

V 今後の課題

残された課題は小規模集落営農組合の直面する問題点の分析と、規模以外の変数（設立年次や法人化の有無、経営手法など）による分類での問題点の整理である。

今回、集落のつながりを活かした一戸一人の組合員方式で行う集落営農を間近で目にして、選択肢のあふれかえる変化の激しい時代の流れの中でとても貴重な大切な

ものであると感じた。同時に、農業のあるライフスタイルを希望する人と、集落の絆を大事にする風土が相容れる余地がなければ、こういった人のつながりの強い農業は失われていく恐れを感じた。

「家持の人？」と問われたり、流しそうめんの会にお招きいただいたり、初めての高岡での聞き取り調査は本当に暖かく人との縁を感じられるものだった。それだけに、今回お聞きした内容を論文に反映できない部分が存在したことや、自分が学ばせてもらってばかりで本来学生があるべき学問上の蓄積と現場に立つ人々をつなぐ役割は果たすに至れなかったことを情けなく思う気持ちが強い。今後一層学習し、次の論文に活かそうと考えている。

謝辞 あたたく調査に協力してくださったO集落営農組合・K営農組合・里山交流センター・高岡市役所のみなさまにこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

注

- 1) 高岡市の農家1戸当たりの平均耕作面積は約1.9ha、集落営農の一つ当たりの平均耕作面積は28.6haであり、集落営農では一事業主体あたりの耕作面積が大幅に大規模になっている。
- 2) 平成27年集落営農実態調査市町村別統計によれば、高岡市の集落営農の集落内の総農家数に占める構成農家数の割合が過半数を占める集落営農が86%、9割以上を構成農家が占める集落営農は40%にのぼる。

文献

- 鬼丸竜治・石田憲治・合崎英男・片山千栄 2015. 都市圏で暮らす高齢非農家住民の農業参加構造の分析. 農村工学研究所技法雑誌 217: 63-74.
- 関 満博 2012. 富山県高岡市/年配者主体の「北陸平野型」集落営農 : 育苗から乾燥までのフルセット装備「春日営農組合」. 地域開発 563: 54-56.
- 関 満博2016.「富山型」集落営農の展開ー砺波平野と近代工業都市高岡の兼業農業地帯ー. 明星大学経済学研究紀要 48-2: 1-35.
- 高岡市人口減少対策本部2015.『高岡市人口減少対策報告書』.
- 竹山孝治・山本善久 2011. 集落営農組織における経営発展度と地域貢献度の評価システムに関する研究. 島根県農業技術センター研究報告 41: 1-18.
- 農林水産省2015.『平成27年集落営農実態調査市町村別統計』.
- 畑中一広2015.8 集落営農の世代交代をうまくやる. 現代農業 8: 333-351.
- 藻谷浩介2013.『里山資本主義』角川書店.

矢挽尚貴2015. 統計データにおける耕作放棄地と集落営農の
係分析. 農村工学研究所技報 217: 75-83.

吉本恭子 2011. 地域の農業所得を高める牽引役「集落営農」—

富山県高岡市「岡御所営農組合」(特集 農山村に広がる「集
落営農」). 地域開発 563: 20-23.

「飛越能の玄関口」としての高岡の現状と課題

長尾 百合恵

I はじめに

2015年3月の北陸新幹線長野―金沢間の開業により、首都圏から北陸地方までの鉄道での移動時間は大幅に短縮した。これにより、北陸地方と首都圏の間の人の往来は大きく増加した。特に観光面では様々なメディアから脚光を浴び、「北陸ブーム」が巻き起こった。沿線自治体も、北陸新幹線開業を観光客誘致に結びつけようと、開業前から様々な取り組みが行われてきた。富山県高岡市では、開業に合わせて新設された新高岡駅を飛騨、越中、能登の玄関口、すなわち「飛越能の玄関口」と位置づけてPR活動を行ってきた。しかしながら、観光客誘致には北陸地域内で格差が生じており、高岡駅前の飲食店は集客に悩まされていることが指摘されている（藤原・藤2015）。

そこで、本論では北陸新幹線開業後の高岡の観光客誘致の現状と、飛騨地域、富山県、石川県すなわち飛越能地域の広域的な観光の拠点となるにあたっての課題を明らかにする。そのため、本論ではまず高岡市を取り巻く交通網といった地域概要と、観光客誘致の概観を述べる。その上で、「飛越能の玄関口」という新高岡駅のコンセプトとそれに基づいた高岡市の観光客誘致の取り組みについて整理する。その後、飛越能観光の玄関口として見た場合の高岡の現状と課題を考察する。

II 調査方法と調査地域の概要

1. 調査方法

本調査では、まず新高岡駅と高岡駅にて下車した人の傾向や動きを観察した。次に、高岡市観光交流課、交通政策課、タクシー会社、レンタカー会社の営業所に対し聞き取り調査を行った。また、適宜図書館での資料収集も行った。

2. 調査地域の概要

1) 高岡市

高岡市は、約17万5000人の人口を有する県西部地域の中心都市である。市内には歴史文化的な遺産が数多く残されているが、その大きな理由として二点挙げられる。一つ目は奈良時代に越中の国府が置かれたことである。

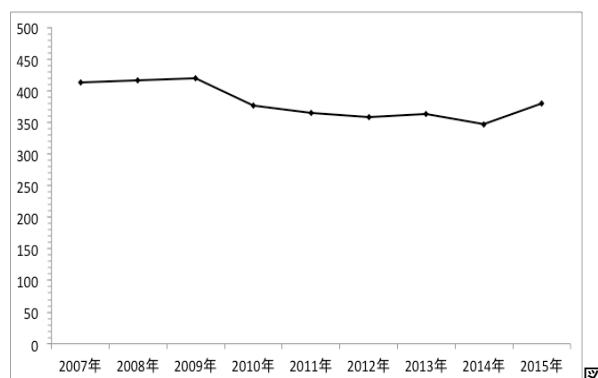
国守として赴任した大伴家持が詠んだ歌は万葉集に収められており、「万葉のふるさと」として親しまれている。二つ目は江戸時代、加賀藩二代藩主前田利長により城と城下町が築かれたことである。これにより現在の市街地の基盤が形成され、以降商工業の町として発展した。当時始められた高岡銅器といった伝統産業は現在でも受け継がれている。このようにして、高岡市は歴史都市として位置づけられている。また、市内の歴史文化的な遺産は観光スポットにもなっている。国宝瑞龍寺をはじめ、高岡大仏、高岡古城公園など、高岡の歴史や伝統を感じることのできるスポットに観光客が訪れている。

2) 高岡市の交通網

①鉄道網

高岡市の主要駅は市の中心市街地の南部に位置する高岡駅である。高岡駅は、北陸新幹線開業に伴い第三セクターとなったあいの風とやま鉄道線（旧北陸本線）が東西に走っているのに加え、南北に走るJR城端線とJR氷見線の始発駅となっている。また、富山新港方面へ向かう路面電車、万葉線の始発駅にもなっている。

北陸新幹線停車駅として新設された新高岡駅は高岡駅から約1.5km南に位置している。新高岡駅には、主に各駅タイプの「はくたか」と金沢駅―富山駅間を結ぶ「つるぎ」が停車し、速達タイプの「かがやき」は1日に1往復のみ停車している。これら3タイプを合計すると、1日当たり約35往復分の新幹線が新高岡駅に停車している。新高岡駅と高岡駅は城端線の他、路線バスで結ばれている。また、新高岡駅周辺にはおよそ800台分の駐車場や駅



1 観光客入込数の推移（単位：万人）

（高岡市観光交流課からの資料をもとに作成）

前広場、観光案内所などが整備されている。

②道路網

北陸新幹線開業に合わせ、2015年2月に能越自動車道七尾氷見道路が全線開通した。能越自動車道は富山県西部と能登を結ぶ高速道路で、北陸自動車道や東海北陸自動車道と連絡している。この能越自動車道の一部である七尾氷見道路（氷見IC～七尾IC）の、未開通であった区間が開通したことで、高岡から七尾までのアクセスが向上した。また、これに伴い高岡ICから新高岡駅までの一般道など市内の道路網の整備も進められた。

3) 高岡市の観光客誘致の現状

高岡市観光交流課によると、市の観光客入込数は2007年から2009年までは横ばいであったものの、それ以降2014年まで減少傾向であった（図1）。特に2010年での落ち込みが大きい。それは2008年に全線開通した東海北陸自動車道¹⁾の効果が薄まってきたことや、2009年に開催された高岡開町400年記念事業²⁾の反動によるものであると考えられている。2011年以降の落ち込みは東日本大震災や天候不順などの要因が考えられている。

ところが、北陸新幹線が開業した2015年には観光客入込数は2014年と比べ10%増加し、およそ380万人となった。特に観光客の増加したスポットは、新高岡駅と高岡駅のほぼ中間に位置する瑞龍寺で、同年比55%増であった。一方、中心部から離れた伏木地区にある勝興寺は同年比4%減と微減している。このように、市の観光客誘致に関しては、新幹線開業効果が市の中心部のみに留まっていることが推察されている。

Ⅲ 「飛越能の玄関口」としての新高岡駅

1. コンセプトの狙い

高岡市交通政策課によると、「飛越能の玄関口」という新高岡駅のコンセプトは、高岡が飛越能地域を移動する上で利便性の高い場所にあることが理由となっている。一般に、新幹線の二次交通は自動車では90分が限度であると言われているが、新高岡駅は、能越自動車道や東海北陸自動車道の整備により90分圏内に飛越能全域がほぼ収まっている。飛越能地域の主要観光地を見ると、60分圏域には和倉温泉や白川郷、金沢そして立山のケーブル乗り場があり、90分圏域には輪島や高山が位置している。このような良好な立地環境を「飛越能の玄関口」としてアピールすることで、飛越能地域の人々の新高岡駅の利用を促すだけでなく、高岡の知名度を上げ、飛越能地域を周遊する首都圏から観光客を呼び込む狙いもあるとされている。

表1 新高岡駅の曜日別乗降者数（単位：人）

曜日	乗車人数	降車人数	合計人数
土曜日	2724	2413	5137
日曜日	2533	3063	5596
木曜日	1900	1836	3736

（高岡市交通政策課からの資料をもとに作成）

2. コンセプトに基づいた取り組み

1) 交通機関の整備

北陸新幹線の開業に伴い、新高岡駅からの二次交通の充実を図るため、交通機関の整備が進められた。その例として、シャトル6の運行、城端線の増便試行、城端線・氷見線観光列車の運行、そして高速バスの「世界遺産バス」、「わくライナー」の運行が挙げられる。

シャトル6とは、新高岡駅—高岡駅間を走る路線バスの愛称である。7時から19時まで両駅を毎時6のつく時間帯に出発することにちなんで名付けられた。シャトル6は両駅をおよそ8分で結んでいるおり、このバスの運行に伴い、ほとんどの市内路線バスが新高岡駅を通るようルートの再編成が行われた。

高岡と城端を結ぶ城端線は、通勤時間帯などに1日4往復を増便した。城端線は単線であるため大幅な増便やダイヤ改正が難しい中で、城端線が地域の足となっていることや北陸新幹線・あいの風とやま鉄道との接続を考慮しての対応となっている。

城端線・氷見線観光列車は、散居村、富山湾、立山連峰といった風景を楽しむための列車で、ベル・モンターニュ・エ・メール（愛称「べるもんた」）と名付けられている。この列車は城端線、氷見線それぞれ週1日2往復の運行で、両路線の始発である高岡を富山県西部の観光拠点として位置づけていることがうかがえる。

「世界遺産バス」と「わくライナー」は加越能バス株式会社が運行する高速バスで、前者は高岡と白川郷を、後者は高岡と和倉温泉を結んでいる。両バスとも高岡駅と新高岡駅を通過しており、毎日前者は5往復、後者は4往復している。両バスの運行により、高岡の「飛越能の玄関口」としての機能強化が期待されている。特に「世界遺産バス」については、高岡市によると利用者が北陸新幹線開業後で3倍に増加したとのことで、飛騨方面への観光の玄関口としての機能が強化されている。

2) 観光PRの取り組み

高岡市では、新高岡駅の「飛越能の玄関口」というコンセプトに基づいた取り組みとして、他地域と連携した以下のようなPRが行われてきた。

一つ目に、旅行商品の造成が挙げられる。富山県西部6自治体（高岡市、氷見市、射水市、小矢部市、砺波市、南砺市）の共同で、旅行商品パンフレット「富山WES

T」をびゅうプラザに設置している。これにより、高岡への集客と富山ブランドの認知度向上を目指している。二つ目に、旅行会社への売り込みである。飛越能地域や富山県西部地域と連携し、観光業界との情報交換や、旅行会社に対し認知度の低い観光素材の売り込みを行っている。最後に、パンフレットの作成が挙げられる。飛越能地域共同で観光パンフレットを作成しており、飛越能地域の観光マップをレンタカーの営業所に設置している。

これらの観光PRを見ると、富山県西部地域をはじめとした飛越能地域との連携が目立つ。高岡市観光交流課によると、首都圏発の北陸観光のツアーは、金沢が中心で高岡は少し立ち寄る程度、という組み合わせが多く、これらの地域と連携することで、飛越能地域、特に富山県西部地域が北陸観光の新たなメインとして位置づける狙いがある。

IV 「飛越能の玄関口」の現状

1. 高岡の主要駅の利用状況

1) 新高岡駅

高岡市より提供された、2015年6月から2016年3月の間に4回実施された新幹線新高岡駅の1日当たりの乗降者数の資料をもとに、曜日別乗降者数の平均を表1にまとめた。この表から、乗降者数の合計は木曜日と比べ土曜日、日曜日に多くなっていることが分かる。加えて、土曜日は乗車人数が降車人数を、日曜日は降車人数が乗車人数を上回っていることも分かる。このことから、地元客が土曜日に新高岡駅を出発し日曜日に帰って来るといったパターンが、観光客などの外部からの客が土曜日に新高岡駅で下車し日曜日に帰るといったパターンよりも多く見られることが推察される。

また、高岡市より提供された他の資料によると、木曜日の利用客は半数以上がビジネス目的である一方、土曜日、日曜日の利用客は半数以上が観光目的であった。したがって、平日は出張や通勤といったビジネス客、週末は観光目的での地元客の利用が目立っていることが推測される。

2) 高岡駅

あいの風とやま鉄道株式会社より提供された資料によると、2015年度の高岡駅での、あいの風とやま鉄道線1日当たりの乗車人数は6529人となっており、開業前の推計値6014人と比べ大幅に増加している。これは、新高岡駅からの新幹線乗り換えによるものと考えられている。また、あいの風とやま鉄道線全体では、通勤客が新幹線利用に移行したことによる通勤定期利用者の減少が見られた。このことは、前述のように、新高岡駅において平

日のビジネス客の新幹線利用が多いことから見て取ることができる。

2. タクシー会社とレンタカー営業所の現状

ここでは、聞き取り調査によって明らかになったタクシー会社とレンタカー営業所の現状について記述する。

1) タクシー会社

高岡市に本社を置くタクシー会社の高岡交通株式会社によると、1991年をピークに減少傾向にあった売り上げは2015年に若干の回復が見られた。同時に、減少していたドライバーも2人増えたり、取材や撮影などでの利用件数も2015年度で前年比2倍以上増加したりした。このことから、北陸新幹線の開業によるタクシー需要の高まりが見て取れる。

観光タクシーについては、白川郷方面への利用が増加し、ドライバーに対する観光の研修も盛んになったそうである。これは、前述の「世界遺産バス」では、高岡から白川郷方面を日帰りで観光することが運行本数の面で難しいためであると考えられている。一方、和倉など能登方面への観光タクシーの利用はまだ少ないそうである。これは、和倉温泉は宿泊目的で向かう人が多く、日帰りの観光タクシーで行き来することが難しいためであると考えられている。

タクシー会社の方によると、能登方面や白川郷以外の合掌造り集落など、観光タクシーはまだ伸びしろがあり、今後は自分のペースで観光したい客を取り込むなどして観光バスとの差別化を図る必要があるとのことであった。以上より、このタクシー会社から見た場合には、高岡は飛越能観光の拠点として着実に進んでいる状況であると推察される。

2) レンタカー営業所

レンタカー会社の駅レンタカー新高岡駅営業所によると、レンタカーの利用台数は、北陸新幹線開業前から2015年にかけては10%以上増加したものの、その後2016年にかけては概ね10%落ち込み、新幹線開業前と変わらない状況である。新幹線開業に合わせ、外部からの客の利用を見込んで、複数のレンタカー会社の営業所が高岡駅から移転してきたものの、集客に悩んでいる状況が感じ取れる。また、2015年には見られた能登・飛騨方面への利用者が2016年では減少し、レンタカーでの長距離移動はあまり見られないそうである。このことから、レンタカー営業所から見た場合には、高岡が飛越能観光の拠点として機能を発揮しているとは言い難い状況であると思われる。

レンタカー営業所の方によると、新高岡駅に「かがや

き」が停車しないこともあり、隣駅の富山駅、金沢駅と比べ認知されにくくなっていることが問題視されている。今後は飛越能地域での連携をさらに強め、知名度を上げていくことが重要であるとのことであった。

V 「飛越能の玄関口」の課題

1. 「飛越能の玄関口」としての高岡

これまでの聞き取り調査の結果から、少なくとも観光面においては、高岡が「飛越能の玄関口」という役割を果たしきれていないことがうかがえる。ただ、北陸新幹線が開業して調査時点(2016年8月)でおよそ1年半と月日が浅かったことから、「飛越能の玄関口」へ向けた今後の更なる充実が期待される。

また、レンタカー営業所の方も語っていたが、観光客の居住地が首都圏か関西にかによっても高岡が「飛越能の玄関口」として捉えられるかどうかが変わってくると考えられる。北陸新幹線の開業により、首都圏から高岡へのアクセスは向上したものの、関西からアクセスするには金沢駅での乗り換えが必須となり、逆に不便となってしまった。このため、関西方面からの観光客にとっては、観光の拠点を金沢にした方が高岡にするよりも利便性が高く、高岡を「飛越能の玄関口」として考えるににくいと思われる。「飛越能の玄関口」の定義は、北陸新幹線の大阪延伸といった交通情勢の変化によって変わり得ると推測されるが、どのような人々にとっての玄関口なのか、逐次精査した上で観光客誘致を行う必要であろう。

2. 「飛越能の玄関口」となるに向けての課題

高岡が「飛越能の玄関口」として機能するにあたり、以下のような三つの障壁が存在すると考えられる。

一つ目は、富山駅や金沢駅と比較した場合の、首都圏から新高岡駅までのアクセスである。新高岡駅～東京駅間の新幹線は基本的に「はくたか」のみの停車である。北陸新幹線開業以前の特急列車が高岡駅に停車していた頃は、高岡へのアクセスは富山や金沢と肩を並べていた。しかし、新幹線開業により、確かに首都圏からのアクセスは向上したものの、「かがやき」が停車する富山や金沢と比べ高岡へのアクセスが不利な状態となった³⁾。「玄関口」は外部からのアクセスが周辺地域と比べ有利であることが前提条件であると考えられるため、たとえ様々な取り組みや整備がなされていたとしても、「飛越能の玄関口」としての役割を果たすことが難しくなってしまうことが懸念される。

二つ目は、二次交通の利便性である。現在の高岡の鉄道網は新幹線の二次交通として利用しにくい状況にある

と言える。例えば、新高岡駅から高岡駅へ移動である。この場合、公共交通では城端線が路線バスを利用することになる。ところが、城端線の本数は1時間に1～2本程度と少なく、新幹線との接続がない列車があり、城端線での移動は時間が合わないと利用できない。もう一つの例として、北陸本線の第三セクター化が挙げられる。II章でも述べたが、北陸新幹線の開業に伴い北陸本線はJRから経営分離され、第三セクターのあいの風とやま鉄道による運営となった。これにより、列車の車両数が少なくなるなど、以前よりも不便に感じられるようになった(藤沢・藤 2015)。このように、二次交通が利用しにくいとなると、少なくとも公共交通のみで移動する観光客にとっては高岡が不便な場所であると感じられ、「飛越能の玄関口」とは捉えにくくなってしまおうと思われる。

三つ目は、高岡の認知度である。高岡は富山県第二の都市ではあるものの、観光地化があまり進んでいないため、観光面での認知度は北陸地方や飛越能地域の他の都市と比べて高くはないと思われる。そのため、観光客が飛越能観光の拠点として高岡が浮かびにくいことが考えられる。また、「飛越能」自体の知名度も「北陸」と比較して低く、地域イメージも構築されていないことから、広域観光の選択肢として飛越能地域が上がりにくいことも推測される。このように、飛越能、そしてその中心部に位置する高岡の認知度が高まらなければ、高岡の「飛越能の玄関口」としての見方が定着しない状態が続くことが危惧される。

高岡が「飛越能の玄関口」の役割を担うには以上のような障壁がある。今後は行政、民間企業、そして住民などが協力し合い、少しずつ地道に壁を乗り越えることが求められるであろう。

VI おわりに

本調査から、高岡を「飛越能の玄関口」として見た場合に以下の現状にあることが明らかになった。

高岡は地理的に飛越能地域の中心部に位置することから、市は北陸新幹線開業に向けて整備された新高岡駅を「飛越能の玄関口」として位置づけ、様々な取り組みを行ってきた。しかし調査時点では、新幹線の二次交通の種類や、観光客の居住地域によって高岡を広域観光の玄関口として捉えられるか否かが異なってくることが分かった。この主な要因には、県庁所在地である金沢・富山と比較した場合に新高岡駅までのアクセスや二次交通が不便であることや、高岡がもともと観光都市ではないという歴史的背景が挙げられる。

このような、近隣都市と比べ観光客誘致に不利とも言

える条件の下で高岡が飛越能の観光の玄関口としての機能を発揮するには、まずは飛越能地域での連携をさらに強化しイメージの向上を図ることが必要であると考えられる。レンタカー営業所の方は、飛越能地域はライバルでもあるが協力者でもあると語っていた。県や地方ブロックの壁を超えることは容易ではないと思われるが、飛越能地域で共同してさらに認知度を上げていくことで、飛越能地域が観光の目的地として選択肢に上がるようにしていくことが求められる。特に高岡は飛越能地域の中心部に位置することから、飛越能地域との連携を率先し、かつ飛越能地域内の各地域との結びつきを深めていくことが重要であると考えられる。

また、聞き取り調査の中で、観光地化されていないところが高岡の一つの良さであるという声をよく耳にした。高岡が目指すべき飛越能観光の玄関口はどのようなものなのか、それに向けてどのようなことが必要とされているのか、官民が一体となって考えていくことが求められてくると考えられる。これにより、高岡の魅力を観光に上手く組み込みながら課題を解決していくことが可能になると思われる。

最後に、本調査は時間の制約上、「飛越能の玄関口」としての高岡についての必要な調査を十分に行えなかったことを付記しておく。したがって、今後も調査範囲を広げ、資料・データを収集していくことが求められる。今後も「飛越能の玄関口」へ向けた高岡の動きを見ていきたい。

謝辞 調査にあたり、次の方々よりご協力いただきました。高岡市観光交流課の青木愛様、高岡市交通政策課の板志佳様、高岡交通株式会社の吉田透様、J R 西日本レンタカー&リース株

式会社の多比木実様。数々の貴重なお話をさせていただきましたこと、心より感謝申し上げます。

注

- 1) 愛知県一宮市と富山県砺波市を結ぶ東海北陸自動車道は、飛騨清見 I C から白川郷 I C までの区間が2008年に開通したことで全線開通となった。
- 2) 高岡開町400年記念事業とは、1609年の前田利長の高岡城入城から400年経ったことを記念したもので、各種イベント・P R が行われた。
- 3) 「かがやき」停車には1日あたりの乗車人数3000人が目安であるが、表1のように新幹線新高岡駅の乗車人数はそれに届いていない。そこで、1日の乗車人数を500人増やして「かがやき」を停車させることを目指し、新幹線まちづくり推進高岡市民会議では新高岡駅の利用促進キャンペーンに取り組んでいる。2016年12月時点では、新高岡駅を利用する団体旅行の助成、新高岡駅発の新幹線通勤定期券の助成、新高岡駅発着のアウトバウンド用旅行商品の販売などが行われている。

文献

- 公共用地補償機構編 2014. 自治体通信 北陸新幹線開業に向けた高岡市の取組みについて：富山県高岡市。用地ジャーナル 23(9)：18-24.
- 田近孝治 2015. 新幹線駅周辺と主要観光地とのアクセス強化。交通工学 50(3)：14-17.
- 藤沢和弘 2015. 北陸新幹線の開業を控えて 北陸新幹線開業のインパクト(10)北陸に停車する4駅について(3)新高岡駅。北陸経済研究 429：43-49.
- 藤沢和弘・藤貴伸 2015. 北陸新幹線開業後の北陸を振り返る。北陸経済研究 438：10-25.

富山県高岡市における中心商店街の活性化への取り組み —官、民、教育・産業の連携を基盤として—

吉川 綾乃

I はじめに

中心商店街とは、八百屋から時計屋まで多種多様な商店が集まり、そこに人々が集う、街のかおである。しかしながら近年、地方都市の中心商店街において、シャッター街化をはじめとする衰退が顕著になっており、地方自治体の抱える大きな問題の1つになっている。様々な要因が複雑に絡み合っただけで問題が発生しているといわれているが、代表的な原因としては、人口の少子高齢化や経済の長期停滞、行政によるまちづくり政策と商業政策の失敗、商住の分離、街づくりの権限のある主体の欠如という本質的な問題がある(菅井 2006)。特に大型ショッピングセンターの郊外への進出は、都市中心部に大きな影響を与えているといわれる。人口の大部分がショッピングセンターに行くのだから、中心商店街を活性化する必要が果たしてあるのか、ということが議論されることがあるが、商店街には守り続けるべきいくつかの価値があるということをも主張したい。例えば、人と人をつなげる一種のコミュニティとしての機能を保有しており、現在でも商店街に通う高齢顧客には需要がある場所であるといえる。大型ショッピングセンターという便利だが均質的な空間には存在しない、温かな雰囲気を持っているのが商店街である。ただ、顧客流出を止め、商店街の価値を住民に再発見してもらわなければ、いくら商店街に価値があろうとも店主は経営を断然せざる負えなくなる。ではどうしたら商店街に賑わいと呼び戻すことができるのだろうか。

富山県高岡市の中心商店街に焦点を当てた本研究には、大きく4つの目的がある。1つは高岡市中心商店街(市街地)の価値再発見、活性化の意義の設定である。その土地に価値を見出すことで、それは人を引き付けるものになりうる。それを基に活性化の意義を明確化することで、研究の土台を強固にする意味がある。2つ目は、現象の把握である。具体的な数値や現地調査をもって、現在の高岡市中心商店街の空き店舗状況などを把握する。3つ目は、行政、民間、教育機関・産業の取り組みと課題を明らかにする。4つ目は、活性化成功のセオリーに基づいて、それぞれがどのように連携していくべきなのかを考察する。活性化成功のセオリーとは、その地域の特性をきちんと認

識し、行政/民間/教育機関/産業界などが連携して新しい仕組みをつくりあげることで活性化が成功した事例が多い、という今までの事例分析に基づき提唱されたものである(林口 2003)。

本論文ではII章で調査対象地域とその概要、III章で高岡市中心商店街の価値と活性化の意義をまとめる。IV章ではデータや現地調査を基にした中心商店街の現状を述べ、V章で高岡市(行政)、末広開発株式会社(民間)、高岡クラフト市場街(教育/産業)のそれぞれの取り組みと課題点を明らかにする。VI章にて高岡市において活性化成功のセオリーを確立し、活性化させるにはどうしたらいいかを提言する。

II 調査対象地域とその概要

本研究の対象地域は、富山県高岡市市街地の4つの商店街、末広通り商店街、御旅屋通り商店街、片原町商店街、高ノ宮通り商店街(本研究のための巡検を行った時にはすでにアーケードは撤去されていた)である。これらは、高岡駅前に広がる商店街で、現在でも飲食店や本屋、呉服屋、ハンコ屋などが並んでいる。しかしながら、人通りは大変少なく、平日の日中は歩いている人を見つけることさえ難しい。商店もシャッターが目立ち、寂しい印象を受けた。ただ、末広通り商店街や片原町商店街には大きな道路や路線電車の線路があり、交通量は比較的多い。商店街の中には、駐車場も設置されている。商店街から少し外れると、住宅街が広がっていたり、歓楽街が広がっていたりする。特に歓楽街が広がる地域では、夜になると大分人が集まるようである。高岡駅から徒歩30分、北陸新幹線の通過する新高岡駅から徒歩5分程度の所には、大型ショッピングセンターが誘致され、商店街への客足の減少を加速させたといわれている。

III 高岡市中心商店街(市街地)の価値と活性化の意義

1. 高岡市中心商店街(市街地)が持つ価値

1) 歴史的価値

高岡という街は、1609年に加賀藩前田家2代目当主である前田利家によって高岡城が築城されたことによって、高岡城の城下町として栄えた部分にあたる。前田利家は、

城下町に多くの上でのある鋳物職人を集めた。これこそが、現在でも伝統として続く、高度な鋳物づくりの始まりであるそうだ。高岡城はすぐに廃城になってしまったものの、城下町としての性格は残り続け、その後も鋳物づくりの街として発展していった。加えて、高岡は戦時中にも空襲の被害を受けることがなかったために、金屋町や山町筋で見られるような、風情あふれる土蔵造りの建物や、国宝である高岡山瑞龍寺をはじめとする、大変多くの歴史的建造物の保存に成功している。地元にいると、なかなかわからないかもしれないが、このような歴史的遺産は、他県や海外からの観光客を呼び寄せることのできる材料になる。同時に、観光客がその土地で消費活動を行うことで、その資金を文化の継承や建物の修復などに充てることもできるはずであり、人を集めることが出来れば、良い循環が生まれることは間違えない。このような、歴史的遺産があることが高岡市の1つ目の価値である。

2) 自治体による設備投資が十分に行われている

高岡駅前ロータリーはきれいに整備され、大変使いやすく整備されている。また、駅周辺のビルには図書館や高等学校、ホテルなどが入っている。

商店街の客足を引き留めた大型商業施設であるが、高岡市への誘致に成功したことは大部分の市民から見れば大変うれしいことであるのではないかと考えられるし、北陸新幹線の駅を設置できたことも、社会投資という面から見れば、非常に充実している街であると思われる。

2. 高岡市における商店街活性化の意義

他の県へのアクセスが良好で大型商業施設があり、長い歴史を持つ高岡市において、商店街を活性化させる意義とは何だろうか。1つは、商店街を頻繁に利用したり歩いたりする高齢者が、近所の住人やショップ店員など

とのコミュニケーションを取り、自らのコミュニティを広くすることができることであるのではないか。かつて、商店街とはのんびりとした、それでいて活気のある場所であったのではないかと推測する。情報化社会になり人々は他人と関わることに好まなくなっている傾向がある。そのような中で、彼らが居場所を見つけられるところをつくる、これは活性化の意義になり得るし、これは孤独死をはじめとする高齢者に関わる問題の解決にもつながるかもしれない。

もう1つは、活性化させることで観光地化させてしまおうということである。例を挙げると、島根県境港市に水木しげるロードという、ゲゲゲの鬼太郎のキャラクターの銅像が並ぶ道があるが、その土地で生まれたキャラクターを使って観光客を呼び寄せ、活性化をつはかる。商店街の売り上げが上がれば、自治体の税収入が増え、何かに投資をすることができる。活性化を行うことは、中心部の雰囲気を変えろというだけでなく、自治体やその土地に住む人にとってもよい影響をもたらし得るという意義があるといえる。

IV 中心商店街の現状

1. 中心商店街の人口推移

平成10年から平成23年の間に約4000人も市街地人口が減少していることがわかる(図1)。しかし、これは市街地(商店街)の衰退の大きな理由とは考えにくい。なぜなら市街地自体も11.0%から9.2%に縮小しているからである。

それではなぜ、市街地人口は変化しないのに商店街で購買行動をとる人の数が減少したのかを考える必要がある。やはりこの理由はモータリゼーションの発達にあると思われる。巡検中にあまり人が歩いているところを目

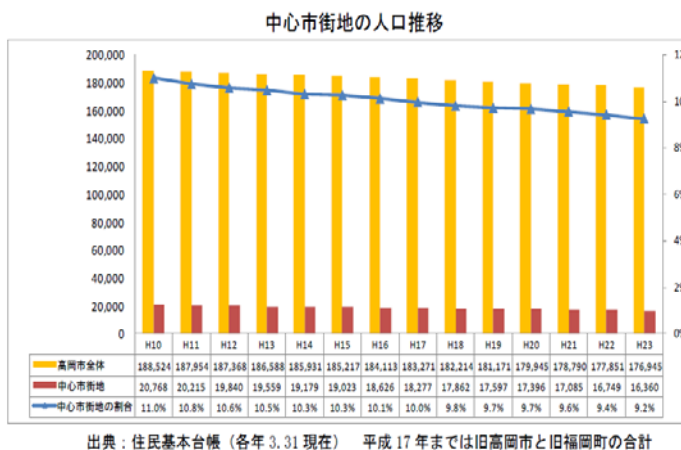


図1 中心市街地の人口推移
(高岡市中心市街地活性化計画より)

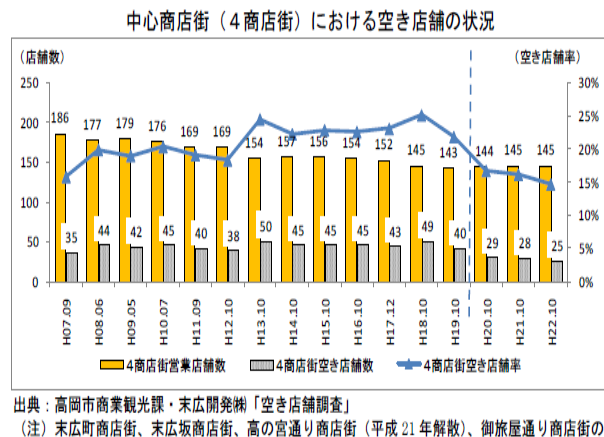


図2 中心商店街における空き店舗の状況
(高岡市中心市街地活性化計画より)

にしなかった。おそらく、車を運転できるならば市街地と郊外でも移動時間に大きな差が生まれるわけではなく、たとえ商店街という買い物場所がなくなってしまうても、他の所に移動できるのであろう。

2. 中心商店街の空き店舗数推移

空き店舗率は減少傾向にあり、行政の開業支援事業などが良い影響をもたらしているといえるだろう（図2）。実際の商店街には、歴史のある書店や呉服屋のみでなく、スイーツやカフェのお店など、最近開業したのだらうと思われる店が多かった。駐車場を完備しているところもあり、そこは良く客が入っていた。

ただ、駐車場や空き地、マンションが建てられている場所も多く、開業支援のみで空き店舗0にすることは難しく、どのようにして対策を講じていくかが課題である。

3. 中心市街地の空き店舗調査

住宅地図を持ち、1件ずつ店舗をまわり、①開店している、②営業時間外、③空き家もしくは閉店している、④住宅地もしくは駐車場という4項目に分けて調査を行った。

《末広ロードより西側》

個人宅が多く、東側よりも店は少ない。空き家になっているのは、もともとお店だったところが閉店したものも多く、その原因は個人宅が多いため顧客が入り込んでこない。しかしながら反対に、いくつかの飲食店などは周辺住民だけをターゲットとしているような印象を受けた。

《末広ロードより東側》

東側には個人宅はほとんど見られない。末広ロード沿いは居酒屋やレストランが並んでいるが、脇道を入ると

表1 事業主への支援

対象経費	補助率	限度額
賃借料等補助	3分の1	10万円/月
店舗改装費補助 (出店者)	2分の1	100万円
店舗改装費補助 (店舗所有者)	2分の1	100万円
取得・建設費補助 (出典) 高岡市	5分の1	200万円

ホストクラブやキャバクラのような店舗が所狭しと並んでいる。これは、昔末広町にあった歓楽街が駅前に移動してきたのではないかと考えている。

V 活性化への取り組みについて

1. 高岡市（行政）の取り組み

1) 中心市街地への開業支援

高岡市では、市街地中心部に店舗を出店しようとする事業主に対して支援を行っている。これは、市街地中心部は地価が高く、創業者であると熱意はあっても資金面で問題が出てくることがあるため。

2) 高岡駅周辺部の再開発事業

駅前はもちろんのこと、ウィングウィング高岡という高校や図書館などが入っているビル、そして空いている区画にマンションを建設している。無駄に余っている空き地を放置するのではなく、より住みやすくする努力を行っている。

3) コンパクトシティ化

ウィングウィング高岡には、高校や図書館の他に市役所が管轄する業務が置かれていたり、御旅屋通りにある大丸百貨店の上層部には子育て支援のために託児所が併設されていたりする。このように市役所の方針としては、中心部に市役所の機能を集中させることで、住民の移動距離を小さくしたり、人の流れを作ることで中心部に再び人を戻そうとしたりしている。

4) 課題点

市役所としての立場の難しさに課題があるのではと感じた。確かに、中心部に人を集め、それによって商店街をはじめとする市街地の活性化につながる可能性は大いにある。ただ、市役所としては自治体の収益のことも頭に入れていかなければならず、大型商業施設誘致の差異にも厳しい選択をしなければならなかったと聞いた。例えば、大規模商業施設と協力して市街地活性や都市計画をしていくことはできないだろうか。高岡 駅から約30分歩いたが、その道の途中には瑞龍寺があり、常に観光客がいるゾーンが存在する。この駅南大通りの開発をより進められれば、人々を市街地まで呼び寄せることができるルートができるのではないかと。



図3 高岡市中心市街地空き状況（筆者作成）

2. 末広開発株式会社（民間）の取り組み

1) 高岡町衆サロンの活動

代表的な催事を紹介している。チラシをフリーペーパーのように投函していくのではなく、話をしながらを顔を見て渡すことを大切にしているという。パソコンやスマートフォンを使いこなすことができない高齢者のために作成している。

2) HPからの情報発信「たかおかストリート」

内容はチラシよりも観光客向けに充実させているもので、グルメや飲み物、ギャラリーや土産物等の情報を載せている。高岡市について、ここまで詳しく書いているホームページはなく、末広開発株式会社の大きな強みである。

3) 課題点

高岡町衆サロンやたかおかストリートの活動だけではなく、都市計画や開発も行っている。今後の課題は、いかにして少子高齢化・人口減少という現在の日本の状態に合わせた街づくりを行っていくか、である。これから高齢者はさらに増え、子供が減っていく。現在の状態だけを見て、解決策を考えるのではなく、何十年後という長いスパンで都市計画を立てていく必要がある。また、行政と「街づくり」という考えを統一する必要もある。何をもって「街づくりが成功した」というのか、その意識を行政と民間が共有し、一体となって取り組んでいくことができれば、成功のセオリーに大きく近づくはずである。

3. 高岡クラフト市場街（教育・産業）への取り組み

1) イベントの企画

9月に1週間程度のイベント、「高岡クラフト市場街」というものを開催している。これは、高岡をものづくりのまちとして売り出し、クラフトコンペティションを流心としたモノづくりに関連するイベントを開催するというものである。全国的なレベルのコンペを開くことで来場者を呼び込み、食やファッションという面からでも楽しめるように企画されている。東京でも富山物産展などに行くとチラシを見かけることがある。北陸新幹線の開通によって、さらに来場者を増やすことができるのではないかと予想される。

2) 職人と企業を結びつける

このイベントは、製品の美しさを見るためのものではなく、職人と企業を結びつけ、新しいビジネスを開拓するという目的もある。高岡の素晴らしい技術を、より多くの人の目に触れるようにして、若いクリエイターが育ちやすい環境をつくっている。

3) 課題

当初、高岡クラフト市場街は地域活性という目的も掲げていた。確かに、イベント当日の来場者数はとても多いのだが、それが果たしてイベントに参加していない店舗の売り上げにつながったかというそれはあまりなく、5日ほどのイベントで活性化を図ることは難しい。しかしながら、このイベント内で企業とマッチングすることができた職人が、将来的に商店街に店を構えたい、という流れに持っていくことができれば、数日のイベントが商店街活性化につながる可能性がある。

VI 活性化成功のセオリーを確立するためには

行政の高岡市役所、民間の末広株式会社、そしてクラフト市場街実行委員会が協力することで、活性化成功のセオリーを確立することができる。だが、どのような分野においてこの3つの異なる組織がしあえるだろうか。

高岡市役所で、「商店街活性のために何が一番大切か」という質問に対して、「大型商業施設との差異化を図ることである」と答えていただいた。確かに、店舗の内容を比較してみると、商店街にある物はほとんど大型ショッピングモールの中でおぎなうことができてしまっていた。つまり、大型商業施設に対して同じ業種で対抗してもおそらく勝てないのである。それでは、どうするか。私の案としては、商店街にクラフトショップを集積させ、差異化を図るというものだ。

例えばこの案であれば、行政は若いクリエイターが入りやすい環境を補助金制度等で整備したり、民間はクリエイターたちが自分の商品をPRできるようなイベントを企画したり、教育機関はクリエイターを輩出する場になるだろうし、産業分野はクリエイターたちが商品を売り出す際の手伝いができるだろう。

集積によって賑わいをよぶという手法は意外と多くの場所で目にするものである。例を挙げれば、東京の月島。1つの通りの両端に何十ものもんじゃ焼き屋が列をなしている。あんなに主席しているのにもかかわらず、食べに来る人がやまないのは、集積によって価格競争やサービス競争が起こり、日々改新されているからである。これをクリエイターたちで行うと、彼らはより高い技術を磨くために切磋琢磨することだろう。

これは単なる一例に過ぎないが、行政、民間、教育機関、産業が協力するのは想像以上に難しいことであるが、諦めずに妥協点や新しいアイデアを探っていくことで今まで不可能だと思っていたことを成し遂げられるのだろう。

Ⅶ おわりに

本研究では、行政、民間、教育・産業という大きく3つの分野に注目して、その連携によって地域の活性化は成功するという「活性化セオリー」は、富山県高岡市に当てはまるのか、セオリーを当てはめるためにはそれぞれがどのように問題を解決していけばよいのか、ということについて考えてきた。地方都市における商店街のシャッター街化や空き家問題に対する解決策を提案したり、中心商店街の活性化プロジェクトを立ち上げたりという活動は、一見とても有益で面白そうに見えるのだが、いざ実例に触れてみると、中心部に人を集めるということが、モータリゼーションの進んだ環境の中でどれほど、難しいことであるか、理想論であるかを実感する。たとえ、行政が店誘致のために補助金を出して、店舗を誘致しても、買いに行く顧客がいなければその店は立ち行かなくなるだろうし、すでに大型ショッピングセンターが完成してしまっている地域において、商店街で同じようなものを売っても、人を集めることはできない。同様に、民間企業や教育現場、産業がそれぞれ別々の動きをしても、活性化はう

まくいかないであろう。つまり、4分野が協力して解決策を考えることこそが重要なのである。今後、地方都市においてそれぞれが話し合う場を設けるような、取り組みをしていかなければならない。

謝辞 この研究を高岡市巡検報告書として形にすることが出来たのは、高岡市役所の産業振興部商業雇用課の岩井様、経営企画部文化創造課の寺口様、末広開発株式会社まちづくり事業部の中村様、塚田様、高岡市クラフト市場街実行委員会の松原様に貴重な時間を割いて調査に協力していただいたおかげです。協力していただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。謝辞にかえさせていただきます。

文献

- 菅井憲郎 2006, 中心商店街の再生. 地域経済政策研究 7: 15-55.
- 高岡市 2012. 第2期高岡市中心市街地活性化基本計画—400年の資産を守り、育み、繋ぐ—.
- 林口砂里 2013. 「高岡クラフト市場街」2013—高岡の文化資産を未来につなぐ街づくりを目指して—.

土蔵造りの町並みに見る山町筋の場所性

—伝統と防災の観点から—

小野 日菜子

I. はじめに

高岡市は近世以降、前田利常による高岡町人の他所転出の禁止などの政策により、商工業都市へと発展した。そして、明治時代になると富山県内では大火が相次いだため火災予防を目的とした建築制限が出され、1900年の大火を機に、高岡市に土蔵造りの街並みが形成された(初田・中森 1987)。

特に高岡市の山町筋は高岡でも最も古い町である。この地区には土蔵造りの町家をはじめ、レンガ造りの洋風建築などの伝統的な建造物が多く残されており、「伝統的建造物群が全体として意匠的に優秀なもの」として評価され、2000年12月4日に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された(市野 2013)。もともと、この地区の土蔵造り町家は1900年6月27日の大火後、その復興にあたって防火を目的として建てられたものである。しかしながら、現在の山町筋においてはこうした土蔵造りの街並みが伝統的景観としての価値も持っていると考えられる。その傾向は、土蔵造り町家のリノベーション事業や、山町筋で行われる「高岡軒下マルシェ」や、「高岡大仏と山町筋を遊び尽くす 古地図片手に城下町さんぽ」などといったイベントにも現れている。

以上を踏まえると、山町筋の土蔵造りの町並みは、成立当初は防火という実用性の意味合いを持っていたが、近年では伝統という新たな意味合いを獲得していると考えられる。一方で、2007年の能登半島地震では輪島市街地の土蔵の多くが被害を受け、解体されたこともあり(豊巻・栗袋 2010:237-240)、耐火性能以外の土蔵の防災性能にも注目する意義がある。そのためこの調査では、過去と現在において土蔵が果たしてきた役割について防災と伝統の観点から述べ、このような土蔵造りの町並みを有する山町筋という地域がどういった場所性を持つのか考察する。調査方法としては、文献調査と聞き取り調査を用いた。聞き取り調査は、土蔵造りの建物に住む方々と、土蔵造りの建物を店舗として利用し

ている方の計3名、加えて、高岡市文化財課、高岡市建築指導課のそれぞれの担当者に対して行った。

IIでは山町筋の歴史と概要について述べ、高岡における、山町筋特有の性質について整理する。IIIでは実際の聞き取り調査をもとに、山町筋に関わりのある方々の実感としての土蔵や山町筋の特徴、現在の山町筋における人々の活動を整理する。IVでは、文献調査と聞き取り調査をもとに、山町筋の今後の展望について、筆者なりの考察と提言を行う。

II. 山町筋の形成と特徴

1. 歴史

1) 高岡開町時～1900年の大火以前

山町筋は、1609年の高岡開町時に旧北陸道沿いに築かれた商人町である。前田利長から御車山を拝領した町として、「山町」という呼称が生まれた。山町筋の中でも「山町十か町」として御馬出町、通町、守山町、木舟町、小馬出町、一番町、二番町、三番、源平板屋町、坂下町の十地区に分かれており、それぞれの地区に地区名の由来と特徴がある。この中でも特に、守山町、木舟町、小馬出町は旧北陸道に面した「通り筋三町」と呼ばれる高岡の中心地であり、問屋街であった¹⁾。この問屋街では、魚や鳥、青果物、家具、仏壇、鋳物製品などを除く一般商品が扱われた。また、山町筋の町は全て藩から土地が与えられて町人が住んだ「本町」である。

明治維新の際にもこうした問屋街に大きな変化はなく、むしろ武士階級の崩壊によって高岡商人は解放され、高岡は県下における産業経済の中心地であり続けた。山町筋では、山町筋の有力者を設立メンバーとした高岡紡績株式会社や高岡商業会議所が設立され、山町筋の商業地域としての性質が確立されていた様子がわかる。また、山町筋の経済力は、貴族院議員多額納税者議員の有資格者からも見て取れる。明治23年に発行された『日本全国貴族院多額納税者議員互選名簿』を見ると、富山県内で有資格者として選出された15名のう

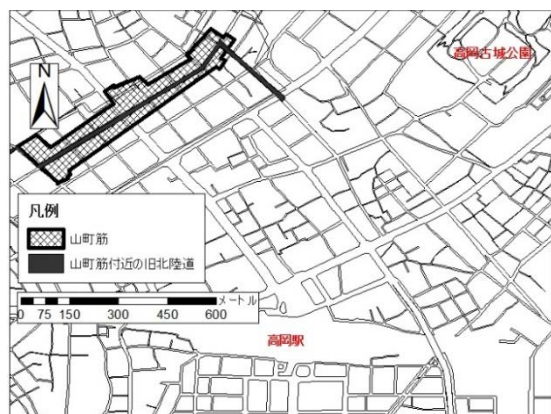


図1 山町筋の位置関係

(高岡市教育委員会作成資料より編集)

ち2名が高岡市出身者であり、その両名がそれぞれ木舟丁(町)・守山丁(町)に住む山町筋の人であった。この資料にある内容は当時の高岡の経済力を考慮すると比較的少ない人数の選出であるが、この他の時期にも、高岡市からは継続的に3～5名の有資格者を排出しており、県下の財界を高岡市、ひいては山町筋が握っていたと言える。

2) 1900年(M33年)の大火～現在

1900年の大火によって高岡町の大半が焼失した際、復興にあたって1899年に定められた建築制限をもとに、防火構造の建造物の建築が義務付けられた。それによって、この地区に土蔵造りの町家が作られた。しかしながら、土蔵造りは膨大な建築費がかかり住民の負担となったため、建築規制に対して緩和を求める運動がしばしば行われたという(初田・中森 1987)。一方、山町筋では早い家では明治33年、遅い家でも明治44年という比較的早い時期には土蔵造りへの建て替えが行われており、当時の山町筋は、大火の後でも費用をかけた建て替えが可能である富裕な地域であったことがうかがえる。

こうして形成された土蔵造りの街並みは、高岡市が戦時中に空襲の被害を免れたことから、現在に継承されている。そして、山町筋の街並みは「高岡開町時からの歴史を明治期の都市計画の記念碑であり、高岡の近代化の歴史を今に伝えるものとして貴重である」として、2000年に伝統的建造物群保存地区に制定された。

Ⅲ. 調査結果

1. 土蔵造りの建物に居住する方の話

1) A家

A家は高岡の土蔵の中でも、規模、質、保存状態とも

に一番良いものとされており、伝統的文化財に指定されているお宅である。A家で聞き取りに応じてくださった方は、A家の歴史や文化的価値とともに、山町筋の歴史や雰囲気、現在の様子を語った。

江戸時代、山町筋の人々は伏木港に船を持ち、伏木港から千保川をのぼり、荷車で商品を内陸まで運んだという。また、A家の建材として、屋久杉や京都北山の天然杉などが用いられていることから、関西から様々な物品が山町筋へと流入していたことが分かります。

このように船貿易で繁栄した山町筋では、昔から男性が「旦那衆」として力を持っているという。この場合の「力」とは権力ではなく、地元での結束力の源泉、といった意味を持つ。山町筋では彼らを中心に催し物などが行われるため、旦那衆には町の人々から好かれることが求められ、彼らは他の人たちとは一線を画したセンスで人々の心を掴んでいたようだ。例えばA家には、山町筋が船で成功していた時代から伝わる土産物が保管されているが、その中には土産として定番の櫛ではなく、写真立てなどの珍しいものがある。しかもそれは、純粋なベッコウではなく、あえて模様のあるベッコウから出来たものであり、他との違いを強く意識する旦那衆の心意気がうかがえる。こうしたセンスも、船貿易によって培われた山町筋特有のものと考えられる。

一方で、女性は船で運ばれてきた貴重なものを蔵にしまい、管理する役割を担っていたという。蔵は建物の構造上、通りから見て敷地の奥側に配置され、彼女たちは名実ともに「奥さん」としての働きを負ったのである。

こうした山町筋の人々の雰囲気や男女の役割の違いは、現在にも生きっているとA家の方は話す。現在でも山町筋の女性はシャイで奥ゆかしく、品があって、「男性の後ろを三歩下がって歩く」ことが美德となる雰囲気があるようだ。

また現在の土蔵の防災性について聞くと、かつて地震で土蔵の一部の土が剥がれてしまい、現在は木でその部分を支えていると言う。「山町筋付近は地震で揺れることはないが、心配ではある。弱いと思っていたところ(前述の土蔵)がやはり壊れた。」と話す。

現在の山町筋について聞くと、車社会になってからは活気があまりなくなってしまったと話した。また、土蔵造りの家を維持することに関しては、修繕費の面や、修繕に必要な技術が不足している面などから大変であ

るという。

2) B家

B家は160年前に京都にある呉服店の高岡支店として山町筋に展開し、今に続く呉服店である。B家の方々に主には、山町筋での暮らしについての話を伺った。

まず土蔵造りのお宅についての思いを聞くと、「土蔵造りについては残していけないといけないし、戦後すぐに(伝統的建造物群保存地区として)保存しておけば、今のような(土蔵造りが点在している)歯抜けの状態にならなかったのに」と語る。しかし一方でA家の方々と同様に、家を維持するための費用は莫大であり、大変な面もやはりあると言う。また、災害への不安についても聞くと、「ここは耐震化できていない気がするため地震は不安ではあるが、地震の専門家には、ここは壊れることはないと言われている。その言葉を信用することはできないが、この地域は地震で揺れないと安心している。」と言う。火災については、土蔵造りであることが大きな安心感につながっていて、以前B家の筋向かいで火が出た際は自宅の観音扉を閉めてやり過ごしたと言う。これは、現在でも土蔵造りの耐火性能が信頼に値すると考えられている証左と考えられる。

山町筋で行われる様々な行事について聞くと、山町筋の人々は「保存地区で市に補助してもらっただけでは申し訳ない」という思いもあり、年に4回(1月：天神祭、3月：ひな祭り、5月：御車山祭り、8月：土蔵フェスタ)のイベントにとっても力を入れていると言う。例えば御車山祭りについて、山車の維持は補助金を受けつつ基本的には住民で出資して行い、町内にある班内で「山車宿」という役割を持ち回りで担当するなど、行事が地域住民の協力によって運営されていることがよくわかる。また、山町筋の人々の中では中心市街地で行われる「高岡七夕まつり」などに対して少し競争意識があり、新しい街並みと古い街並みの間で意識の違いがあるとも言う。山町筋の中でも最近では新しいイベントが盛り上がっているが、そうしたイベントについては「古い街並みの人たちはじっくりこないみたい。インターネットで人を募集することで外部の人が山町筋に入ってくるから、いまひとつ盛り上がっていない。山町筋という町の品格や従来の良さが失われているのではないか」と話す。多くのイベントが行われることにより、古い町一軒一軒の魅力が軽視されることを懸念しているようであった。

B家の現在の懸念事項としては、自宅の維持管理があ

るという。山町筋の人の多くは旧帝大へ進学し、大学卒業後に山町筋へ戻ってくることは少ない。B家に関して、現在自宅に暮らす2人を除き、親族はみな他所で自宅を持っていると言う。今後も伝統のある自宅を存続させたいという思いはあるが、跡取りもない状態であり対処が難しいと語っていた。

2) Cさん

Cさんは高岡出身で、一旦上京したのちに高岡に戻ってご家族で土蔵造りの家に住んでいる。また、土蔵造りの町屋をリノベーションした建物で店舗も経営している。Cさんには主に、山町筋で行われるイベントや、山町筋に対する思いを聞いた。

Cさんが店舗を始めたきっかけは、山町筋にあり無人のため治安があまり良くなかったコミュニケーションセンターを、より人々が入りやすい空間へと変えるためであったと言う。場所が伝統的建造物群保存地区であったことと、土蔵造りの良さを生かすために、土蔵造りの外観を保ったままリフォームを行い、店舗としたそうだ。

Cさん自身も参加し、これまでに7回開催された「たかおか軒下マルシェ」について聞くと、このイベントは土蔵造町家の軒下を借りることで、空き家を利活用するものであると言う。空き家だけではなく、土蔵造り町家の持ち主にも場所を貸してもらい、県内の農家に商品として地場の作物を出品してもらうことで、「店を出す人、場所を貸す人、イベントに訪れる人」の三者間でのコミュニケーションを期待しているそうだ。ただマルシェを開催するにあたっては、町のしきたりや「山町筋を生かしたマルシェにしてほしい」という町の人の意見もあり、課題があったと言う。来年の春にはある土蔵造り町家をリノベーションした複合商業施設ができるが、その計画についても「駐車場の取り合いになる」等、賛否両論があると言う。

また、山町筋についての思いを聞いてみると、「今は壊されているところも多いが、土蔵は高岡の良さなので、それを生かせたらいいと思う。土蔵はほっとするし、他の人にも住んで欲しい。昔から大事にされていたところを今も生かしていけるのは良いことだ」と話していた。一方、山町筋は交通ルートが不便であり、車の利用者が多いことなどから、「もっと多くの人に歩いて欲しい。車は多いけれど、観光客もあまり歩いてくれず、観光の人向けにうまく力を発揮できていない」とも言う。A家の方の話と同様、モータリゼーションの波を受けて活気が減っている山町筋の様子がうかがえた。

地震について聞くと、地震や地盤に気を使っている、防災訓練への参加も行っていると言う。ただ、特に土蔵造りの家に住んでいることで不安に思っていることは無いようであった。

2. 土蔵造りの建物に関する行政担当者

1) 高岡市文化財課

文化財課の方に、まず、山町筋の特徴について聞いた。

山町筋はもともと近隣商業地域として選定されていたが、近隣商業地帯として再開発をしやすい反面、明治期の建物が失われてしまうという危機感から、地元の人々が中心となって活動し、重要伝統的建造物群保存地区に選定されたと言う。担当者の話では、山町筋の人々は江戸時代から御車山祭りに用いる曳山を守ってきたというプライドがあり、地域内での繋がりが強いためにそうした運動が起きたと言う。ただし山町筋の内部でも、属する町内が異なるとそれぞれが抱く思いも異なると言う。これは町内ごとに異なる曳山を有していることにより、山町筋全体としての結びつきよりも個々の町内での結びつきがより強いと考えられる。

防災については、山町筋に特化した防災計画は作っていないが、公共空間としての防災空間は作られているとの話であった。空き家も重要伝統的建造物群保存地区に選定されてからは減っているといい、特に防災上の心配はないとのことであった。

また、山町筋で行われる各種のイベントについて聞くと、4～5年前までは外部からの働きかけでイベントを行っていたが、山町筋の町内会の中でもイベント開催に対して賛否両論があり、意見のまとまりが取れなかったと言う。しかし最近では、山町筋の中から若い人を中心にイベントを発信するスタイルが定着してきており、若い人々の中でのまとまりは強くなっているそう。また、それに伴って世代間のギャップが生じている。そうした事情はどの地域でもあることであるが、特に山町筋はその傾向が強いと担当者は話す。

2) 高岡市建築指導課

建築指導課の担当者には、防火建築である土蔵造り町家が立ち並ぶ山町筋の、現在の防災能力について尋ねた。その際、2007年の能登半島地震の前例があることから、主に地震についての話を聞いた。

建築指導課では「揺れやすさマップ」と「危険度マ

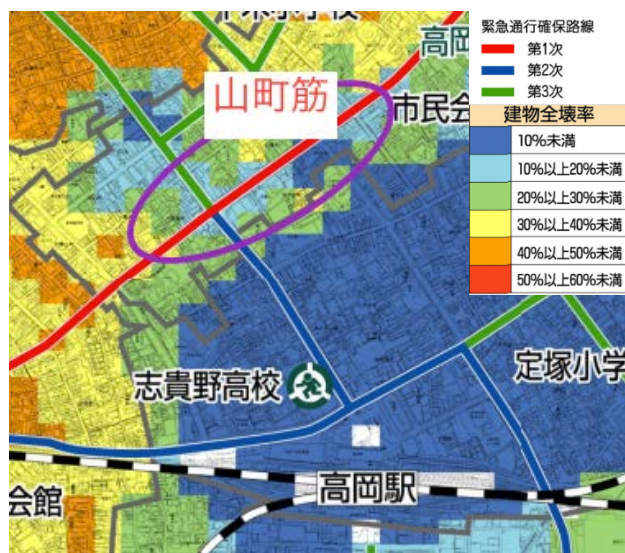


図2 山町筋の建物全壊率

(高岡市建築指導課「揺れやすさマップ」より作成)

ップ」を作成し、高岡市内で地震や地震による倒壊の恐れがある地域を地図上に示している。「揺れやすさマップ」は、公的機関が公表した活断層データを元に地震の規模を算出し、地盤データを考慮して50mメッシュごとに最大震度を予測したものである。このマップによると、山町筋付近は最大震度6強と予測されている。「危険度マップ」は、市内の各建築物の建築年次、構造、「揺れやすさマップ」のデータを元に、町内ごとに建築物の全壊率予測したものである。(図2)

図2より、山町筋は建物の全壊率が比較的低い地域であることがわかる。山町筋に住む人々が、「山町筋は揺れない」と感じている根拠が、こうしたデータにあると考えられる。

一方、山町筋の通り筋三町における建築物の構造物についてのデータを調べると、以下のような結果となった。

以上より、通り筋三町における建築物は、昭和35年以前に建造されたものが多く、また、木造住宅が多いことがわかる。そうした状況でも「揺れやすさマップ」において大きな被害予測がなされていないのは、山町筋の地盤が強いためであろうと建築指導課の担当者は話す。

IV. 山町筋の場所性と課題

1. 山町筋の場所性と土蔵造りの役割

山町筋は、古くから商人の町として栄え、高岡市の経済を担う地域であった。「高岡商人」としての誇りは山町筋内での人々の繋がりを強化し、御車山祭りなど

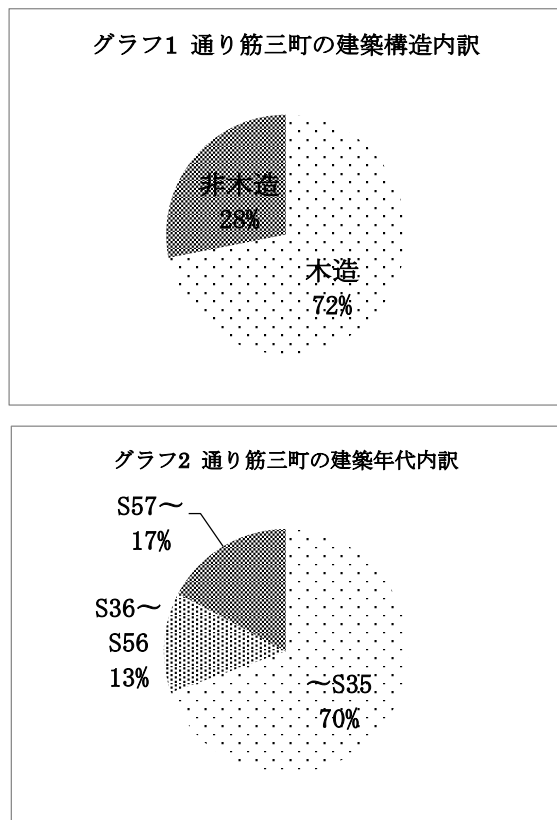


図3 通り筋三町の建築構造と年代

(高岡市建築指導課提供データより作成)

の行事もそうした繋がり強化に寄与したと考えられる。また、1900年の大火によって土蔵造りの町並みが山町筋に出現したが、それが現在まで残っている理由は山町筋が伝統的建造物群保存地区に指定されたためだけではない。山町筋が保存地区に選定される以前にも土蔵造りの町並みが残されていたのは、維持・修繕に費用のかかる土蔵造りの町家を管理し続けることができる高岡商人としての経済力と、先祖代々伝わる家を守ろうという、山町筋に暮らす高岡商人としての誇りによるものであると考えられる。それらの点から、山町筋における土蔵造りの町並みは成立当初は防火のためのものであったが、現在に継承されるなかで防災性能に加えて、山町筋の商業地としての繁栄の歴史や山町筋に暮らす人々の誇りを表すシンボルとなっていると考えられる。

2. 山町筋の課題と今後の展望

この調査から、山町筋の課題がいくつか見つかった。

まず、モータリゼーションの流れの中で、山町筋の活気が失われている点である。これに関しては「高岡市都市計画マスタープラン」の中に「歴史的資源の活用や魅力ある歩行者空間の整備により、滞留性、回遊性

の向上と賑わい創出を図る。」(「高岡市都市計画マスタープラン」 2005 :45)という文言があるが、都市計画が作られてから約10年経つ現在でも課題の解決には至っておらず、今後も対策が必要である。

また、住民間の意識の相違も一つの課題といえる。伝統と格式のある町として山町筋は貴重な地域であるが、伝統的な行事と新しいイベントが活発に行われるなかで、住民間の世代間ギャップや町内会間の意識差が生じていることがわかった。そうしたギャップが住民間で生じること自体は山町筋の住民それぞれの誇りの表れであり、この地域の独自性としてポジティブに受け止められるべきである。一方で、住民が主体で様々なイベントを開催することは地域活性化のために効果的なものであり、今後は両者を損なわない柔軟な取り組みが求められるであろう。

最後に、土蔵造り町家を維持していく住民の負担である。山町筋が伝統的建造物群保存地区に指定されたことにより、住民へは市から家屋の維持・修繕費用の補助が出されている。しかし、修理補助の申請は着工の2年前に行わねばならず緊急の修理には対応が追いつかないことや、すべての建築行為に許可が必要となっていることなど、日々の生活に影響のある規則が定められている。A家の方は、「文化財にして欲しいと頼まなければ、自宅を文化財にはしなかった。」と話しており、B家の方も、「家を維持していくには、自分たちでお金を用意しておかないとならない。」と話し、その苦労が伝わってきた。今後も土蔵造りの町並みを存続させていくために、住民と市が協力していくことが必要であろう。

当初課題となると考えていた、土蔵造りの耐震性能については、住民への聞き取り結果やデータを見る限りでは特に問題は見つからなかった。一方、データから古い木造家屋が多いことがわかり、今後はリノベーションなども含めその老朽化への対策が必要となることが予測される。

謝辞 本研究を進めるにあたり、聞き取りにご協力いただいた山町筋の方々や、高岡市文化財課、建築指導課の方々に深く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

注

- 1) 重要伝統的建造物群保存地区に選定されているのは、守山町と小馬出町の各全域と、御馬出町、木舟町、一番町、源平町、元町の各一部である。

文献

- 鈴木庄之助編1890. 『日本全国貴族院多額納税者議員互選名簿』. 22-23.
- 高岡市2005. 『高岡市都市計画マスタープラン 2005』, 45p.
- 高岡市史編纂委員会編1982. 『高岡市史』, 高岡市.
- 豊巻友海・葉袋奈美子2010. 輪島市街地の土蔵の利用状況と能登半島地震における対応. 日本建築学会技術報告集16-32: 237-240.
- 初田 亨・中森 勉 1987. 富山県における明治期の火災予防と建築制限. 日本建築学会計画系論文報告集379: 102-111.

金屋町における景観と住民意識

豊田 明奏

I はじめに

現在、全国各地で地域を活性化するための様々なまちづくりが行われているが、中でも重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建地区）に指定されている地域には、歴史ある町並みを活かした観光事業が活発に行われている地域もある。2012年に重伝建地区に指定された高岡市金屋町では、どのような景観に対する取り組みが行われ、住民は景観に対してどのような意識を持っているのだろうか。

高岡市金屋町では、同市の歴史的町並みを持つ山町筋や吉久地区と比べ、早い時期から住民によって積極的な景観保全活動が行われてきた（山口 2010）。金屋町の中でも石畳通り（図1、図2）は多くの伝統的家屋が立ち並び、国内外から見物客が訪れる。しかし、他の重伝建地区に見られるような観光地に必要な飲食店・土産物屋は少ない。また、重伝建地区内であっても、石畳通り以外の場所は、金屋町の重要な特徴である千本格子を備えていない町家や現代的な住宅も多く、石畳通りの景観と比べると、ばらつきがある印象を受ける（図3）。重伝建地区の指定前に行われた住民意識調査¹⁾は存在するものの、指定後にはその後の傾向を示す追加の調査は行われていない。そこで、住民の景観保全に対する意欲が高いにも関わらず、景観にばらつきが存在する理由や町の未来像を明らかにするため、関係者に話を伺った。

II 地域の概要と調査方法

1. 地域の概要

1611年、加賀藩前田利長によって、砺波平野の西部金屋から7人の鋳物師を移住させたことから、金屋町は鋳物の町として発展してきた。現在の金屋町は2009年に合併した金屋古町、金屋上町、金屋東町、金屋中町、金屋西町の5町会、そして2010年には宮川町、2011年には金屋本町が合併し、合計7町会で構成されている（鎧塚・吉田 2016）。金屋町の伝統的景観の代表的なものとして、「さまのこ」と呼ばれる千本格子や土蔵、延焼防止の袖壁などがある。

2. 調査方法

金屋町でまちづくりに取り組む住民団体である金屋町

まちづくり協議会、町並みを考える藤グループ、金屋町自治会、高岡市教育委員会文化財課、そして金屋町住民に半構造化インタビューを行った。

III 調査結果と考察

はじめに、金屋町の産業と景観保全活動について鎧塚・吉田（2016:36-41）を参考に整理する。

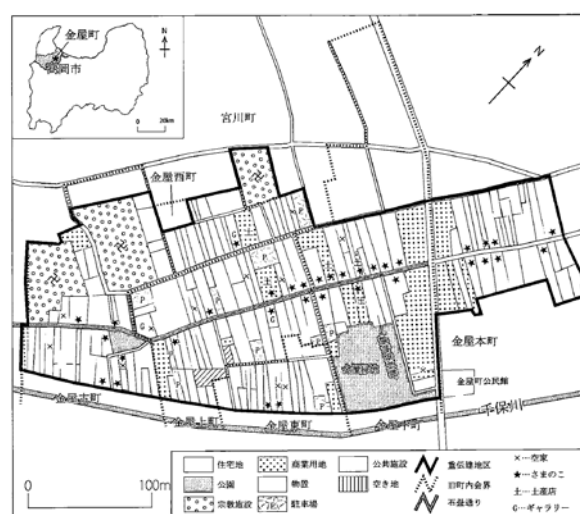


図1 対象地域

（鎧塚・吉田（2016：37）に掲載の図を転載。石畳は現在、金屋本町の重伝建地区内にも敷かれている。）



図2 石畳通り

（2016年8月31日著者撮影。千本格子を備えた歴史ある民家が並んでいる。）



図3 裏通りの風景

(2016年8月29日著者撮影。一階前面がシャッターに改造されている家や一般住宅が見られる。)

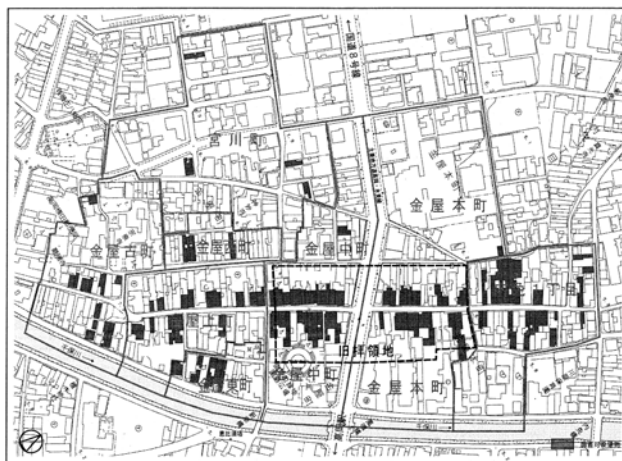


図4 旧拝領地および旧町会区分

(『鋳物の町並み：金屋町・内免伝統的建造物群保存対策調査報告書』(2011:35) 掲載の図を転載)

1. 金屋町の拡大と産業

前田利長が7人の鋳物師に与えた拝領地(図4)は現在の金屋町の北側半分ほど、長さ百間幅五十間の範囲だったが、1622年に千本川が川崩れを起こした際に南側の横田村の土地も替え地として拝領されたことなどを背景に、南へ拡大した。その後、江戸時代末期までには東側の千本川沿いの川岸の開拓が進み、住宅も増加している(高岡市教育委員会 2011)。東側に対して、西側は江戸末期の時点でまだ田が広がっており、住民への聞き取りによると、昭和になってからも「たかたんぼ」と呼ばれていた。明治期以降は、戦中の銅の使用制限で鋳物師にとって厳しい時代であったが、銅の鋳造技術を活かしたアルミニウム製品で新たな発展を遂げた。しかし、1975年に戸出工業団地ができるなど、多くの工場が金屋町から転出し、金屋町は居住地としての性質が高まった。

2. 景観保全活動

金屋町では、1979年以降、行政と住民が観光保全活動に取り組んできた。1984年には、高岡市が「鋳物の町、金屋通り整備基本計画」を策定し、富山県が「魅力あるまちづくり推進地区」に指定するなど、1980年代の段階から金屋町の歴史的価値を見出している。また、「居住環境を重視した町並み保存」という住民からの希望を前提に、無電柱化や金屋緑地公園の整備、融雪装置の設置など次々とハード面の整備がなされた。路面デザインを石畳にした理由は、舗装する前の砂利道に類似し、且つ金屋町の伝統的景観に調和させる狙いがあった。石畳の中には、銅片が埋め込まれ、ハート型が隠れた凝ったデザインとなっている。住民への聞き取りによると、石畳が敷かれるきっかけとなったのは、金屋町での小火騒ぎだ

ったという。その日はちょうど除雪をした後だったため、消防車が入ることができたが、豪雪地域でもあり備えのため、金屋町通り(今の石畳通り)の両側の家の前面を壊し、1mずつ道幅を増やすという提案を住民側から行政側へ行った。それを受けて、調査に来た建設省は、金屋町の歴史と文化の残った町並みを見て、家屋の一部を壊すのではなく、融雪装置付きの石畳を敷くことに決めた。

住民側も、1980年代から「金屋町まちづくり推進協議会」の発足や「金屋町まちづくり憲章」の制定への参画など、ソフト面の取り組みに積極的だった。山口(2010:39)によると、この時代、全国的に重伝建地区が消極的にとらえられていたこともあり、「伝建地区にはしない」という前提のもとに行政による事業が行われていた。山町筋の重伝建地区指定後の経過や住民の世代交代を背景に、2000年以降は、行政によって、各種の景観計画や調査が行われ、2012年に金屋町は重伝建地区に指定された。聞き取りでは、住民に体力的な余裕があったころは、家を自分で修理することもできたが、高齢化の進行によりそれが困難となり、制度に頼ることにしたという話もあった。

2000年以降も、住民主導の作品展示イベントを行うなど、景観の保全・文化の発信が引き続き行われてきた。

3. 関係者への聞き取り

関係者への聞き取りは、以下の3点を中心に行った。

- ① 石畳通りとそれ以外の通りの景観
- ② 観光について
- ③ 金屋町の今後(理想の金屋町)

景観に対する取り組みだけでなく、観光やその他の事業の方向性によっては、それらの活動が景観に変化をも

たらず可能性があるため、聞き取りは多面的に行うよう注意した。

1) 高岡市教育委員会文化財課

文化財課は金屋町の文化財の保存や景観の維持のため、住民への説明や景観を阻害する工作物のチェックなども行っており、住民と多く関わりを持っている。以下、聞き取りの内容をまとめる。

石畳舗装が始まったのは1989年であり、金屋町の歴史が江戸時代から続いていることを考えると、それほど歴史的背景があるわけではない。現状で石畳通りが観光に役立っているのは確かだが、長い歴史に突然現れた石畳を町全体に広げるとはしたくない。ただ、住民が景観にマッチしていると考えているので、今の状態が維持されている。鑄物の町の性質上、「石畳通り沿いに玄関、後ろに作業場」という構造になっており、どうしても表と裏という性質があったと考える。裏の通りには伝統的でない建物もあるが、町内会の繋がりや千本川沿いの趣ある住宅の存在を考慮し、重伝建地区に指定した。また、通りから外れた場所にある寺も、昔から人が集まれる、地域にとって不可欠な構成要素と考えられるため、範囲に含めた。それらの複合的な特徴も金屋町であると認識している。景観に関する懸案事項としては、これから世代交代したときに家を手放してしまわないか、重伝建地区について十分理解のある人が入居するかが挙げられる。石畳通り沿いも含め、景観に調和しない現代的な建物が存在することも気がかりである。当時の建材を使っていることに文化財としての価値があるため、むやみに修理・修景はしたくないが、本来の姿でない建物に関しては復元を行い、景観の向上につなげていきたい。

重伝建地区の制度では、歴史的背景を踏まえると、住宅の扱いになるが、観光地を目指すかどうかは住民次第である。行政が積極的に関わることでメディアに取り上げられ、成功事例とされることはあるが、住民が納得していなければ、長続きはしない。住民からの信頼を失わないために、地元の方の意見に耳を傾ける必要があると考えている。

現在の金屋町は、国レベルで認められたことを意味する重伝建地区に指定されたという点では、望ましい形になっていると考えている。金屋町の歴史・文化が引き継がれていくためには、住民が行っているような空き家対策で人口が減らないようにし、そこに人が住んでいることが必要で、それによって建物も維持されていくことが理想だと考える。

以上の聞き取り調査から、複合的な金屋町の景観を大切に、見かけだけを整えるのではなく、歴史ある文化

財をできるだけ長く維持できるよう慎重に取り組んでいることがわかった。また、観光地化についても住民の意思・生活を尊重している。

2) 金屋町まちづくり協議会

金屋町まちづくり協議会（以下、まちづくり協議会）は、1982年に「金屋町まちづくり推進協議会」として地元有志により設立された。主な活動内容は、現在の金屋町公民館（以前は鑄物資料館としても使用されていた）の設置、石畳の路面デザイン事業、さまのこフェスタの開催などが挙げられる。以下、聞き取りの内容をまとめる。

石畳通りの景観については、重伝建地区に指定されてから、年間5軒ほどずつ補助金を使って修景されているため、少しずつ昔の町並みに戻ってきている感覚がある。昔と全く同じではないが、現代の重伝建の風景なので、それはそれでいいと考えている。石畳通りに面している家とそうでない家に住む住民の間で、意識の差を感じることがたまにあるが、次第にその差も埋まってきて、「やはり石畳通りが中心なので、協力しなくては」という雰囲気になってきた。重伝建地区に指定される際の住民へのアンケートでは、賛成がすでに9割を超えていたが、重伝建地区に指定されたことで、改めて自分たちの町が素晴らしい町だということを認識したことも意識の差を埋めた要因の一つだろう。

石畳通り以外（ここでは金屋西町の「裏通り」と呼ばれる道路沿い）の場所については、重伝建地区内であれば、申請をすれば補助金が出るので、少しずつ修景されていくと考えている。裏通りの家は昭和30年、40年代に建て替えられた家が多く、なかなか修景が進まない要因となっているが、すでに千本格子に修景した家も数軒はある。裏通りにも石畳を敷きたいという意見は出ているが、石畳通りより道幅が広いことや同じ石畳への改造には莫大な費用がかかるため、市から許可が下りない。

観光については、今は観光客のマナーが良いため、今のところ大きな問題は生じていない。さまのこフェスタを開催していた頃は家の中に遠慮せずに入ってくるので困っている家もあった。しかし、今でも町並みの継承のため、年に1度は石畳通りの方に協力してもらい、作品展示のイベントは続けている。また、飲食店や土産物屋がまだ少なく、観光客は物足りないと感じることもあるだろうが、住民には座って休む店などは必要ない。少しずつ観光地化はしてきているが、住民の生活を優先し、差し障りのない程度でやっていきたい。

理想の金屋町は「暮らしたい町、暮らしやすい町、活力ある町」。これを実現するには、町に人がいることが必

要であり、せめて人口が減らないようにしたい。空き家問題が深刻で、何十年も前に空き家になった家を修理するには多大な費用がかかり、ボランティアを募るにしても先導してくれるノウハウを持った人が金屋町にはまだいないので、まずは金屋町の認知度を上げていく段階にある。注目されるためには、金屋町の歴史ある魅力をより一層磨くことが必要である。

聞き取りに協力頂いた住民3人のうち、2人が重伝建地区への指定後、補助金を利用した修景・改修の経験があった。そのうちの1人は、申請を出している家が他にも何軒もあり、1年待たなければならなかった。市は緊急度の高い建築物から修理をしていくため、今申請すると、3～5年は待たなければならぬ状況のようである。しかし、伝統的な建物の外観を修理する場合は8割（限度額700万円）、それ以外の建物の場合は7割（限度額500万円）が補助金でカバーされるため、非常にありがたい制度だと感じているそうである。石畳通り以外の景観について、個人の住宅であるということもあり、はっきりとした意見は出なかった。しかし、石畳通り以外の住民にも修景の意志があり、それが徐々に実行されていることもわかった。過度な観光地化は望んでおらず、住民の生活を第一としていることから、土産物屋や飲食店が並んでいるような他の一部の重伝建地区との方針の違いが読み取れる。また、この3人は寄付金や会員費で空き家を買取り、居住体験町家の完成に向けて尽力しているNPO金屋町元気プロジェクトにも参加していて、金屋町への移住者を呼び寄せることに非常に熱意があった。

3) 町なみを考える藤グループ

1997年、地元の主婦たちが町の環境改善のために結成し、清掃活動から金屋町のボランティアガイドまで幅広い活動を行っている。以下、聞き取りの内容である。

石畳通りは以前は商売をしている家が多かったことや道幅が狭いこともあり、家の前にはほぼ何も置いておらず、すっきりした印象がある。逆に裏通りは道幅が広く、ホースやブランターなどが見られ、普通の住宅街の景観イメージである。西町の裏通りのあたりは、昭和30～40年代に家の前面を壊し、駐車スペースを作った家が多い。その際、木造の戸は撤去され、さまのこ風のアルミサッシに代替された。その背景には、アルミニウム会社の社長が以前居住しており、金屋町の住民を優先的に社員に採用していたため、住民との関係が深かったことがある。現在、さまのこがほばない裏通りの家も、子世代との同居など何かきっかけがあれば建て替えが進むだろう。

観光に対する意識は、石畳通りとそれ以外の場所に住む人とでは多少の差がある。イベントの際、石畳通りの

人はいや応なしに協力しなければならないが、裏に住んでいると家の中を見せてとも言われたいし、気軽に参加できる。

また、外部の人から「金沢や高山のようになればいいね」と言われることがある。お店が増えてもいいが、ほどほどが良い。生活が第一で、大手企業の資本を入れるようなことは考えていない。このような姿勢の金屋町に満足するかは個人の自由で、「つまらない」という人もいれば、「静かでいい」、「金沢を見てきたが、東京と同じ。金屋町を見てほっとした」と言ってくれる人もいる。また、日本遺産に指定されて、「私たちがやっていたことは間違っていなかった」と実感し、国の文化庁に認められたことはモチベーションを向上させた。

理想の金屋町は、一つ一つの家に人が住んでいて、伝統文化を引き継いでいく人がいてほしい。さらに、子ども達の声も聞こえてくるような町なら尚良く、小さい頃から金屋町の伝統文化を体験させ、町に誇りを持ち、それらを継承して行ってほしい。

平成20年の『金屋町の町並み保存に関するアンケート調査報告書』の中で、石畳に面していない家に住むの方が観光客を歓迎する傾向にあることが報告されていたが、その傾向は現在でも続いていると思われ、石畳通り沿いの町家に住む人に比べると、イベントなどの際にも気楽にいられることが理由のようである。

4) 金屋町自治会

金屋町自治会（以下、自治会）は直接的に景観保全に関わっていないが、住民をはじめ、金屋町まちづくり協議会などの下部組織やその他の住民団体を統括している（鎧塚・吉田 2016）。以下は、聞き取りの内容である。

石畳通りの一本裏の通りは、昭和40年前後はさまのこが並んでいた。車庫にするために全部ばらして引き戸にしてしまったため、車庫を残すことを前提にすると、引き戸に千本格子の装飾を入れるくらいの改修しかできないだろう。また、裏通りにも石畳を入れてほしいという意見も出ている。

観光のための町づくりはしたくない。住む場所でない町にはしたくないため、空き家を利用して休憩所を作ったり、店を作ったりして時間をかけて共存する必要がある。

元気プロジェクトで金屋町のことを知ってもらい、できれば次の世代を生み出してくれる若い人に移住してほしい。将来の金屋町の中核を担う子どもたちを増やすためにも、このような空き家対策が必要で、伝統的な町並みも重伝建地区以外の場所の新興住宅地もどちらも大切にしなければならない。新旧の町並みのエリア両方がサ

ポートし合って、まちづくりを行うことが必要である。

自治会の方々からの聞き取りの内容は、他での聞き取りの内容と類似しており、自治会の方針が金屋町に浸透していることがわかる。

5) 金屋町住民 Aさん、Bさん

旧宮川町の工場の跡地にできた新興住宅地にお住まいの方2人に話を伺った。Aさんは娘世帯と同居できる新居を求めて、金屋町へ移り住んだ。Bさんは、町家に住んでいたが、娘が訪ねてきた時に駐車するスペースがないことや庭がないことに不便を感じ、転居を決めた。

金屋町に合併された新興住宅地は石畳通りから離れていて、景観も全く異なるため、自分たちには関係がないという気持ちもあった。しかし、金屋町の住民は外部からやって来た人を排除せず、どんな意見も受け入れていこうとする姿勢があり、金屋町を何とかしたいという住民の熱意と祭りの力で心を動かされ、金屋町に馴染むことができた。

金屋町は道も狭いし、昔から住んでいる人の抵抗も出てくると考えられるので、観光地化するメリットは何もないのかもしれないが、高山ほどの観光地化でなくとも、もう少し石畳通り周辺にも土産物屋や駐車スペース、食堂などができて、観光客を呼べる街になってほしい。また、観光地化する場合は石畳通りだけで良いと思う。今住んでいる旧宮川町は重伝建地区でもないのに、人も来ないと思うし、静かな住宅地であってほしいが、何か要請があれば、いつでも協力したい。

新興住宅地の住民2人は金屋町の古い町並みのエリアに対して積極的に協力する姿勢を示している。自治会に直接関わった経験のある方に聞き取りを行ったということもあるが、金屋町との合併に反対していた宮川町の住民も祭りを通して、馴染んだと言っていることから、自治会が挙げている「新旧のエリアがサポートし合う」という理想は、現状叶っているのではないだろうか。金屋町の住民には周囲を巻き込んでまちづくりを行う力があると言える。

6) 金屋町住民 Cさん

以下は、石畳通りで商店を営む方への聞き取りの内容である。

金屋町の住民は、小さい頃から御印祭にも参加しているので、愛着は持っている。広い町ではないため、皆顔見知りで、通学路にある作業場を覗いて「おっちゃん何しているの?」と声をかけることもあった。裏通りも昔ながらの生活感が溢れる面白い場所である。裏通りに観光客が入ってくることに対して特に抵抗はない。

金屋町のことは色々な方に知っていただきたいが、無

理やり人を呼ぶのではなく、興味を持って訪れてくれた方にはしっかりと相手して、高岡のファンになってほしい。そういう環境があれば、無理に観光地化することはない。まだ観光客も多いわけではないし、交通の便が良くなった今、PR次第でお客さんが来てくれると思うので、地道に活動が続けていけば良いと思う。

まちづくり協議会の方から、商売をしている人は、観光地化について異なる意見を持っているかもしれないという話を聞き、Cさんに聞き取りをした。しかし、Cさんも一大観光地にするというよりは、「金屋町に興味のある人に来てほしい」という思いの方が強い。このような態勢は、「金屋町を知ってもらい、その中で金屋町に移住する人を見つけない」という自治会、まちづくり協議会の考えと共通するものがある。

IV まとめ

今回の調査では、様々な立場から金屋町に関わる人々へインタビューを行い、景観と今後のまちづくりに対する意見をお聞きした。結果として、金屋町住民の一貫した「金屋町を知ってもらい、伝統文化を残したい」という方針が全てのまちづくりを支えていることが分かった。重伝建地区内で景観の差が生じている理由としては、以下の4点が挙げられる。まず1点目は、江戸時代に拝領された時から、金屋町通りが中心となり東西南北に広がってきたことである。町家の玄関は金屋町通り側にあり、後ろ側の通りは住宅の裏口にあたり、作業場があった。その多くは現在駐車スペースやシャッター付きの車庫になっている。2点目は、裏通りと呼ばれる金屋町通りから一本西側の道路では、昭和30～40年代に住宅の前面を壊して駐車スペースを作ったり、一階部分を車庫にしたりの動きがあり、多くが千本格子を撤去してしまっている。駐車場を設けていない家も、アルミニウム会社と関わりが深かった影響か、アルミニウムの引き違い戸になっている家もある。金屋町の景観保全活動が始まったのは昭和54年であるから、保全活動が活発化する前までに建て替えが済んでしまっていたと考えられる。3点目は、重伝建地区という制度が、点ではなく面的に指定するものということである。例えば、『鋳物の町並み：金屋町・内免伝統的建造物群保存対策調査報告書』によると、地域コミュニティの境界も考慮に入れて範囲が決定されている。なぜなら、保存地区になれば建築行為に許可が必要となり、反対する住民も当然出てくるが、地域コミュニティが住民間の意識の醸成に大きな役割を果たすと考えられているからである。このように、重伝建地区制度は歴史ある文化財単体を対象とするのではなく、面的

広がりをもって指定するため、伝統的建造物が並んでいない場所も様々な考慮から、保存地区の対象にしている。最後に4点目として、これは重伝建地区全体にも言えることだが、修景のため補助金を利用したい場合、3～5年は順番待ちをしなければならないことが挙げられる。高岡市は現在、2つの重伝建地区を持っており、毎年それぞれに予算を出している。限られた予算の中で、修理の緊急度・景観の向上度・待機期間などを考慮し、優先順位を付け、毎年5軒ほど修理・修景を行っているため、すぐに景観が変わるようなことはない。重伝建地区指定からまだ4年ほどしか経っていないため、金屋町の景観は現在、過渡期にあると言える。以上の4点によって金屋町の景観の差が生み出されていると考えられる。

住民と行政の方に、金屋町の町並みのイメージ・今後について聞き取りをしたところ、石畳通りはすっかりとした歴史的町並みになっているが、一部の現代的な住宅やさまのこを備えていない建物については気がかりなようだ。それらの修景をしていきたいという声もある中、一部の住民からは「町並みを少し意識してくれている部分もあるし、住んでくれていることが嬉しい」といった意見もあった。また、裏通りの景観についてであるが、作業場が残っていたり、日用品が道に出ていたり、さまのこはほとんどないが、生活感溢れる面白い景観であると捉えられていた。鎧塚・吉田(2016:40)によると、重伝建地区指定以前に住民用の駐車場が設置されており、家の前面を駐車場にしている家は千本格子への修景も可能となっている。聞き取りによれば、裏通りの住民にも修景の意志があるため、きっかけがあれば、修景する家も増えてくるだろう。

今後観光地化を推し進めるかによって景観も変化していくと考え、観光についての意見も聞いた。商売をしている方も含め、今回聞き取りをした全員が過度な観光地化は望んでいないことが分かった。現在の程度がちょうどよいと考えている人もいれば、もう少し店を増やして観光客を受け入れる態勢を整えたいと思っている住民もいた。しかし、何よりも生活を大切にしたいと考えている人が多く、土産物の購買や飲食をメインとした観光ではなく、伝統ある町並みや伝統文化の方に注目してほしいと考えていることも分かった。

金屋町の理想について尋ねると、ほぼ全員から「人が住んでいる町」、「人口が減らない町」が挙げられ、現在、

最も金屋町が望んでいることは、伝統文化の発信をすることによって、注目を集め、金屋町に興味を持った人が移住してくることであると分かった。それだけ空き家や人口減少の問題が深刻で、空き家も年数が経つごとに老朽化が進み、その分修理は費用の面でも難しくなっている。住民主導の空き家対策が成功し、子どもの声の溢れる町になれば、現在放置されている空き家も修理・修景されていき、結果として、町並みの保存・景観の更なる向上に繋がっていくだろう。町並みを保存するためには、世代交代しても町に住み続けること、そして、伝統文化の教育・継承を続けていくことが必要である。金屋町では、さまざまな立場の住民が同じ方向を向いており、行政側も住民の意見を尊重しサポートしていて、まちづくりに理想的な状態にあると考える。日本遺産にも指定された金屋町の魅力をさらに広め、理想の金屋町が達成されれば、全国の空き家・人口減少問題に頭を悩ませている地域へのエールとなるだろう。

謝辞 高岡市教育委員会文化財課の皆様、金屋町自治会の皆様、金屋町まちづくり協議会の皆様、町なみを考える藤グループの皆様、金屋町住民の皆様、貴重なお時間を割いて調査にご協力頂き、ありがとうございました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 高岡市教育委員会文化財課による『金屋町の町並み保存に関するアンケート調査報告書』(2008年)、『鋳物の町並み：金屋町・内免伝統的建造物群保存対策調査報告書』(2011年)が挙げられる。

文献

- 高岡市教育委員会 2008. 『金屋町の町並み保存に関するアンケート調査報告書』高岡市教育委員会。
- 高岡市教育委員会 2011. 『鋳物の町並み：金屋町・内免伝統的建造物群保存対策調査報告書』高岡市教育委員会。
- 山口太郎 2010. 富山県高岡市における歴史的町並み保全への取り組み―伝統的建造物群保存地区制度に着目して―. 地域学研究 23: 29-47
- 鎧塚典子・吉田国光 2016. 重要伝統的建造物群保存地区における景観保全活動の展開―富山県高岡市金屋町の事例―. 日本海域研究 47: 35-47.

伝統的都市祭礼における文化財の継承とその課題

—高岡御車山祭を事例に—

仲地 桃子

I はじめに

調査対象地域の富山県高岡市では、毎年多くの祭が開催されているが、中でも高岡御車山祭は400年の歴史を持ち、国の有形・無形の重要民俗文化財に指定されている数少ない祭の一つでもある。そのような祭は、日本の文化継承を考える上で大変意義深い教えを我々にもたらししてくれるのではないかと考えた。そこで、今回の調査は、高岡市の歴史や高岡御車山、現在祭に関わる人々の考え等を総合的に捉え、伝統と歴史ある地域が祭等の有形・無形文化財を後世に伝える上での課題は何処にあるのか、そして克服方法を考察することを目的とした。

II章の本論においては、まず第1節で日本の祭礼研究を振り返り、上記の考察をするために設定した、聞き取り調査における調査項目を示す。第2節では、調査対象地である高岡市の歴史を、高岡御車山祭に関わりのある部分を中心にまとめる。第3節では調査対象の高岡御車山祭についてまとめ、第4節では高岡御車山祭と関わりのある人々への聞き取り調査をまとめる。そして最後にIII章において、II章の本論を踏まえて考察を行う。

II 本論

1. 日本における祭礼研究

今回祭礼研究をするに当たって影響を受けた人類学や民俗学の研究を紹介、検討していきたい。

まず、祭礼研究を行っている様々な学問とその分野における研究の傾向を考慮した上で、祭礼研究の今後の方向性の提案を行った論文として、相澤（2008）の「人とモノとの関係性から見る祭礼の形成：北海道江差町における姥神大神宮祭を事例に」が挙げられる。この論文で筆者は、民俗学、人類学では、山車や神輿が祭の中心であるにもかかわらず、山車というモノ自体より、それに関与する人に関心が向けられており、地理学の方が、モノという物理的な側面からの祭礼の研究が多いと述べている。しかし、都市構造と祭礼の関係性を指摘する地理学の研究に対し、筆者は祭礼に関わる人々の姿が全く抜け落ちていると批判。祭礼という事象や出来事を、人とモノ、あるいは個人と社会の、どちらかに還元して説明

するのではなく、その相互作用を追うことで祭礼がどのように形成されているかを明らかにすることが重要であると述べている。

また、松平（1990）の『都市祝祭の社会学』では、日本の都市祝祭を時間集約的祝祭、空間集約的祝祭に分けて考え、時間集約的祝祭の中でも閉鎖系（伝統型）、開放系（合衆型）に分類して考えている。筆者は、様々なバリエーションを持って生成しつつある合衆型祝祭と、変質し観念化しつつある伝統型祝祭とが並存している現代の都市祝祭の状況を示し、脱産業化時代へと向かう時期の都市生活文化の実態を描いている。

以上のような先行研究から、祭礼を人とモノ、個人と社会の相互作用から捉えることの重要性や、伝統的都市祝祭も変質・観念化しつつあり、時代の変化と都市生活文化の反映される祭礼は、現代の都市の本質的な理解につながるとことが示された。そこで、今回の聞き取り調査においては、①高岡御車山祭はどのような存在か、②祭で一番思い入れのあるモノ・場所・空間はあるか、③祭の効果、④大変なことや問題点、⑤特に気になった祭や社会の変化、⑥今後の展望、等を質問項目とし、伝統的都市祭礼である高岡御車山祭は社会変化の中でどのように形成・維持されてきたのか、高岡御車山祭における人とモノとの関係性はどのようなものか、を明らかにする。

2. 高岡の歴史

この節では、高岡市教育委員会編（2000）『高岡御車山』、藤田・田林編（2007）『日本の地誌7 中部圏』から、高岡の歴史を概観する。

加賀藩二代目藩主前田利長公が、「関野」と呼ばれていた荒地に築いた高岡城に入城したのは、1609年9月13日のことである。利長は、北陸道の往還筋を、城下を通らせるように変え、人や物が集まる経済都市としての発展を図った。武家屋敷は城の周囲や南側に連なる台地上に配置され、上級の家臣ほど城の近くに住んでいた。町屋は台地の西側、一段下がった南北に長い場所に、約75メートル四方の碁盤目状に割り振られた。また、町人は間口1.5～3間、奥行き17間の敷地が藩より無租地として分

け与えられた。このような町は「本町」と呼ばれ、35町にも及んだ。御車山を所有する「山町」十ヶ町は本町の中心に位置する。

利長は、高岡に城を築いたが、1614年に亡くなった。さらに、1615年の一国一城令により高岡城は廃城となり、家臣団は金沢へ引き上げていった。当初城下町として造られた高岡は、急速にさびれはじめた。このような状態を憂えた三代藩主前田利常は、1620年に高岡町民の他所への転出を禁じ、商工業都市への転換を図った。藩の米蔵、塩蔵を古城内に設置し、高岡を米集散の中心地とすると共に専売品であった塩を高岡に集めた。布・綿の取引も高岡の重要な産業となり、1824年には加越能三州における綿の専売権が高岡に与えられた。また、鋳物の生産・流通も町経済の発展にとって忘れることのできないものである。このような産業の振興により、高岡は加賀藩では金沢に次ぐ商工業都市として発展した。

明治に入ると、高岡町の行政機構はめまぐるしく変遷し、1883年（明治16年）に富山県の所属となった。そして、1889年には全国で初めて市制が施行された31都市の一つとして「高岡市」が誕生し、県西の中心地として、東の中心であった富山市と規模的に均衡していた。また、この頃北海道で豊漁であったニシンが肥料として多く使われるようになり、伏木港に輸入されたものが高岡の肥料取引所に集められ、高岡商人から農家へと売られていった。1885年には高岡米商会所を開業し、名古屋や金沢の市場に匹敵する全国7位の取引高を誇ったこともあった。銅器産業も幕藩体制の崩壊により職を失った加賀象嵌師を高岡に招き、高級化指向を目指すなど、新たな隆盛期を迎えている。明治20年から30年代にかけては、高岡紡績や電灯会社の設立、鉄道の開設と続き、日本海有数の商工業都市としての高岡の位置は、ますます揺るぎないものとなっていく。1900年（明治33年）、高岡のまちは未曾有の大火災にみまわれ、市域の6割近くが消失し、山町は壊滅状態になったが、大火後の復旧にあたって防火構造の土蔵造りが多く建てられた。その大火において以前からの土蔵造りが2棟焼け残り、防火性が証明されたことや、明治32年に施行された富山県令第51号「建物制限規則」で旧北陸道筋とその近辺が施行区域に指定され、家の新築の際は土蔵造りなどの防火構造とすることなどが義務づけられたことによる。このような構造の建物をつくるには多額の経費を要したため、実際、土蔵造りを建設することができたのは、旧北陸道沿いの大商人が住む地区が中心であった。現在山町筋の町並みは、土蔵造りと「赤レンガの銀行」を始めとする洋風建築および近代建築が混在している。



写真1 現在の山町筋の町並み

(2016年9月1日筆者撮影)

50棟以上の伝統的建造物群は、いずれも明治から大正にかけての「商都高岡」の繁栄を今に伝える貴重な歴史遺産となっている。

戦後、人口規模は富山市と同程度であったが、戦後の経済発展格差を理由に徐々に差が開き始めた。特に、1970年代以降、高度経済成長を牽引した重工業の失速・国内経済構造の変化（脱工業化・サービス経済）・管理機能などの拠点性の相対的弱体化を受け、1980年代半ば以降には人口が社会減・絶対減に転じた。その後、富山市に社会経済機能が一極集中した結果、両市の位置付けは対立関係から階層関係へ移行した。

3. 高岡御車山祭

高岡御車山は、1609年に前田利長が高岡に城を築いて町を開いたおり、城下の町内の大町に与えたもので、祭礼の山車として奉曳きしたのが始まりといわれている。伝承によれば、1588年に豊臣秀吉が京都の聚楽第に後陽成天皇と正親町上皇の行幸を仰いだ時に使用された鳳輦の車を加賀藩初代藩主前田利家に下賜し、それが利長に伝わり、利長が高岡町民に与え、改装させたものであるという。このような由緒を証明するものはほとんど残っておらず、関野神社所蔵の2点の古文書が、前田利長公と御車山との繋がりを証明する唯一の資料となっている。この節では、高岡市教育委員会 2000.『高岡御車山』と高岡市 2016.高岡市歴史まちづくり計画 第2章 高岡の歴史的風致の維持及び向上に関する方針を参考にして概説する。

高岡御車山祭は、毎年5月1日に執り行われる。この日は、山町も含めた53ヶ町より崇拝されている「関野神社」の春季例大祭の日である。行事は、未だ寒さの厳



写真2 勢揃いする御車山

(出典 高岡御車山 公式ホームページより)

しい1月25日の高岡御車山保存会総会から始まる。総会は関野神社で行われ、その年の代表となる年番長と年番代表が決められる。2月頃からは花傘づくりが始まる。赤・白・黄の三色の菊花が付けられた大枝が傘状に組み込まれた姿は、重厚な御車山を一層華やかなものに見せている。花傘づくりは女性の仕事と決まっており、女性たちは町ごとに決められた場所に集まり、時には世間話をしながらコツコツと花を作る。4月3日には与四兵衛祭が行われる。津幡屋与四兵衛は、放生津で御車山と類似の山車が作られたことに対し命をかけて意義を唱え、牢中で獄死した傑人である。4月30日、各山は収蔵庫から曳き出され「山宿」前に運ばれる。昔から山宿を勤める家は、町内で転入や慶事があった家などが選ばれており、その家では畳や戸・障子の取り替えを行い、一家心して準備を行っていた。山宿では、人形・幔幕の飾り付けが終了した後、入魂式を行い、町内の関係者や見物人が集い「宵祭」が行われる。近年は、各町内とも囃子を流し、酒を振る舞い、町名や山を染め抜いた手拭いや煎餅を配るなど、より盛大化する傾向にある。宵祭から一夜明けると祭礼当日である。当日は、朝早くから山宿前で山車が組み立てられ、飾り付けられる。その後修祓が行われた後、町内を曳き回され、午前11時までに「坂下町」で勢揃いする。一同揃った後、手打ち式が行われ、山車は坂下町を上っていくが、これは利長在世中、城内まで曳き登った古例に因むものだとも言われている。その後、片原町十字路で市長の出迎え、勢揃い式が行われる。

これは、かつてこの地が御貸家（町奉行の居宅）であり、代々の町奉行が御車山を観覧した名残で行われるものである。御車山は、高岡市民のみならず、周辺地域の人々にとっても古くから大きな興味の対象となっており、勢揃い式には、市内外から道路を埋め尽くさんばかりの多くの観光客が集まり、御車山の形姿に見入っている。勢揃い式が終わると、山車は一台一台向きを変え順に動き出す。その後、午後6時の関野神社での曳き別れまで、袴と一文字傘に威儀を正した山役員が先頭を歩き、半纏に白足袋姿の曳き手が曳く山車は、所定のルートを巡行

する。この巡行路は開町来ほとんど変更がない。御車山の巡行は、秩父祭に見られるような賑々しいものでなく、ゆったりしたものである。また、各御車山の囃子は、お神楽を思わせるゆったりかつ典雅な趣の曲が多い。楽人は山町の者ではなく、近郊の特定の在所の人に代々受け継がれてきた。御車山の巡行が最も映えるのは、2000年（平成12年）に重要伝統的建造物群保存地区に指定された山町筋での巡行の様子である。主に土蔵造りの民家からなる商家町で、代表的な建物としては、1900年（明治33年）の大火の直後に建てられた重要文化財菅野家住宅、富山県指定文化財筏井家住宅、市指定文化財旧室崎家住宅（現高岡市土蔵造のまち資料館）や、1914年（大正3年）に建てられた赤レンガ造の富山銀行本店等が挙げられる。5月2日、御車山は飾り山部を解体し、収蔵庫に戻され、翌年の祭日までの永い眠りにつく。

高岡御車山は、通町、御馬出町、守山町、木舟町、小馬出町、一番街通、二番町の7基ある。御車山を構造的に見ると、地山と飾り山に区分することができる。飾り山上には町内の子どもが上る。飾り山部分の中央にそびえる心柱は神が降臨するための目印であり、御車山の曳き回しは、降臨した神々の巡行を表現している。御車山の山車は、金工技術や漆工技術など高岡の誇る伝統工芸技術の粋を集めたものと言われ、多くの名工の技術が施された逸品に彩られている。車輪は、木地に鮮やかな漆が塗られ、その上に桐や菊、加賀藩の家紋である剣梅鉢、龍などの文様の彫金金具が施されている。地山を飾る幔幕は、精巧な織物生地に優れた染色が施されたもので、濃青色や朱色などの生地上に、仙境図や春秋舞楽の図など様々な図柄が施されており、目にも鮮やかなものである。飾山を飾る高欄や後屏にはすぐれた漆工が施されている。高岡漆器は、開町後まもなく膳やお盆、箆、鏡台などの製作がはじまり、幕末から明治期にかけて勇介塗や錆絵、青貝塗などの独創的な技法が確立され、漆器産地としての基盤が築かれた。この他にも、微細な彫り物が成された長押や幕押さえなどの金具、人形衣装など、山車を着飾る意匠は見尽きることがない。

このように、高岡御車山祭の諸行事全体は、利長による町立て以来の高岡の歴史全体を感じることができるものであり、高岡の周辺にある同種の祭礼の基となるものである。規模も最大で、内容にも特色があり、屋台を用いた祭礼行事の代表的なものの一つであることから、1979年（昭和54年）2月3日、重要無形民俗文化財に指定された。

4. 高岡市民と高岡御車山祭

筆者が実際に高岡市を訪れてフィールドワークを行った期間は、2016年8月28日～31日、9月1日の、計5日間である。フィールドワークでは、立場の異なる5人の方々に高岡御車山祭に関する事柄を語っていただき、資料からだけでは読み取ることのできない側面を明らかにしようと試みた。5名の方の内訳は、山町筋に住むKさん、高岡市教育委員会文化財課のIさん、関野神社の神職をされているTさん、高岡御車山会館に勤めていらっしゃるYさん、高岡市立博物館の学芸員Uさんである。尚、プライバシーに留意して、氏名については仮名を用いている。インタビューの形式は、半構造化インタビューであり、聞きたい内容を前もっていくつか決めておいたが、基本的にその場の流れで自由に語っていただいた。聞きたい内容としてあらかじめ決めていた事項は、①高岡御車山祭はどのような存在か、②祭で一番思い入れのあるモノ・場所・空間はあるか、③祭の効果、④大変なことや問題点、⑤特に気になった、祭や社会の変化、⑥今後の展望、である。以下に調査結果を示す。

1) 山町筋に50年以上住む女性と高岡御車山祭

①高岡御車山祭はどのような存在か：外部（田舎）の大工さんが組み立ててくれるもの。旦那さんたちは、それを見ている。すべて地元の人たちでお祭りをやっている所より、お金がかかる。昔は山車に思い入れのある旦那さんがお金をパッと出したのであろうが、今は市からお金が出たり、町内会費用が他より高かったりする。通町は町内でやっており、お金が助かっているのではない。町内には責任者が2、3人いて、その人たちがずっと続けている。その人たちは大工さん等と仲良しで、ずっと交流している。花傘は手作りで、3年に一回作る。ボランティアは、5、6年前から来てくれており（つまり2回ほど手伝ってもらった）、花を作るのが好きな人たち、お母さん方も来てくれる。昔からの風習は、なかなか変えられない。

②祭で一番思い入れのあるモノ・場所・空間はあるか：今は仕出しだが、昔は祭のご馳走は全部自分たちで作った。20人ほどの大宴会で、片付けるのに2、3日かかるくらい。踊ったり跳ねたりで大変だった。親が亡くなり、みんな亡くなっていくと、人数は減っていった（今は13人ほど）。女の人は、山車は家の前を通っていくが、内のことばかりで、見ることもできなかった。

③祭の効果：祭があるから人に来てもらうことができ、楽しみである。大変でも苦にならない。「あんたも来られ、来られ。」と言って、人がたくさん来ても嫌な思いはしない。また、全国の祭を見に行く。「高岡の方がいいなあ…」と思うことは多いが、祭を頼りにあちこちを旅行するの

が好き。逆に、そういう人たちが御車山祭に来ることも多い。

④大変なことや問題点：個人的には、今はそんなに大変でないというか、気楽（仕出しがあるし、13人ぐらいしか来ないから）。

⑤特に気になった、祭や社会の変化：昔（嫁に来た頃、昭和35年）はたくさんの方が来たが、今は地元の方が来ない。観光客が来る。昔は遊びに行く所がそんなになかったが、今は娯楽が多い、忙しい時代。祭が、「珍しい娯楽」「唯一の楽しみ」でなくなった。昔は皆もっと着飾っていたが、今は着物を来てくる人はそんなにいない。子どもでも昔はもっと着飾って来た。

⑥今後の展望：⑤のような変化は少し寂しいので、もう少し賑わいが欲しい。しかし、外の、金沢あたりから来る人で、「ここは騒がしくなくて良い雰囲気だ」というようなことを言ってくれる人がいるが、そのように言ってくれれば、ここの良さを分かってくれているのだな、という風に感じる。賑わいが欲しいと言っても、少しずつ、どこかが賑わう、といった感じが良い。

2) 高岡市教育委員会文化財課と高岡御車山祭

①高岡御車山祭はどのような存在か：「高岡」と聞いたら思い出してもらえるもの。祭の中心。これから盛り上げていくもの。

②祭で一番思い入れのあるモノ・場所・空間はあるか：モノとしても祭としても重要で、我々の誇りである。神事としての側面が強いので、割と抑えめ。華々しい見せ場、観光客受けする場はない。その分、山車そのものが美しく、見所がある。

③祭の効果：人が来る。高岡は伝統工芸が盛んだが、祭は伝統産業の一つの結晶。産業界への影響がある。山車のおかげで伝統技術が継承される。祭をきっかけとして人が来て、リピーターが増えれば、良いと思う。

④大変なことや問題点：お金の問題としては、修理費が多額なものになることが挙げられる。二年間で三千万円以上かかり、修理できる職人さん自体も減っている（本当は地場で作って地場で修理していたはずなのに、京都に修理を頼まなければならなかったこともある）。また、高齢化の問題もある。山町は10町あり、一つの町から代表者を二人ずつ出すことになっている。理想としては各町から長老一人、後継者一人を出すことであるが、上手いかない所もある（理事の平均年齢は70歳、上は82歳、下は50代。28、9年理事を続けている人もいる）。引き継ぎが上手いかなないと、元理事に聞かないと分からないことが多く、伝統が途切れる危機が生じる可能性もある。ある程度の年齢で線を引いて、その後は相談役になる、

といった制度にしてほしいが、市の組織ではないので、難しい。通町は、全部自分たちでやり、大工さんに頼むのは高い所だけ（祭に携われる人数が、通町は100人いるが、他の町は20人、30人）。山町は昔、商人が集まっていたが、今は商業の中心は問屋センターで、別の所。今住んでいるのは退職された方が多い。よって、祭は一回1,000万円かかるが、200万円補助している。

⑤特に気になった、祭や社会の変化：変わっていないことの方が多い気がするが、宵祭ができ、観光用にライトアップされるようになった。また、電線をくぐるため、1mぐらい山車を低くした（重要有形民俗文化財に指定される前）。祭の時、神を見下ろしたら駄目ということで、土蔵の二階の窓を閉める慣習があったが、高岡御車山会館は、2階から見える（吹き抜けて展示）ということで問題になったものの、オープンした。

⑥今後の展望：変えずに守っていききたい。ユネスコ等のきっかけがあっても華やかに！とか日程を変えよう！とかならない風土。いかに安全に後世に伝えていくかが問題。近隣のお祭りとも連携を考える。

⑦その他：岐阜県高山市は、高岡と近い境遇で、高岡に当てはまることは高山でも当てはまると言って良い。重要伝統的建造物群保存地区、重要民俗文化財に指定されたら、あまり変わることができない（例えば、観光を度外視して5月1日に開催しなければならない）。

3）関野神社と高岡御車山祭

①高岡御車山祭はどのような存在か：昔からやってきたことをできるだけ変えないようにしたい。高岡御車山祭は、祭までの準備、バックヤードが面白い。

②祭で一番思い入れのあるモノ・場所・空間はあるか：音に思い入れがある。笛や太鼓、尺八が好きだが、お祭りでも歌や太鼓があり、子供たちが踊る。問題意識は、日本音楽を次の世代にどう伝えるか。楽譜はなく、歌いながら伝承していく日本音楽、口頭伝承こそ面白い。また、高岡の地場の音、地場のメロディーに注目しており、そのようなこだわりから、地産地奏クラブの代表にもなっている。

③祭の効果：神社は、企業でも行政でもないからこそ、発信できるものがある（行政は、基本的に前例がないことはできないし、企業も、基本的に利潤追求である）。祭りは、新しくもあり、古くもある。中央に縛られない独自の文化が、最終的には観光につながる（祭りの効果としては観光が考えられるが、それはあくまで後からついてくるもので、自分たちの文化を自分たちの思うように発展させていきたい）。

④大変なことや問題点：前例のないことは楽しいが、



写真3 関野神社

（2016年9月1日筆者撮影）

それが伝わらなかったりすることが大変。できるだけ自分の発見したことを伝えたい。伝えないと後悔する。そして、自分のやっていることが「高岡らしいね。」と言われると嬉しい。好きなことをやらないと思いは伝わらない。「何でやらなきゃいけないんだ」を一步超えると、自分のモノであるから、楽しいはず。

⑤特に気になった、祭や社会の変化：昔は好きなようにできたが、文化財等に指定されたことで、今は皆でやらないといけなくなった。勝手に自分の思いだけでできない。でも残さないといけないというジレンマがある。何を残さなければならないかというポイントを考えなければならなくなっている。

⑥今後の展望：祭が制度より強い国、バリ島へフィールドワークに行ったことがあるが、とても刺激を受けた。クロスカルチャーで、新しいものができるかと考えている。韓国から昔、新しい文化を受け入れてきた地域が、封建的になっている。今こそ、新しくやっていくべきである。東南アジアで、お鈴（おりん：楕形の青銅製体鳴楽器）は仏具でなく楽器。お鈴チャイムは、高岡の仏具メーカーが製作したもので、この新楽器の開発は、長い伝統を誇る銅器の町高岡だからこそできた。学んだことを、祭に投影し、地場産業と芸能を、平成の御車山（平成25年度～29年度において制作）で結びつけたい。前例のないことをやると、若い人たちも盛り上がる。色々な要素が大事。

4）高岡御車山会館と高岡御車山祭

①高岡御車山祭はどのような存在か：一つのポイントとして、高岡は1615年の一国一城令により、6年だけの城下町であったということがある。そして、3代の前田利常は、2代の前田利長に対する恩から、高岡を経済都市として衰退させないようにした。そして、お金を出して、山町の外から曳き方、囃子方と呼んでくるという、山町の経済力を見せる御車山祭というのは、城下町でな

くなった時、経済的コミュニティの形成や周辺地域との関係を築くという点で役立った。よって、高岡御車山祭というのは、山町の旦那さんたちが守ってきたプライドの高いお祭りで、山町には、「自分たちは所有者。あくまで所有者として振舞え。」といった意識がある。山町の人間か、その周辺かで、思い入れが違う。この祭りは、参加型というより、先祖が作った祭りを見せてあげるという意識がある。

②祭で一番思い入れのあるモノ・場所・空間はあるか：子供の頃、御車山に乗ったが、御車山に乗ると自然と思い入れが出てくる。

③祭の効果、④大変なことや問題点、⑤特に気になった、祭や社会の変化：高岡市は3、40年前だったら、完全に経済都市だった。それは、全国で初めて市制が施行された31都市の一つであったことから分かる。そして、アルミ産業が盛んになり、経済都市から工業都市へと変わっていった。しかし、流通革命の中で問屋が衰退し、経済力と、山町のプライドが一致しなくなってきた。昭和4、50年ぐらいまでは町だけのお金でできていたが、無形文化遺産に指定されてからは、行政が修理費を出してくれるようになり、徐々に行政と保存会の立場の違いも明確化してきた。行政としては、工業都市として潤ってきたが今はそうでもない状況の中、良い観光資源になるのではないかと考えるが、保存会は、自分たちが何百年もやってきた神事を見せ物にすることに抵抗を感じる。岐阜県高山祭りと比べられることが多いが、高山は、昔は経済都市ではなかった。高岡は、経済都市であったが故に、観光としての売り出しが遅くなった。現に、この高岡御車山会館が提案されてから実際にできるまで、行政と山町の考えの相違から、27、8年はかかった。現在、お祭りは山町中心、交通規制や路面電車の調整等は行政中心と、役割分担がなされている。また、現在でも住民には加賀100万石の人間という意識がある。

⑥今後の展望：御車山を見せて、人に喜んでもらってなんぼ。高岡御車山会館で、一年中山車を見せて、利益が出れば、祭りの経費に充てることもできる。行政からお金をもらえば良いという話ではない。収益を考えて良い時代だ。それが、先祖のモノを守ることにつながる。また、町並みと、瑞龍寺と、高岡御車山会館を、前田家の流れをくむ文化、観光資源として売り出したい。

5) 高岡市立博物館と高岡御車山祭

①高岡御車山祭はどのような存在か：学芸員として、高岡御車山祭は、商工都市・高岡の象徴的な祭礼であると思う。また、高岡廃城後、種々の特権を与えるなど再生政策を実施した利常以下加賀藩主らは、その由緒によ

りその後も長らく高岡以外の曳山を禁じている。そのことにより、町民らは日々の商売・生活を保障してくれた加賀藩への思いが増幅されていったと思われる。また、高岡の伝統工芸である金工・漆芸品がふんだんに使用されており、現在とは違い山町以外の多くの町民が関与していた大規模な祭礼であることは、主催者である山町を中心とした高岡商人が大きな「投資」をしたということであり、「歴史」や心情に根ざした「民俗行事」のみならず、大きな「経済効果」も見逃せない。一高岡市民、特に高岡中心部に生まれ育った者（山町以外）としては、「祭」と言えば「高岡御車山祭」であり、とても楽しみなイベントだった。

②祭で一番思い入れのあるモノ・場所・空間はあるか：屋台が出たり、境内にお化け屋敷が出たり、人がたくさん集まって、バブル崩壊までは賑わいがあった。

③祭の効果：近代までは前田利長ゆかりの歴史的・経済的・民俗的・美術工芸的など多方面に対する効果は絶大だったと思われる。

④大変なことや問題点：少子高齢化による運営主体の減少、修復費用の増大、修復技術者減少など維持管理上の諸問題。

⑤特に気になった、祭や社会の変化：戦後、高岡市が運営に絡み、予算が入ると、事実上山町だけの祭礼となってしまう、それ以前の祭礼とは違ったもの（観光イベント化）になってしまった（例：方原町交差点での集合イベント、坂下町は当初山町でない、神輿と七基の御車山を先導していた博労町・鴨島町・白銀町・利屋町・元町・梶原淵町・宮脇町・平米町の母衣武者が排除されてしまった等）。町屋の変化も進み、「祭宿」は各家順番で担当していたが、現在では難しくなり、ほんの数軒（中には一軒）に固定されている。

⑥今後の展望：少子高齢化による祭礼の担い手不足に対応して、近年ではボランティアの参加を呼びかけている。また、平成20年度からは、高岡地域地場産業センター内の「高岡地域文化財等修理協会」で、「文化財修理工房」が整備され、御車山をはじめ祭屋台などの修理施設として、修理技術者らにより組織された。ユネスコ無形遺産への登録を目指している「山・鉾・屋台行事」の審議は、2016年11月のユネスコ政府間委員会で開催される予定であり、大きな期待を寄せている。

III 考察

今回の調査では、伝統的都市祭礼である高岡御車山祭が、廃城の後も三代藩主の高岡への特権を与える政策等により存続し、1970年代以降の経済構造の変化を経ても、



写真4 ユネスコ無形文化遺産への登録予定を受けて約30年ぶりに販売される絵馬

(2016年9月1日筆者撮影)

国や県、市の協力や、祭を支える人々の心意気により、現在も誇りを持って執り行われていることがわかった。また、祭に関わる人々の聞き取り調査では、それぞれ独自の視点や立場から、祭の保存について考えていることがわかった。そして、立場（性別、職業、出身等）により、祭への関わり方は違うものの、大事な遺産を継承していきたいという気持ちは変わらないということが感じられた。

ここで、今回の調査は、高岡市の歴史や高岡御車山、現在祭に関わる人々の考え等を総合的に捉え、伝統と歴史ある地域が祭等の有形・無形文化財を後世に伝える上での課題は何処にあるのか、そして克服方法を考察することを目的としていたが、本論を踏まえて、現時点で考えられる課題の一側面と、克服方法を述べたいと考える。

まず、文化継承の上での課題には、二種類あると考えられる。一つ目は、インタビューの回答にも出てきたように、少子高齢化、修復費用の増大等、維持管理上の問題、つまり社会的側面の中でもどちらかというと物質的な問題である。二つ目は、本当に文化を伝える、祭を保存するとはどういうことかということに関する考え方の相違や、変わっていくことが自然とも考えられるものを

現代、保存しなければならないという、現在の中に過去を持ち込む上での理論的、道徳的問題、矛盾である。今回の聞き取り調査でも、文化を伝える上で、個々人がそれぞれの立場で葛藤を抱えられていることがわかった。そのような葛藤に対して、自分が納得のいくように本物を追求することで矛盾を解消しようとしたり、収益を上げて問題を解決しようとしたり、または矛盾を含んでいるという事実を人々に伝えることで解決しようとしたりと、様々な行動があることが示された。

後者の問題に対して、どのような解決策を選ぶかは、個人の価値観や立場によって違うだろうが、それぞれの取り組みの真意を理解し、様々な要素が機能していくよう調整していくことが、求められると考える。

謝辞 本研究を進めるにあたり、ご協力下さった皆様に感謝いたします。記述や認識に誤りや不行き届きがございましたら、お詫びを申し上げますとともに、ご指摘いただければ幸いです。

文献

- 相澤聡也 2008. 人とモノとの関係性から見る祭礼の形成：北海道江差町における姥神大神宮祭を事例に．北海道大学修士論文．
- 高岡市 2016. 高岡市歴史まちづくり計画 第2章 高岡の歴史的風致の維持及び向上に関する方針．
- 高岡市教育委員会 2000. 『高岡御車山』．
- 柘植元一 2004年6月2日． 伝統が生み出す未来～高岡御車山祭とお鈴合奏～．北日本新聞．
- 藤田佳久・田林明編 2007. 『日本の地誌7 中部圏』朝倉書店．
- ブライアン・グレアム、キャサリン・ナッシュ編、米家泰作・山村亜希・上杉和央訳 2005. 『モダニティの歴史地理』古今書院．
- 松平誠 1990. 『都市祝祭の社会学』有斐閣．
- 渡辺杏里 2011. 周辺部商店街にみる古きよき仙台七夕祭り．お茶の水女子大学文教育学部人文科学科地理学コース編『仙台の地域調査』．

鋳物産業から生まれた「弥栄節」の存在

木村 由梨

I はじめに

日本民謡の多くは元唄が作業歌（労働歌）である（鶴見 1999）。作業歌というのは、たたら吹きや築堤などの単純で辛い共同作業を行う上で、複数人がタイミングを合わせる必要性や、気力を維持する必要性から口ずさまれて生まれた歌のことである。有名なものでは、徳良ダム建設時の「土搗歌」を元歌とする山形県の花笠音頭がこれに当たる。（房前・竹林 1995）。

花笠音頭のように、作業歌でありながら、別の活動領域に転用されて二重、三重の意味を持つようになってくる歌がある（鶴見 1999）。富山県高岡市金屋町に伝わる「やがえふ」は鋳物作りの工程で歌われ始め、現在は踊りを加えて「弥栄節（やがえふし）」となり、町のお祭りで踊られるようになっていく。そこで本稿では、形を変えて伝わってきた弥栄節が、現在の金屋町にとってどのような存在なのかについて考察する。

II 調査方法と調査地域

1. 調査方法

2016年8月29日から9月1日までの期間で各訪問先に聞き取り調査を行い、図書館での文献調査も実施した。訪問先は以下の通りである。

- ・ 高岡市役所文化財課
- ・ 高岡市鋳物資料館
- ・ 高岡伝統産業青年会
- ・ 金屋町自治会
- ・ 御印祭実行委員会

2. 調査地域

調査は富山県高岡市、その中でも特に金屋町で行った。

高岡市の西部は二上山などの山地、北東は富山湾、東部は庄川・小矢部川によって形成された扇状地が広がる。交通網としては東海北陸自動車道や能越自動車道、平成27年には北陸新幹線が開通した。世帯数67,772戸、人口174,477人で減少傾向にある（平成28年9月末現在）。伝統的な産業としては高岡銅器や高岡漆器があり、近代にはアルミ、

化学・薬品、紙・パルプといった産業が発展した、ものづくりの街である¹⁾。

金屋町は中でも高岡銅器の生産を担ってきた。町はJR高岡駅や駅前商店街から見て千保川の対岸に位置するが、これは鋳物を製造する際に火を用いることから、火事の際に中心地への延焼を防ぐためにここに開町されたためである（図1）。世帯数180戸、人口499人であり、年々減少している（平成28年9月末現在）。加賀藩二代目藩主前田利長が鋳物産業を保護してから、2011年に開町400年を迎えた。毎年6月20日には前田利長を偲ぶ御印祭があり、9月下旬には金屋町楽市inさまのことという、伝統文化の体験や工芸品の販売を行うイベントを行なっている。2012年に金屋本町の一部とともに国の重要伝統的建造物群保存地区に指定され、さまのことと呼ばれる千本格子の家並みが印象的な町である（写真1）。

3. 金屋町鋳物産業と弥栄節の歴史

高岡市は鋳物産業が盛んな地域であり、日本の銅器生産額の90%以上を占めている²⁾。高岡銅器の歴史は、1611年に加賀藩主前田利長が、「河内鋳物師」の流れをくむ砺波郡西部金屋村の鋳物師7名を高岡に招いたことから始まる。利長は鋳物師に拝領地として、現在の金屋町である千保川左岸の土地を与え、さらに数々の特権を与えることで保護し、鋳物産業の発展を支えた。

そのような中で、作業歌「やがえふ」は生まれた。火の勢いをよくするために空気を送る「たたら」を踏む調子を整え、疲れを紛らわすのに口ずさまれたのが始まりである。大正初年頃まで長く唄い継がれてきたが、電動送風機の登場により一時唄われなくなった。しかし昭和の初めに市内の郷土史家や有志が集まり、「やがえふ」を民謡調に整え、鋳物の作業を表現した踊りを加え、鋳物音頭「弥栄節」が生まれた。現在では毎年6月に金屋町で行われる御印祭で、1000余名が町流しで踊るようになっていく。以下に弥栄節の歌詞を載せておく。



写真1 千本格子の家並み

(平成28年8月28日撮影)

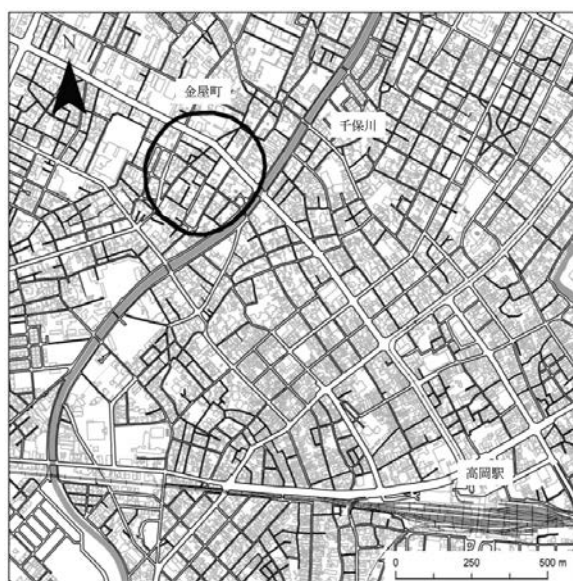


図1 金屋町の概域

(金屋町のネットコミュニティ「ねっとこ金屋」を参考に筆者作成)

弥栄節²⁾

河内丹南鑄物の起こり ヤガエフ

今ぢや高岡金屋町 エー

エンヤッシャ ヤッシャイ

今ぢや高岡金屋町 エー

エンヤッシャ ヤッシャイ

越中高岡鑄物の名所 ヤガエフ

火鉢鍋釜手取釜 エー

火鉢鍋釜手取釜 エー

たたら踏み踏みやがえふ唄うや ヤガエフ

鉄も湯となる釜となる エー

鉄も湯となる釜となる エー

火の粉吹き出すあの火のもとにや ヤガエフ

いとし主さんたら踏み エー

いとし主さんたら踏み エー

めでためでたの鍋宮様よ ヤガエフ

鑄物栄えて世も栄える エー

鑄物栄えて世も栄える エー

一方その後の高岡銅器は、1889年のパリ万博に出品され、高岡市出身の美術商林忠正の活躍によりジャポニズムが沸き起こる中で、世界的に知られていった。第二次世界大戦の金属不足により打撃を受けたが、大量生産体制の確立で巻き返し、現在では海外への広がりも見せている。

Ⅲ 調査内容

1. 鑄物産業の現状

1) 現在の課題

国内シェア90%を誇る高岡銅器だが、現在抱えている課題は、どの伝統産業でも近年直面しているものと同じであった。それは大きく分けて2つあり、後継者不足と売り上げの減少である。

後継者不足は、鑄物産業が「きつい、汚い、危険」という3K産業であると敬遠され、若者が継承したからしないことから起きている。しかし、ここ最近では職人になる若者が少しずつ増えてきているという。高岡伝統産業青年会(伝産)によると、若者が地元に残ることに対して肯定感を持つようになってきたからではないかということだった。そのような若者が地元で職を探す中で、400年の歴史を持つ鑄物産業を継ぐという道も考えられるようになってきたのだろう。それでも依然として若手職人の不足は深刻な問題である事には変わりないようだった。

そして売り上げの減少であるが、これは顧客ニーズの変化や、長年の不景気による個人消費の低迷が影響していると考えられる。

2) 課題に対する取り組み

このような課題がある中で、それぞれの課題に対応していると思われる取り組みがあった。

まず後継者不足の問題についてだが、県と市それぞれが職人の仕事に興味を持たせる取り組みを講じており、これがこの問題への対応策であると捉えることができる。富山県全体としては、公益社団法人富山県新世紀産業機構が

「とやま新伝統工芸人材確保育成事業」のインターンシップ及び職場体験実習を実施しており、当該団体だけでなく県のホームページ上でも情報が発信されている³⁾。これは全国の職人・デザイナーを目指す社会人や大学生及び高校生を対象とする、伝統工芸体験事業である。平成28年度の対象事業所は高岡銅器、高岡漆器、越中和紙、井波彫刻の全24か所、そのうち高岡銅器の事業所は10か所である。希望者はそれらから希望先を選択して申し込み、連続する3日程度その仕事を体験する。伝産によると、これを利用して高岡銅器の体験に全国規模で人が来ているという。職人を目指す全国の人々にこうして体験する機会を提供することにより、高岡銅器に興味を持つ人々の増加につながることで、後継者不足対策として有効な取り組みである。

また、高岡市としての取り組みも行われている。平成18年4月から、市内の小・中・特別支援学校全40校で「ものづくり・デザイン科」という、高岡市の伝統工芸や産業を見たり聞いたり体験したりする必修授業を行っている³⁾。これは、高岡市が国の構造改革特別区域計画「高岡市ものづくり・デザイン人材育成特区」の認定を受けて始めたものであり、地域の伝統工芸や産業に着目した全国唯一の取り組みである。鑄造、青貝塗り、彫刻といった伝統工芸を体験する中で、地域産業への理解やものづくりへの関心を高めることができるので、将来を担う子どもたちが伝統工芸に興味を持つきっかけとなる取り組みだと言える。

また、これら以外にも高岡市内に立地する富山大学芸術文化学部の学生が工房でアルバイトをし、卒業後にそのまま職人として就職することもあるという。また、高岡市外の美大生がイベントに参加したことをきっかけに高岡銅器に興味を持ち、卒業後に移住して職人になることもあるそうだ。現在は、このように外から入ってくる若手職人によって後継者不足が補われているという。

次に売り上げの減少についてだが、これに対しては伝産が行っている2つのイベントが有効な役割を果たしていると言える。1つは「くらしに生きる伝統のかほり展」、もう1つは「高岡クラフツリーズモ」である。

前者は現在、鑄物体験を含めた展示会という形をとっているが、元は商品を見せるギフトショーだった。しかし商品よりも、鑄物の技術やそれに携わっている人間をアピールした方が良いのではという考え方が生まれ、一般向けの鑄物ワークショップを開催することになった。

後者は伝産の仕事をめぐる工場見学ツアーである。これは伝産メンバーがツアーコンダクターとなり、銅器・漆器職人の日常や伝統の技術を目の当たりにすることができるイベントである。

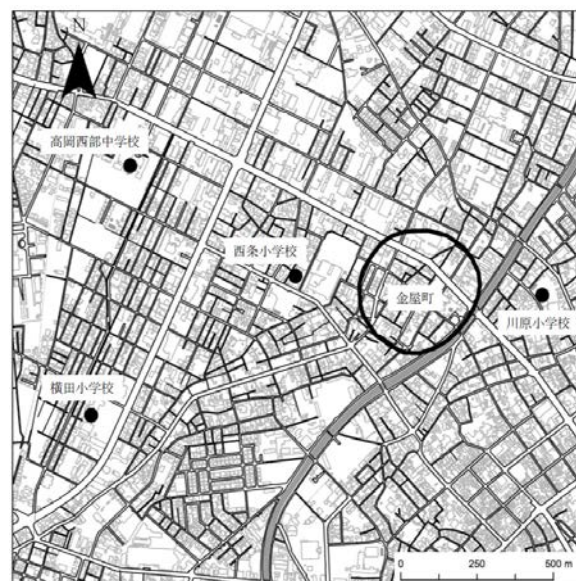


図2 町流し参加小中学校

前述したようにこれらのイベントに参加した美大生が就職しにくる場合もあるが、それ以外にも、高岡銅器の認知度を高める効果もある。伝産によると、イベントに参加した人が東京などで就職した後、仕事として高岡銅器を注文したこともあったという。つまり、イベントを通して高岡銅器や職人の人間性をアピールすることでその先のつながりが生まれ、将来の売り上げにつなげることができているのである。

2. 弥栄節の現状

1) 御印祭での町流し

御印祭は、鑄物産業に数々の恩恵を与えた前田利長の遺徳を偲び感謝する祭であり、その命日が旧暦の5月20日であることから、毎年6月20日に行われている。そして前夜祭として6月19日には弥栄節町流しが行われる。踊り手は年々増加しており、現在では金屋町住民だけでなく付近の小中学校、高岡市内の民謡団体も含め、総勢1000名ほどが参加する。

町流しに参加している市立小中学校(横田小学校、西条小学校、川原小学校、高岡西部中学校)では、毎年運動会の最後に弥栄節を踊ることになっている(図2)。児童生徒に踊りを教えるのは先生だが、先生に教えるのは金屋町住民有志からなる「ヤッホーの会」のメンバーである。そもそも金屋町の住民は全員が弥栄節保存会に入っているが、その中でも日頃から活動したいメンバーがヤッホーの会に所属している。そしてヤッホーの会が小中学校の先生に踊りを教える際、その日にちを公示して、市内の民謡団体や企業など、弥栄節を覚えたい一般の人々も教われるよ

うにした。

このようにして弥栄節を踊れる人々が増え、以前は町内の人々のみが参加していた御印祭の町流しは、年々踊り手が増えていった。しかし御印祭では、弥栄節の出番は町流しだけではない。奉納踊りという、金屋町児童の男女数名が先人たちに感謝し、町の守り神と称えられる四柱の神々に踊りを奉納する場面もある。彼らは免許皆伝という形で踊りに用いる竹の棒をもらっており、キメの型がしっかりとした弥栄節を披露する。

また、町流しでは最後に職人が踊ることになっている。最後から二番目に高岡伝統産業青年会、そして最後に金屋町青年会という順である。今や金屋町の中で職人は減ってきているが、御印祭では町外の職人も含めて弥栄節を踊り、金屋町が鋳物の町であることを示している。

このように規模が拡大してきた御印祭であるが、開催するにあたって課題も出てきている。大きく分けて費用の問題と人の問題がある。費用は現在、金屋町自治会の負担と行政からの補助、企業の協賛からまかなっている。しかしこのように規模が大きくなっていく中で、今後これは大きな問題になっていく可能性があるという。

人の問題とは、金屋町の人口が減少していることである。それによって御印祭に関わる人材も少なくなり、運営が難しくなっていく。また、金屋町住民の多くは御印祭への参加が当然のものと思っているが、中には無関心な人もいる。だが金屋町自治会によると、現在のように御印祭や弥栄節への注目度が高まってくると、一人一人の意識や責任感も上がってくるという。町流し参加者が増加する裏で、人口減少していく金屋町。弥栄節は過渡期を迎えていると言える。

2) 立場による捉え方

このような中で、町民や職人は御印祭や弥栄節をどのように捉えているのかを聞いてみた。

まず町民からは、御印祭の準備が最大のコミュニケーションツールになっているという声があった。準備の話し合いをする場が、町民が顔を合わせる重要な機会になっているのだという。

また、金屋町自治会としては、無関心な人もいる中でも伝統を守り、普及していく役目を負っている。関わる人が減少してきたので、外部の協力を得る必要があるのではという考え方もあるようだ。しかしこれほどの規模の祭りを自治会が運営しているのは珍しく、それは平生からの付き合いによる町内の結びつきが強いからだと言っていた。金屋町に住んでいることへの誇りや伝統を守る気負いが感じられた。

さらに御印祭実行委員会としては、御印祭は金屋町の顔であり、伝統はこれからも守っていききたいということであった。規模に関しては様々な意見があるが、当面は現状を維持していくという。

そして伝産は、実際に鋳物に携わる職人が踊る事に意味があると言っていた。金屋町が鋳物の町であり、御印祭は鋳物を保護した利長を偲ぶ祭であるから、鋳物の踊りである弥栄節は、たとえ金屋町住民でなくても職人も踊るべきだということだった。この時聞き取りをしていたのは伝産の中でも年上の3人だったのだが、この話をした際、「もっと皆に伝えていかないと」と、お互いに確認し合っている姿が見られた。

IV 考察

以上の調査から、鋳物産業も弥栄節も大きな局面を迎えていることがわかった。そしてそれぞれの現状や関係する人々の考えを合わせてみると、鋳物産業が新しい時代に直面している今だからこそ、弥栄節の存在が金屋町というコミュニティを支え、その歴史と誇りを後世に繋いでいく鍵になっているのではないかと考えられる。

鋳物産業は、後継者不足や売り上げの減少という課題に直面しながらも、全国からのインターンを受け入れたり、市の政策で小中学生が鋳物を作る授業があったり、職人がイベントを開催したりすることで、積極的に対策を講じている。伝統産業を維持することが難しい中でも、多くの人々に知ってもらえるように活動し続けているのである。そして、地元の若者やインターンやアルバイトをきっかけに移住してきた若者が、数は少ないが産業の担い手に加わっていくことで、この先も高岡鋳物の歴史を繋いでいく。

このような鋳物産業の現状を知るにつれ、私は「鋳物の町」としての金屋町のイメージが次第に多様化していくのではないかと考えた。高岡銅器は高岡市の中でも金屋町が担ってきた産業である。しかし現在の鋳物産業は、グローバル進出をしたり、県外の人々が職人になり来たり、職人が外部に出て行ってイベントを催したり、金屋町の枠の中には収まらない。このような中では、町のまとまりが薄れ、今までに積み上げてきた「金屋町らしさ」がぶれていく可能性もある。

しかし実際は、金屋町は自治会を中心に人の繋がりをしっかりと保ち、これまでの歴史をしっかりと引き継いで、誇りを持って存在しているように見られた。その要因としては、弥栄節の存在が大きいと考えられる。自治会の、御印祭は町の伝統として守っていかなければならないという声や、大規模な祭りを続けることができているのは平生

からの付き合いがあるからこそだという声,さらには職人の,職人だからこそ町流しに参加するべきだという声からそれがわかる.人口減少が進み,鋳物産業のあり方も変化していく中で,それでもこれまで積み重ねてきたものを引き継いでいこうとしているのである.弥栄節があることによって,前田利長の時代から鋳物の町であったことが,今も金屋町住民や職人の意識に残ることができ,それを引き継ぐ一員として,繋がりを保つことができているのである.

V おわりに

本研究では,弥栄節の存在が金屋町の歴史と伝統を継承し,金屋町としてまとまるための鍵となっていることが明らかになった.しかしこれは金屋町の大枠を述べただけに過ぎない.今回は弥栄節に焦点を絞ったために,金屋町自治会が御印祭以外に手掛けていることや,彫金や木型など様々に分業されて成り立っている鋳物産業の詳細,金屋町住民一人一人の考えなどに踏み込むことができなかった.

一方で,作業歌が転じて町のアイデンティティの基礎となっているとわかったことは意義深い.今後は他地域の事例も参考にして比較していくことを課題としたい.

謝辞 調査にご協力いただいた,高岡市文化財課,高岡市鋳物資料館,高岡伝統産業青年会,金屋町自治会,御印祭実行委員会,及び金屋町の皆様に深く感謝申し上げます.お忙しい中貴重なご意見,お話を誠にありがとうございました.

注

- 1) 高岡市ホームページ.
<http://www.city.takaoka.toyama.jp> (最終閲覧日2016年10月20日)
- 2) 2016年御印祭パンフレットによる.
- 3) 富山県ホームページ.
http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1300/kj00016688.html
1 (最終閲覧日2016年10月20日)

文献

- 金屋町開町400年記念誌発行委員会 2011. 『過去・現在そして未来に継ぐ架け橋に』.
- 鶴見俊輔 1999. 『限界芸術論』 ちくま学芸文庫.
- 房前和朋・竹林征三 1995. 労働歌・どんつき節の変遷から見る築堤工法の土木史. 土木史研究 15: 491-498.

芸術文化によるまちづくり —高岡市を事例に—

木村 翠

I はじめに

近年、芸術文化による地域おこしが日本全国様々な地域で行われている。代表的なものとしては、瀬戸内海の島々を舞台とした「瀬戸内国際芸術祭」や、新潟県十日町・津南町の「大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ」が挙げられる。全国的に広がっていく芸術文化を用いた地域振興は、どのように地域の特色を活かし、地域にどのような効果をもたらしているのだろうか。

このような動きの背景にあるのが、1990年代半ば頃から欧州で始まった、産業空洞化と地域の荒廃を解決するための新しい都市政策の概念である「創造都市」である。創造都市とは、「市民の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備え、グローバルな環境問題や、あるいはローカルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決を行えるような『創造の場』に富んだ都市」であり、今世紀になって急速にアジアや南北アメリカにまで広がっていった（伊藤 2012）。

ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）も、2004年より「創造都市ネットワーク」事業を開始し、7つの分野で創造都市を認定、相互の交流を推し進めている。さらに、文化庁では、文化芸術の持つ創造性を地域振興、観光・産業振興等に領域横断的に活用し、地域課題の解決に取り組む地方自治体を「文化芸術創造都市」と位置付け、2007年度より創造都市への取組を支援している。このように、文化芸術を用いた地域振興活動はヨーロッパから始まって、世界的に展開されてきており、先述したように日本でも多くの都市でこの活動が行われている。

今回の調査先である高岡市も、平成27年（2015年）3月に、文化創造都市高岡推進ビジョンが策定され、芸術文化を生かした地域振興を行う地域の一つになっていくと考えられる。本報告書は、芸術文化によるまちづくりの現状と課題を、高岡市を事例に明らかにすることを目的とする。

II 調査地域・方法

本調査では、高岡市中心市街地（山町筋・金屋町・御

旅屋町）及び、中心地から万葉線（第3セクターのローカル線）で30分強の場所に位置する吉久地区を調査対象とした。

現在の高岡市の中心市街地の起源となったのは、慶長14（1609）年の加賀藩2代藩主、前田利長による高岡城下町の開町である。火災の被害を防ぐため千保川の対岸に設置した金屋町には、鋳物師に特権を与えて住まわせた。これが高岡鋳物の発祥であり、現在にまでその工芸技術は受け継がれている。

利長の死後、高岡城下町は幕府の一国一城令に従い廃城となった。旧城下町の衰退を防ぐため、3代藩主の利常は商工業都市への転換を行い、高岡の経済的な発展を支えた。

また、加賀藩農政の確立で、陸運・水運を利用した流通ルートが整備され、市内の主要な河川や街道沿いに藩の年貢米を納める御収納蔵を設置して周辺集落の収穫米を集め、長舟によって主要取引場所へ運搬した。この農政によって御蔵が建てられたのが吉久地区である。また、主要官道が通る中心街の「山町（やまちょう）」は、米・綿・麻・塩などが取引される物流の拠点であった。現在は山町筋と呼ばれるこの地区は、明治維新後、問屋として発達し、豪商が数多く存在する町となった。

次に調査地域の町並みについて言及する。金屋町は古いものでは明治期に建てられた“千本格子”の家並みが残されていることから、山町筋は、明治33（1900）年の大火後、防火建築として建てられた重厚な土蔵造りの町並みが、それぞれ重要伝統建造物群保存地区に指定されている。また、吉久地区は、重伝建の指定には至っていないものの、“さまのこ”と呼ばれる非常に細かい木製の格子が特徴の古い町並みが残っている。¹⁾

このように、調査対象地域は、江戸時代から続く歴史と文化を蓄積しており、町並みにも特徴を持っている。そして、現在、これらの調査対象地域は、後述する文化創造都市高岡推進ビジョンで触れられている地域であり、かつ高岡固有の文化資源を活用したイベントを企画・実施しているため、調査地域として選定した。

調査方法は、主に現地フィールドワークと聞き取り調査を行った。また、高岡クラフト系3イベントに関して

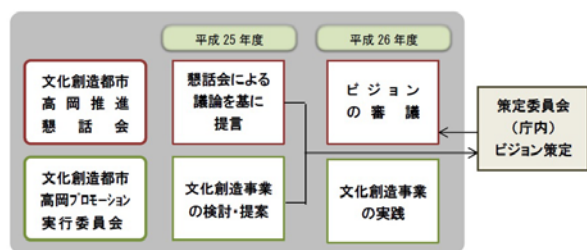


図1 ビジョン策定までの流れ

(出典 「文化創造都市高岡推進ビジョン」 p.1)

は、実際に参加して観察を行った。

Ⅲ 調査内容

1. 文化創造都市高岡推進事業について

1) 事業の概要

文化創造都市高岡推進ビジョンは、高岡市が文化創造都市として目指すべきイメージを明らかにするとともにその実現に向けて、文化、芸術、産業、観光等に関する施策を一体的に推進するため、おおむね10年間の基本的な指針を提示することを目的として策定するもの（「文化創造都市高岡推進ビジョン」p.1）である。本事業の企画・提案にむけて、平成25（2013）年4月に文化創造都市高岡推進懇話会を設置し、平成26（2014）年3月に本事業の方向性に関する提言を取りまとめた。また、平成25年7月より、具体的な事業企画提案の組織として文化創造都市高岡プロモーション実行委員会が設置され、文化創造の実践的活動として様々な活動を企画し実行してきた（図1）。

このビジョンを推進していく背景には、人口減少と高齢化により、消費行動の変化や労働力不足、社会保障負担の増加が予想されることから、人口変化を前提とした取り組みが求められていることや、バブル崩壊以降市を代表する産業である工業が衰退の傾向をみせていること、モータリゼーションの進展と消費者意識の変化により郊外における大規模な商業立地と住宅立地が中心市街地の賑わいを喪失させ空洞化を急激に進行させていることといった多くの地方都市が抱える問題がある。このような問題を解決するために、「歴史に根ざした多種多様な文化を有し、それらを継承し発展させてきた土壌」のある高岡市では、欧州で成功してきた「創造都市」の考え方を取り入れることで、都市の発展につながる好循環を生み出すという戦略を採用したのである。加えて、現高岡市長である高橋正樹氏が、就任以前に「地域創造」（地方団体の要請に応じて文化・芸術活動を担う人材の育成や、公立文化施設の活性化を支援するため、1994年に設立された一般財団法人）に属しており、文化振興による地域づ



図2 高岡の文化力及び目指す都市像と課題・戦略①

(出典 「文化創造都市高岡推進ビジョン」 p.12)

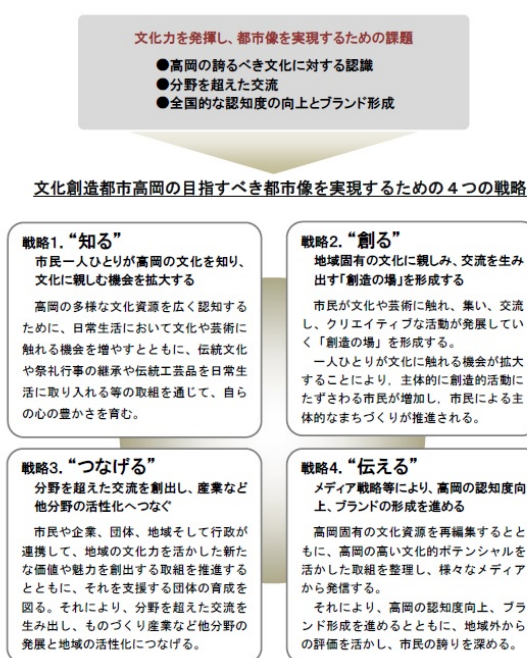


図3 高岡の文化力及び目指す都市像と課題・戦略②

(出典 「文化創造都市高岡推進ビジョン」 p.13)

くりへの造詣が深かったということも、このような文化行政が活発となった一つの要因であると考えられる。

高岡市の課題を解決していくための政策として推進されている本ビジョンでは、3つの文化力「コト」、「モノ」、「ヒト」を再発見することにより高岡の都市像を表し、

その文化力を発揮するための課題と戦略についても提言されている（図2，3）。

課題で重視されているのは，“市民が高岡の文化に対する認識を深めて自立的に活動すること”であり，その上で“分野を超えた交流”と“全国的なブランド力の育成”を考えている．そして，これを実現するための戦略として“知る”，“創る”，“つなげる”，“伝える”の4つが掲げられている．

次節からは，この推進ビジョンを背景に，高岡市で具体的にどのような活動・イベントが行われているのかについて焦点を当てていく．

2) 高岡市の歴史・芸術文化を活用したイベント

高岡市では，“伝統工芸・ものづくりのまち”としてクラフトをテーマにしたイベントや，独自の町並みを活かしたイベントが，ビジョン策定以前から取り組まれてきた．この節では，高岡市のそれらのイベント5つについて述べる．

① 工芸都市高岡クラフトコンペティション

工芸都市高岡クラフトコンペティションは，高岡商工会議所が中心となって1986年から開催している，30年続く実績のある全国公募の工芸コンペである．高岡は，新しい産業工芸の動きを誘発する情報発信基地となるべく，全国から作品を募集している．受賞作品は，高岡の中心商店街にある大和高岡店の4階催事場で展示される．

② 高岡クラフト市場街

高岡クラフト市場街は，クラフトコンペと開催時期を同じくした，中心市街地で地域に根ざした「クラフト」，「町並み」，「食」，「体験」を扱う総合的なイベントである．開催に至った経緯は，20回を超えてやや型にはまり始めたクラフトコンペおよびクラフト展の在り方について，第26回以降の在り方の検討を開始した結果，全国から集まる出品者にも，そして開催地である地元高岡にも魅力のある催しにするため，クラフトに関連するイベントを10月に集中させて，2012年に第1回高岡クラフト市場街が行われたのが始まりである．以降，多角的な切り口でクラフトを活用したイベントを増やしながら規模を拡大させた．第4回以降は多様化したイベントと幅が広がる来場者に対して，どのようにコミュニケーションをとっていくかという課題から，イベントのカテゴリーを「観たい・知りたい」，「購入したい」，「体験してみたい」，「食べたい」の4つに分類し，来場者にも運営側にも，市場街のイベント枠組みを明確にする工夫がなされた．このように，第4回以降は，量から質を目指したイベント運営に切り替えられた．しかし，質を目指す中でも，新たな試みを取り入れる姿勢は続き，高岡市美術館のイベント参加



写真1 工芸都市高岡クラフトコンペ会場外観
(大和4階催事場にて筆者撮影)



写真2 高岡クラフト市場街の様子
(土蔵造りの町並みのもとで手作り商品や食料品が売られる「軒下マルシェ」の様子.山町筋にて筆者撮影)

や，市民企画との連動，富山大学芸術文化学部との連動が具体化した．この動きは，より地元との結びつきが強くなっていることを表している．

実行委員長は，本イベントの目指すものはモノとヒトが集まることによる「恒常的な街の活性化」であり，まちのブランド力を高めることだ，と述べている．また，イベントの継続において，運営側の構成員の大半がボランティア集団となっており，規模拡大を続ける場合，組織構成を見直す必要がでてくることが，イベントに関わるアクターにどのようなリターンがあるかということを提示していく必要があると考えている．来場者に対するアプローチの課題は，高岡のブランドイメージを上げていくこととリピーターを増やすことであり，そのための広報活動をFacebookやホームページ，地方新聞，市場街オリジナルのタブロイド紙など，幅広い年代にターゲットを当てるために様々な媒体で行っている．

③ 金屋町楽市

金屋町楽市は，金屋町を会場にした2008年に始まった産官学が主体となったイベントである．高岡の文化工芸を，生活と街の中に回帰させ，その中で育まれるように，作り手たちと共に，鋳物産業発祥の地である金屋町で前田藩の源流となる安土桃山時代の記憶をとどめた



写真3 金屋町楽市の様子

(重伝建の町並みが続く路地にクラフト売り場が広がり、人がたくさん行き交っている.2016/09/24筆者撮影)

「楽市」を開催することを開催趣旨とし、シンポジウムと金屋町の町並みを活用したゾーンミュージアムが展開された.本イベントに関わったのは、北陸三県を中心として職人、企業関係、芸術文化学部の教員と学生、招待作家らであり、100余の個人・団体が参加し、作品数も1000点を超える本格的なゾーンミュージアムが実現した.2009年には、2000年から金屋町自治会が主体で行われていた「さまのこアートin金屋町」を同時開催する形で一本化し、現在まで続いている.

④ 吉久地区のまちづくり活動

吉久地区は、加賀藩直営の御蔵が建てられ、高岡と並ぶ重要な米の集散地として栄えた.その流れを汲み、明治維新後は、有力村民の中から米商が現れた.現在、旧放生津往来には、江戸時代末から昭和初期にかけて建てられた“さまのこ”と呼ばれる間隔の狭い格子が特徴の家屋が並んでおり、米商により栄えた当時の面影を今に伝えている.

このような歴史を持つ吉久地区では、町並みを活かした取組みが進められてきた.一つは、重要伝統建造物群保存地区指定に向けた運動であり、もう一つは「さまのこアートinよっさ」である.

前者に関しては、吉久地区は、平成5(1993)年に重伝建指定に向けた調査が行われ、指定の資格が十分にある町並みを持っていることが分かった.しかし、認定に必要な9割以上ともいわれる地域住民の合意が得られなかったために、認定は見送られてしまったという経緯がある.現在は、吉久まちづくり推進協議会が、再び重伝建の指定を目指す活動を行っており、同制度を活用したまちづくりを模索している.

後者の「さまのこアートinよっさ」は1999年から続く、地区の歴史や町並みを活かしたイベントである.高い評価を受けている町並みを広く知ってもらうため、獅子舞の出る秋祭りに合わせて、さまのこや室内に書画・



写真4 旧放生津往来の吉久地区景観

(細かい格子「さまのこ」が特徴の木造家屋が並ぶ.建て直しや空き家も増えてきている.2016/08/29筆者撮影)

造形作品・山野草等を展示したり、スタンプラリーやランプ作成などの体験を行ったり、ライブを行ったりと多様な取組みがあり、伝統ある祭りや町並みを活かし後世に伝える活動が一体となって行われている.祭りの運営の中心となっているのは、吉久地区でまちづくり運動を牽引する吉久まちづくり推進協議会である.また、このイベントは、他のイベントと同様に芸術文化学部の学生が関与しているほか、地元の児童クラブもアート制作に関わっている.

⑤ 芸文ギャラリー

芸文ギャラリーは、中心商店街が位置する御旅屋町の一角にある、一般社団法人のギャラリーである.展示を行うのは、地元の作家や全国の作家、そして、芸術文化学部の学生や教員たちである.また、店長を中心に企画展も行われる.年間約20回の展示が行われているとのことである.企画展の内容は、作家の個展であったり、地元の子どものワークショップであったりと、多岐にわたる.親しみを持ちやすいテーマのものや地域の面白いものを取り上げた展示を多く取り入れていることも特色である.

芸文ギャラリーの特徴として挙げられるのは、産官学の連携である.“産”の分野では、高岡の伝統産業や工業の分野を関連づけた活動やその展示の開催、“官”は、高岡市からの助成金などの補助、そして特に“学”は、高岡市に富山大の芸術文化学部があることから、その学生が自分たちの作品を発表し、売買する場として、学生たちに貴重な機会を提供している.さらに、芸文ギャラリーは、芸文の学生のボランティアやアルバイトで運営されており、学生とギャラリーの距離が近.以上、①～⑤に渡って、高岡市で行われている歴史・芸術文化を活用した取組みの概要を取り上げた.これらの活動を年表(表1)にまとめると、クラフトを軸にした中心市街地の活動が多く行われている土壌があった上で市のビジョン策定が行われたことがわかる.この流れから、このような様々な

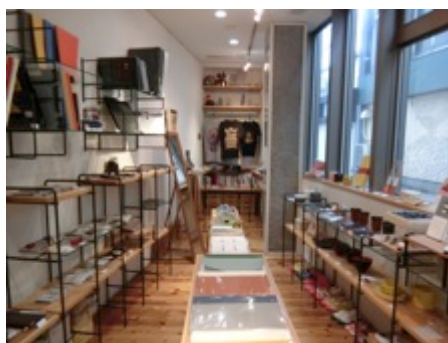


写真6 芸文ギャラリーに併設されたショップ

(手頃な価格でハイセンスなグッズが並ぶ併設ショップ。2016/08/29筆者撮影)

表1 市内の文化活動年表

年代	文化創造都市高岡推進ビジョン	文化活動
1986?1999		高岡クラフトコンペティション(1986?)
2000?2007		さまのこアートin金屋町(2000?2008) 3大学の統合により富山大学芸術文化学部となる(2005)
2008		芸文ギャラリーオープン 金屋町楽市(2008?) ※第2回よりさまのこアートin金屋町を吸収
2009		
2010		
2011		
2012		高岡クラフト市場街(2012?)
2013	懇話会/プロモーション実行委員会	さまのこアートinよっさ(2013?)
2014	ビジョン策定	
2015	ビジョン実行	
2016		クラフト系3イベントの同時開催

(インタビュー調査及び調査資料より筆者作成)

小さな取組みを掬い上げ、サポートする存在として高岡市のビジョンがあると考えられる。い。店長は、併設するショップで販売するグッズの仕入れも行う。ハイセンスで値段も比較的手頃なグッズを扱ったショップは、ギャラリーに立ち寄る契機創出につながっている。

次項では、平成28(2016)年度から同時期開催が決まった①～③について、イベントに実際に参加した経験を踏まえて述べる。

3) 高岡クラフト系3イベントの同時開催

2016年9月22日～26日の5日間に渡って、工芸都市高岡クラフトコンペティション、高岡クラフト市場街、金屋町楽市が初の同時開催となった。これは、それぞれのイベントが別々の時期で行われることによる観光客の分散を防ぐことや、町並みと工芸を軸にしたコンセプトがより明確なイベントにすることを目指すことが大きな理由である。

イベントの規模が拡大したことにより、各イベント間の連携で苦労したところもあったそうだが、各エリアをめぐる無料の巡回バスや、3イベント専用のタブロイド紙の発行、イベントの総合的なデザインの統一など、随所に工夫がなされているのを感じた。高岡の中心市街地の主要なエリア(御旅屋町、山町筋、金屋町)は、駅から

歩いてまわれる距離であることもあり、一日でどのエリアの展示もしっかり見て回ることができた。

筆者が24日土曜日に訪問して気付いたことを3イベントそれぞれについて記す。まず、クラフトコンペは来場者の年齢層が高めだった。大和の4階で展示は静かな中、来場者が作品に触れたり、感想を述べ合ったりしながら、それぞれのペースで多様な工芸品に触れる時間・空間になっていた。また、6階には市が進めている「ものづくり・デザイン科」という市内の全小・中・特別支援学校で行われる独自の必修教科の成果を展示しているスペースがあった。螺鈿細工などの伝統工芸に触れる機会をこのように持つことができるのは、自分の住むまちへの理解を深め、工芸を身近に感じることができるようになる良い取組みであると感じた。

クラフトコンペは、会場が主に大和であるということもあり、外部の御旅屋町の商店街には昼間は通常時と比べて大きな変化はなかった。しかし、たかまちバル(商店街で料理とお酒を屋台で気軽に楽しめる企画)が始まる夕方以降は、多くの人で賑わう場所が生まれていた。次に、高岡クラフト市場街について述べる。クラフト市場街は、御旅屋町から山町筋のあたりが主たるエリアであると考えられるが、明確なエリアが規定されておらず、様々な企画が展開されているという印象を受けた。町並みを楽しみながら、ポツリポツリと現れるイベントを練り歩くといった体験をすることができた。そして、特に大きな変化を感じたのが金屋町楽市の賑わいである。楽市が開催された土日は、老若男女問わず多くの人々が訪れており、その喧噪がむしろ活気を感じさせて心地よかった。また、芸文の学生がたくさんスタッフや出演者として関わっていたことで、まちにたくさんの若者の力が溢れていた。また、金屋町の石畳通りに置かれたどこからどれだけ来場者があったのかをカウントするボードを集計すると、地元高岡市を中心に700名を超える人が楽市に訪れていた(図4)。

以上が3イベントを同時に経験して筆者が感じたことだが、同時開催のメリットとして挙げられるのは、それまで別時期に開催していたために点的だったイベントが、“中心市街地一帯”が会場となり、面的な広がりを持つようになったことが最も大きいのではないだろうか。また、趣ある町並みや伝統工芸・伝統文化といった古いものと、学生たちによる着物ファッションショーや軒下を活用したマルシェなど、新しい取組みが交差していたのも興味深い点である。“工芸、クラフト”が軸としてある中に、現地の人々の営みが自然と共存しているように感じた。

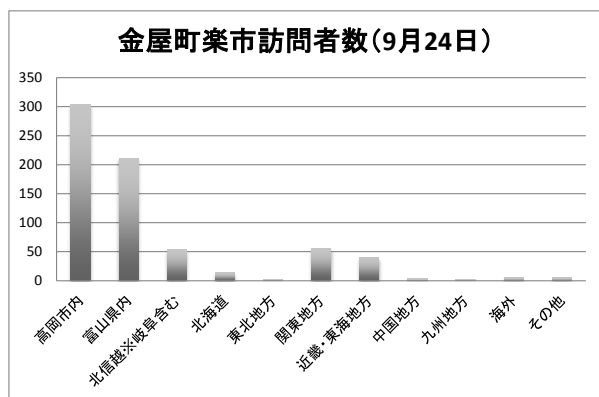


図4 金屋町楽市訪問者数

(会場のボードより筆者作成)

IV 考察・まとめ

これまで、高岡市では、市が文化創造都市高岡推進ビジョンを2015年より進めていること、その背景にある高岡市の芸術文化及び、町並みを活用した取組みについて調査を行った。高岡市で行われているこれらの取組みの特色が3つ挙げられる。

一つ目は、地区単位の小規模なイベントが多いことである。高岡市には、それぞれの地区に祭礼行事が残っており、一つの市の中にたくさんの特色ある地域が存在する。そのような地域の歴史・文化の蓄積を住民らが能動的に受容し、自発的なイベントとして行動を起こしている地区が、金屋町や吉久町のように多くある。自治体の方々にお話を聞くと、皆さん自分のまちの歴史についてしっかりと語ってくださり、そのような部分からも、自分たちのまちに誇りを持っていることうかがえた。今回の調査地以外でも、中田のかかし祭りや福岡のつくりもんまつり、伏木のけんか山など、高岡の文化的魅力は尽きない。

二つ目は、芸術文化学部が存在である。高岡のイベントを見ていくと、必ずと言っていいほど芸術文化学部の協力があることが分かった。芸術文化学部は、伝統産業の担い手育成にも深く関わり、高岡市の持つ性質との親和性が高い。かつ芸術文化学部の学部創設理念にある「地域の幅広い伝統産業を継承し、一層発展させることのできる人材の育成」が着実に達成されている現場を見ることができた。大学があることが地域に若い人材を定期的に供給し、活力を生む一助となっている。この大学の存在が地域にとって非常に大きな役割であることが高岡市の特徴の一つである。

三つ目は、クラフトを軸にした活動の展開である。高岡で新しく興っている分野で最も目立つのがこの分野である。クラフト系3イベントの展開や、高岡独自のオープン

ファクトリーの取組みであるクラブツーリズム、燕三条市のオープンファクトリーの取組みとのコラボ、伝統産業青年会の活躍など、数多くの事業が展開されている。高岡の産業を担う重要な存在として、芸術文化のまちづくりの中に経済的なエネルギーを送り込んでいるのがこの分野ではないだろうか。

このように、高岡市のまちづくりの特色ある点を挙げてきたが、それらを踏まえた上での課題を提案してまとめとする。高岡の取組みは、行政がビジョンを推進する前から住民主体で始まってきたものが多く、まちの人の力を強く感じられるものとなっている。だが、これからさらに将来的な課題としては、さらなる面の拡大であると私は考える。なぜなら、現状の高岡の面的な広がり、中心市街地周辺のみとなっており、吉久のような少し外れたところでは、ビジョンの恩恵を受けなくなってしまっているからである。これは、万葉によるまちづくりにも同様のことが言える。高岡には他にも文化資源がたくさんあるにも関わらず、それらをまだつなげられていないと言えない。工芸を軸にしたまちづくりだけでは語れない高岡の魅力を、点在している高岡の他の地域とも連動させてより強固な“高岡像”をつくりあげることが、高岡のブランド力をさらに高め、まちを魅力的なものにしていくのではないかと考える。

謝辞 本調査の実施にあたり、インタビュー調査に快く応じてくださった高岡市役所の皆様、高岡クラフト市場街実行委員長松原さま、金屋町自治会の皆様、吉久まちづくり推進協議会のみなさま、高岡伝統産業青年会の皆様、芸文ギャラリーの平野さまに、末筆ながら、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

注

1) 以上、第2章 高岡市の歴史と文化財による。

文献

- 伊藤裕夫 2012. 「創造都市」とは-その関心の背景・事例と我が国における課題-。富山大学芸術学部編 高岡芸術文化都市構想 都萬麻1: 18-25.
- 平田オリザ 2001. 『芸術立国論』集英社.
- 平田オリザ, 高橋正樹, 武山良三 2015. 鼎談「社会の中の芸術文化」。富山大学芸術文化学部編 高岡芸術文化都市構想 都萬麻4: 14-55.
- 金屋町楽市inさまのこ2014報告書.
- さまのこアートinよっさ資料.
- 高岡クラフト市場街 2015年度報告書.
- 高岡市経営企画課 都市経営課 文化創造推進室 2015. 文化創造

都市高岡推進ビジョン.

文化創造都市高岡推進懇話会提言 2015.

文化創造都市高岡プロモーションチーム 2013. 文化創造都市高岡の実現に向けた提案.

創造都市ネットワーク日本 創造都市とは

<http://ccnj.net/what/> (最終閲覧日2016年10月20日)

高岡市観光ポータルサイトたかおか道しるべ 金屋町

<http://www.takaoka.or.jp/viewpoint/archives/863> (最終

閲覧日2016年10月2日)

富山大学芸術文化学部沿革.

<http://www.tad.u-oyama.ac.jp/outline/index.html#history>

(最終閲覧日2016年12月22日)

高岡市文化財課『第2章 高岡市の歴史と文化財』

<https://www.city.takaoka.toyama.jp/bunkazai/kanko/bunka/sekaisan/documents/itibudainisyoul.pdf> (最終閲覧日

2016年10月20日)

漫画家のふるさととしての地域振興の現状と課題

ードラえもん和藤子・F・不二雄和高岡市ー

本田 真裕子

I はじめに

近年、アニメや漫画をコンテンツとしたツーリズムによる町おこしが盛んである(増淵 2009). アニメや漫画のコンテンツツーリズムの観点から言うと、地域は主に「作品の舞台」「作者ゆかりの地」の二種類に分けることができる(山村 2011). 前者は、深夜アニメが急増する昨今において1つの作品に時間が割けなくなり写真を背景に取り込んだことから始まる. そのため比較的新しいアニメ、深夜アニメに多くみられる. 一方で後者は、作品自体よりもその作者自体がコンテンツとして成立するため、作品自体も国民的で古くからあるものが多い.

「作品の舞台」は、有名な例としては埼玉県鷲宮市(現久喜市・幸手市)の「らき☆すた」でのまちおこしが挙げられ、岡本(2009)など、「聖地巡礼」をキーワードに多くの研究がある. 一方で、「作者ゆかりの地」においては、「ゲゲゲの鬼太郎(水木しげる)」でまちおこしを行った鳥取県境港市が挙げられ、澤田(2006, 2015)などが挙げられるが、その研究は多くない. そこで本調査は、全国的に知名度の高い「ドラえもん」の作者である「藤子・F・不二雄」の出身地である富山県高岡市を例に、作者ゆかりの地としてまちおこしをする地域の現状を明らかにし、これから留意すべき点を考察する.

II 藤子・F・不二雄について

ドラえもんで有名な藤子・F・不二雄(本名:藤本弘)は1933年に高岡市で生まれ、1954年に上京するまで同市で暮らしていた. 小学生の時に氷見市から転校してきた安孫子元雄(後の藤子不二雄A)と意気投合し、ともに漫画を描き始める. 中学二年生の時に手塚治の作品「新宝島」に感銘を受け漫画家を志す. 中学から高校にかけて雑誌に漫画投稿を始め、1951年に毎日新聞に掲載された「天使の玉ちゃん」で実質的なデビューを果たす. 高校卒業後はお互い就職するも、1954年に藤本が誘う形で上京する. このころ、2人の共同名義を藤子不二雄とす

る. その後、2人はトキワ荘(豊島区)に住み、その後川崎市に移り住んでいる. 1987年に二人はコンビを解消し、藤子・F・不二雄、藤子不二雄Aとしてそれぞれ独立して活動を始め、藤子・F・不二雄は漫画制作会社藤子プロを立ち上げる. 現在のドラえもんの著作権者(製作者)は藤子プロである.

III 調査概要

本調査では、新聞や文献の資料調査を行い、加えて高岡市の藤子・F・不二雄を活用したまちづくりに関わった方々にインタビュー調査を実施した. 調査対象者は、高岡市経営企画部文化創造課職員、高岡市藤子・F・不二雄ふるさとギャラリー館長、高岡市おとぎの森公園なかよしハウス、高岡市観光協会、高岡市商工会議所である. それぞれがどのように事業に関わったかについては表1を参照してほしい. また、市内のドラえもん関連スポットを「藤子・F・不二雄ふるさとポケットガイド(写真1)」を参照しながら巡る観察調査を行った.

IV 調査結果と考察

1. 高岡市における藤子・F・不二雄関連事業

まずは、資料収集及びインタビュー調査からまとめた高岡市における藤子・F・不二雄に関する取り組みについ



写真1 藤子・F・不二雄ふるさと高岡ポケットガイド
(筆者撮影 発行元: 高岡市経営企画部文化創造課)

て概観する。(表1)

始めに大きな事業を展開し始めたのは、高岡商工会議所である。表1を俯瞰すると分かるように、事業者は「藤子・F・不二雄」だけでなく、「ドラえもん」というキャラ

クターの使用を事業に取り入れている。キャラクターを使用するうえでの始めの難関は、製作者とコンタクトを取り、著作権者からキャラクター使用許可を得ることである。ドラえもんの利用に関して、当初藤子プロ側は

表1 高岡市における藤子・F・不二雄関連事業の取り組み

年	行政(市)	商工会議所(観光協会・最後のみのみ)	民間	その他
1994 平成6年			ドラえもんの散歩道(万葉の社)	
1996 平成8年				藤子・F・不二雄を愛する県民の会結成
1997 平成9年	藤子漫画コーナー設置(市立図書館)			
1998 平成10年	藤子・F・不二雄の世界展(市立美術館)			
2002 平成14年				ドラえもん文庫創設検討
2004 平成16年		ドラえもんパーク開設を市に要望	ドラえもん切符の限定販売	ドラえもん文庫開設
2005 平成17年		おとぎの森公園にキャラクター像設置決定(藤子プロ内諾)		
2006 平成18年		おとぎの森公園にドラえもん像6体設置		
2008 平成20年	ドラえもんの複製原画公開(市立図書館)		ドラえもん切符発売	
2009 平成21年		「ドラえもんなかよしハウス」開館 利長くんとのコラボキーホルダーの作成		
2011 平成23年			ドラえもん像ウイング・ウイング高岡前に	
2012 平成24年 ☆ドラえもん生誕100年前	ドラえもん生誕100年前企画展(県立図書館)	「なかよしハウス」 として 継続	ドラえもんトラム運行開始 フリー切符発売 乗客1万人達成イベント	
2013 平成25年	ドラえもんの科学みらい展の開催(市立美術館) ドラえもんポストの設置(市立美術館) 藤子・F・不二雄ギャラリー(F先生生誕80周年記念)(市立美術館,市立図書館)		乗客10万人達成イベント 運行延長決定(1度目) 乗客20万人達成イベント ショウワノート ドラえもん電車文具12点商品化	
2014 平成26年	科学で体験するマンガ展開催 ドラえもん消印開始 ドラえもんポスト消印利用期間延長 ドラえもんポスト高岡駅構内に移動		運行2周年・乗客30万人達成イベント 運行延長決定(2度目)	
2015 平成27年 ☆北陸新幹線開通	生誕80周年記念藤子・F・不二雄展の開催 藤子・F・不二雄ふるさとギャラリー開館		運行延長決定(3度目) ショウワノート新幹線開通記念のグッズ発売	まんが広場開設(クルン高岡) 藤子不二雄ふるさと会(Fの会)結成
2016 平成28年		ドラえもんを巡るツアーを台湾・国内客にPR	高岡の鋳造メーカー能作ドラえもん商品化	

※インタビュー対象者がどの事業に関わったのかが分かるように示した。文化創造課：行政(県)、藤子・F・不二雄ふるさとギャラリー：波線、なかよしハウス：破線矢印・下線・囲み、観光協会：二重下線、商工会議所：商工会議所(観光協会・最後のみのみ)

観光利用についての協力には消極的であった。そこで、商工会議所は「子供が集まる場所で、子供に夢を与えるため」という「青少年育成」の目的として、ドラえもんパークを作ることを2004年に提言し、藤子プロからの承諾を得た。そうして2005年におとぎの森公園にドラえもん像6体が誕生した。これは高岡開町400年記念として商工会議所が高岡市に寄付したという形が取られた。ただし、観光目的として駅前に像を作ることや、高岡銅器を使用した像にすることなどの要望は、藤子プロのドラえもんの使用目的に叶わなかったため、実現しなかった。次に商工会議所が取り組んだのは、常設施設を設立することである。こちらも先述のドラえもん像と同様、藤子プロは「子どもたちに愛されている場所ならば」、とおとぎの森公園内での施設建設に承諾した。こうして、おとぎの森公園内にあるモデルルームを改装する形で2009年に完成したのが「ドラえもんなかよしハウス」である。当初は常設の施設としていたが、続けていくことが困難であるという理由から半年間の期間限定となり、終了後は中の展示はほとんど撤去され、名前も「おとぎの森公園なかよしハウス」に変更することとなった。この間、ドラえもんとのコラボ商品の提案などがなされたが、結果として売り上げが伸び悩んだため、現在まで残る商品はほとんどない。

さてこれを境に、関連事業の主体は市へと移っていく。藤子プロから、コンタクトをとる窓口は一つが良いという要望もあったため、市役所の文化創造課が関連事業を進めていくこととなった。

ここで、2012年に契機があった。2012年9月3日は、ドラえもんが生誕する100年前であることを記念して、様々なドラえもん（藤子・F・不二雄）関連事業が行われた。大きなものとしては、富山県立図書館で行われた「ドラえもん生誕100年前企画展」、及び「万葉線ドラえもんトラムの運行」が挙げられる。ここからこれら二つの事業が主軸となる。まず前者については、これに引き続き様々な企画展が実施された。「ドラえもんの科学みらい展」や「科学で体験するマンガ展」、「生誕80周年記念藤子・F・不二雄展」が高岡含め全国で開催された。その流れの中で、藤子・F・不二雄の作品を出身地である高岡に残したいという思いが高まり、2015年12月1日（藤子・F・不二雄の誕生日）に「藤子・F・不二雄ふるさとギャラリー（写真2）」が常設の施設として開館した。後者の「万葉線ドラえもんトラム（写真3）」とは、万葉線という高岡市内を走る路面電車に、ドラえもんのラッピングを施したものである。運行開始以降3度も期間延長され、現在は2018年8月末まで運行予定である。万葉線高岡駅発のドラえもんトラムは1日



写真2 藤子・F・不二雄ふるさとギャラリー入り口
(筆者撮影)



写真3 ドラえもんトラム（筆者撮影）

真2からも分かるように、平日にもかかわらず電車の前で真を撮る親子の姿が多くみられる。また、2013年は藤子・F・不二雄の生誕80周年を記念して、高岡銅器で「ドラえもんポスト」が作られた。現在は市立美術館から高岡駅ホームのすぐ横に移動され、電車と共に鑑賞することが可能である。ドラえもんポストから郵便物を投函すると、ドラえもんの消印が押される。絵柄を変えながら更新され現在も続いている。

二度目の契機は2015年の北陸新幹線開通である。これを機に、高岡に人を引き込もうという動きが強まった。観光協会は市内に散らばったドラえもんスポットを繋ぐ周遊コースを企画し、ドラえもん人気の強い台湾や国内の観光客にPRを行っている。北陸新幹線開通後に開館した藤子・F・不二雄ふるさとギャラリーが周遊コースの拠点となりえたことがこの企画において大きいという。実際に台湾や韓国からの観光客が増えているため、次は国内観光客も高岡に引き込むきっかけにドラえもんになることを期待している。さらに、同じ年には文苑堂（藤子・F・不二雄が足繁く通った本屋）の社長は、「高岡を漫画の町にしたい」という願いからクルン高岡の地下に無料で漫画が読める「まんが広場」を開設した。その後、藤子・F・不二雄の非公認ファンクラブであるFの会を結成し、藤子・F・不二



写真4 ショウワノート ドラえもん関連グッズ

(ドラえもんトラム関連商品マスキングテープと新幹線開通記念クリアファイル。筆者撮影)

雄の自宅があった場所の民家を買上げ、定塚ギャラリーを作った。これは、藤子・F・不二雄の生家を求めて全国から来たファンに対して、折角来たのに何も無いのは可哀想だという良心から作られたものだという。(ただし現在はFの会会員しか中には入れないそうだ。) また、民間では高岡市で創業された文具メーカーであるショウワノート(株)が新幹線開通記念のドラえもんグッズを多数販売した(写真4)。これらのグッズは現在も市内の各地の店舗で販売されている。最近では、2016年7月28日に高岡鋳物メーカーである株式会社能作が、仏具の真ちゅうを使用したドラえもんグッズを発売することを公表したばかりである。このプロジェクトは3年前から藤子プロと交渉しながら進められてきたという。キャラクター使用には、さまざまに条件があるが、一番大きいのは「ドラえもん等の作品の世界観やイメージを壊さない」ということであり、それが認められなければグッズ化にこぎつけることは出来ない。能作社長は「原作者の藤子・F・不二雄が高岡出身であることを広め、観光客誘致にも貢献したい」と語っている。このように最近では市だけではなく、民間や個人の活動も目立ってきている。しかし一方で、市民の「藤子・F・不二雄が高岡出身である」ことへの認知度はいまだ低い。

2. 「作者ゆかりの地」としての現状と課題

ここでは前項から見てきた「作者ゆかりの地」としてまちおこしをすることの現状と課題を、「作品の舞台」と比較しながら考察する。

1) 地域・製作者・ファンとの関係性

ここではコンテンツツーリズムにおいてしばしば議論される地域・製作者・ファンとの関係を考察する。「作品の舞台」との対比でみると分かりやすい(図1)。私はこれまでこの三者の関係の中で特に「地域→ファン」と「製作者⇄地域」の関係を論じてきた。そして二つの大きな違いは、図中に点線で示している「製作者→地域」の部分で

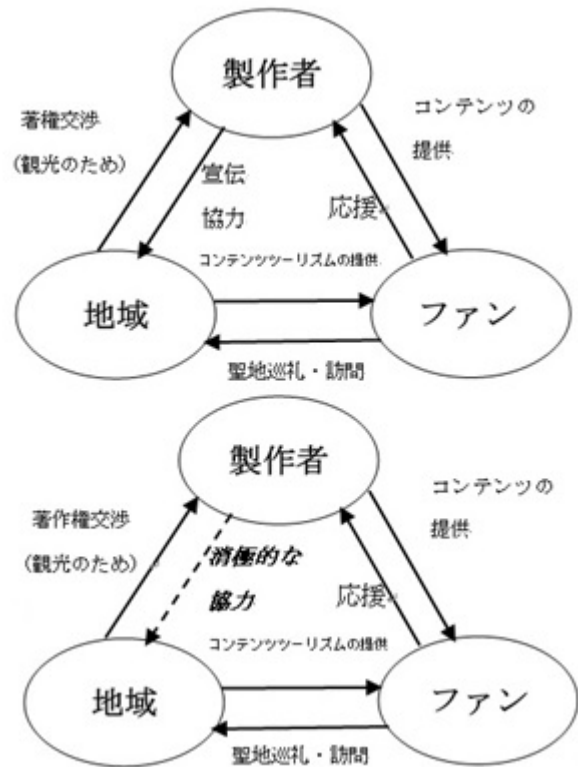


図1 地域・製作者・ファンとの関係(上:「作品の舞台」、下:「作者ゆかりの地」)(筆者作成)

ある。

この違いはコンテンツとなる作品の違いに現れると考える。作品の舞台となる「作品」はIでも述べたように、アニメの背景技術の発達により比較的新しいアニメ、特に深夜アニメに多く、知名度が低いことが多い。そのため基本的に作品を宣伝したい製作者と地域との利害は一致し、ギブアンドテイクの関係がコンテンツツーリズムの協力関係において強く働く。一方で、ドラえもんや藤子・F・不二雄と言った国民的な作品・人物になると、宣伝の必要はほぼ無いといってよい。そのため、藤子プロの言うような「子どもたちに夢を与えるため」という製作者側の目的と、観光利用のためという地域側の目的が上手く結びつかないことが多くなってしまっているのである。

2) 作者と地域の関わり

ここでは、作者と地域を結び付ける困難性について述べる。当然のことであるが、コンテンツツーリズムというのはコンテンツが地域と関係していないと成立しない。まったく地域と関係のないコンテンツをその地域と結びつけることは出来ないが、反対に言えばアニメや漫画と言った一見関係ないものを地域と結びつけるだけで立派な観光資源となるという利点がある。ここでも「作品の舞台」との対比で明らかにしていく。作品の舞台の地域というのはその資源が、地元の景色であり建物そのものである。その資源となるという利点がある。ここでも「作品の舞台」と

一見関係ないものを地域と結びつけるだけで立派な観光ため、土地とコンテンツを結び付けやすいし、極端に言えば手を加えなくてもすでに関連していることになる。

しかし、作者ゆかりの地となると、ここで2つの問題が生じる。1つ目は、地域と結び付けにくい点である。作者の出身地だからと言って、目に見える何かが残っているところは少ない。だからこそ、ドラえもん像を作ったり、原画を展示したりイベントを行ったり、はたまた作者の家であったところを買い取ったりして、形に残す努力を行う必要がある。2つ目はプライバシーの問題である。例えば、作者の出身だと言うことならば、作者が住んでいた家・通っていた学校などが聖地になりえるのではないかと、安易に考えるかもしれない。しかし、藤子・F・不二雄が通っていた学校は現在も学校として使われており、そのようなところを聖地化すればどんな結果になるか予想はつくであろう。家も同様である。即ち、実在する人をコンテンツとして利用するとプライバシーの問題が生じ、それを避けつつ企画をしていかなければならないという制約が生まれるのである。以上2つの制約の中で、高岡市が考えたことは、「原画の展示」と「ドラえもんというキャラクターの使用」である。

原画の展示については前項で述べた。ドラえもんというキャラクターを使用するには、ドラえもん＝高岡市となる必要がある。ドラえもんという作品自体は、公式に聖地とされている場所はなく、だからこそ高岡市→藤子・F・不二雄→ドラえもんという流れを作って、ドラえもん和高岡市を結びつけることは不可能ではない。しかし、藤子・F・不二雄はⅡの2で述べたように上京後は最終的に川崎に住み、そこでドラえもんを生み出した。つまり藤子・F・不二雄→ドラえもんという流れや、ドラえもんというキャラクターや作品そのものは、川崎市の方が自然であり結びつきが強いと言える。ここにも作者と地域を結びつけることの困難性や制約が伺える。また、そもそも「作者ゆかりの地」である以上、作品自体やそのキャラクターと地域との直接のかかわりは薄い。しかし、作者それ自体よりもアニメや漫画作品そのものの方がキャッチーでコンテンツツウリズムのコンテンツとして利用していきたい気持ちも当然ながらある。そこで、高岡市は、ドラえもんという作品やキャラクターを全面に押し出すのではなく、まず藤子・F・不二雄ありきのドラえもんというスタンスを変えることないようにする必要性があり、その中で慎重に事業を進めているといえる。

3) 市内の関連スポットについての結果と考察

ここでは、藤子・F・不二雄関連スポットを巡って観察



写真5 高岡古城公園内の卯辰山

(ドラえ蒙の作中に出てくる裏山のモデルと言われている小山。目印等もなく一度見逃してしまった。筆者撮影)

調査の結果と考察を行う。

まず、観光案内所でのみ、「藤子・F・不二雄ふるさとポケット」を配布しているが、通常の観光パンフレットのように平積みになっているのではなく、受付で言わないと貰えない仕組みになっていて、1人一部の制限もある。製作費がかかることで大量には刷れないこと、置いておくとなすぐに無くなってしまふためだという。ポケットガイドの通りに市内を巡ってみたが、その場所で目印となる看板や解説が少ないことが分かり、観光客が迷ったりよくわからないまま通り過ぎてしまったりすることが懸念された(写真5)。

ふるさとガイドでも大きく取り上げられている「高岡市藤子・F・不二雄ふるさとギャラリー」は2015年12月にオープンし、市内のドラえもん関連施設の拠点となっている。同館では、主に藤子・F・不二雄の上京までの作品や展示が大半を占め、上京後の展示をメインにする川崎市藤子・F・不二雄ミュージアムとの差異化が図られている。限定グッズを含むグッズを販売する売店も併設されている。このギャラリーに来ることによって子どもの漫画家への夢をはぐくむことができたなら館長は言う。しかし、美術館に併設されているという性格上、スペースも狭く原画中心の展示内容となっているため、アミューズメント性は低く、現実には一般の入場者が多い。

そのため、ギャラリーが果たす役割としては、高岡市の偉人館となるのが大きいといえる。高岡市藤子・F・不二雄ふるさとギャラリーの誕生により、川崎市藤子・F・不二雄ミュージアムとの関連性も強まり、両者合わせて藤子・F・不二雄の歴史を概観できることの意義は大きい。

V 結論

以上でみてきたように、「作者ゆかりの地」として地域

おこしをするには、様々な制約や問題があるということが分かる。特に、「作品やそのキャラクター及び作者自身に関するコンテンツ使用の制約」という問題が大きい。そして関連事業はそれらの問題を回避するように慎重にすすめられていることが伺えた。しかし高岡市のコンテンツツーリズムに対する取り組みは本格的に始まったばかりで、まだ改善できる点も多い。藤子・F・不二雄が生まれた町としての誇りを市民全員が持ち広めていくことと同時に、自治体側は藤子・F・不二雄のふるさとであるということを高岡独自の遺産であると再認識し、そのふるさとにファンが来たいと思えるような街づくりを引き続き行っていくことが望ましいと言える。

謝辞 本調査に当たりご協力くださった、市役所文化創造課皆様、藤子不二雄ふるさとギャラリーの皆様、高岡市観光協会の皆様、高岡商工会議所の皆様、なかよしハウスのスタッフの皆様、誠にありがとうございました。

文献

岡本 健 2009. 来訪者の回遊行動を誘発する要因とその効果に関する研究：埼玉県北葛飾郡鷺宮町における「飲食店スタンブラリー」を事例として. 学術講演梗概集. F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題:219-220
澤田廉路 2006. 「青山剛昌ふるさと館」開館に伴う地域活性化

の展望と課題—マンガ「名探偵コナン」の活用で町の活性化が出来るか—. TORCレポート 2006（下）(28).

澤田廉路 2015. 「水木しげるロード」来訪者の実態と再整備に関する考察：「水木しげるロード」が地域再生に果たす地域マネジメントの研究 その2. 日本建築学会中国支部研究報告集 38: 785-788.

増淵敏之 2009. コンテンツツーリズムとその現状. 地域イノベーション 1: 33-41.

山村高淑 2011. アニメ・マンガで地域振興:まちのファンを生むコンテンツツーリズム開発法. 東京法令出版.

『北日本新聞』2005年9月9日「高岡おとぎの森公園 ドラえもんパークに変身 キャラクター像設置 藤子・Fプロ内諾 高岡商議所, 来年度に」.

『北日本新聞』2009年1月1日「高岡開町400年 ドラえもんとおとぎの森公園 展示施設開設へ.

『北日本新聞』2009年2月16日「高岡市「ドラえもんの街」づくり 開町400年機に加速 (ニュースなるほど)」.

『富山新聞』2016年1月23日「ドラえもんのまち巡って 高岡市観光協会 国内, 台湾客にPR」.

『北日本新聞』2016年7月28日「能作「ドラえもん」商品化 小皿や風鈴 雑貨5種を8月発売 キャラ市場で需要開拓」.

藤子プロ監修, さいとうはるお(漫画), 黒沢哲哉(シナリオ) 1997. 小学館版学習まんが人物館藤子・F・不二雄.

文化を活用したまちづくりと地域活性化 ー富山県高岡市「万葉のふるさとづくり」を事例にー

松島 璃子

I はじめに

富山県高岡市の台地上には2つの重要な歴史文化が残されている。1つは高岡台地上に築かれた前田家による加賀文化、そしてもう1つは伏木台地の上で築かれた、万葉集の代表的歌人大伴家持による万葉文化である。天平18年(746)に越中国守として着任した大伴家持を主軸として築かれていった万葉文化は高岡の魅力、財産であり、高岡市では市制100周年を境に「万葉のふるさとづくり」として万葉文化をまちづくりに活用していくようになった。「万葉のふるさとづくり」は1980年代後半から取り組みがスタートし、万葉歴史館の建設や高岡万葉まつりの実施など様々な万葉に関する事業を行ってきた¹⁾。井口(1997)は「万葉のふるさとづくり」事業の1つである野外音楽劇「越中万葉夢幻譚」を紹介しているが、「万葉のふるさとづくり」がどのような結果を生み出し、どのように高岡の地域活性化へつながったのかをまとめた文献は非常に少ない。多くの事業を展開した「万葉のふるさとづくり」を振り返ることで、文化を活用したまちづくりの影響や効果をみることができるため、「万葉のふるさとづくり」の変遷を調査する必要がある。

そこで今回の大巡検では万葉がかおる街、高岡が行う「万葉のふるさとづくり」は事業開始から現在までどのように変遷し、展開したのかを聞き取り調査し、文化を活用したまちづくりについて考察した。

II 高岡市における「万葉のふるさとづくり」

1. 対象地域の概要

今回の大巡検は富山県高岡市にて実施された。高岡市は日本海に面する富山県北西部に位置し、市内の西側は山間地域で西山丘陵や二上山が連なり、東側は庄川、小谷部川によって形成された扇状地となっている。小矢部川は河岸段丘をいくつか形成し、かつて越中国府がおかれた伏木台地もまた小矢部川の河岸段丘である。

746年、越中国守として大伴家持が伏木へ赴任し、海越しに連なる3000m級の立山連峰や二上山をはじめとする越中の雄大で豊かな自然に触発された家持は越中に滞在

した5年間で223首もの歌を詠んだことから、高岡は万葉故地としても有名である。

2. 越中万葉の概要

「万葉のふるさとづくり」の根幹となる「越中万葉」とは、万葉集の中で越中の地において歌われたか、あるいは越中にかかわって歌われた歌のことを指す。実は、越中万葉という言葉は学術用語ではなく、富山県を中心に使われている用語に過ぎない。越中万葉は「万葉集」全4516首のうちのわずか約7%にあたる337首しか存在しないのにもかかわらず、「越中万葉」と括られ注目されている。万葉歴史館での聞き取り調査によれば、その理由の1つとして大伴家持が越中時代に詠んだ歌の多さがある(表1)。越中時代以前の家持は14年間で158首の歌を詠んでおり、つまり1年間で約12首程度のペースで歌を詠んでいたのに対し、越中時代の家持は5年間で223首もの歌を詠んでおり、これは1年間で約45首歌を詠むペースにあたるため、越中時代は越中時代以前よりも約4倍のペースで歌を詠んでいたということになる。越中時代以降になると8年間で92首、つまり1年間で約12首のペースで詠んでいたということになり、越中に滞在している間、家持はいかに多くの歌を詠んだのかわかる。

また注目すべきは歌数だけではない。万葉集において出てくる地名が述べ100を超える都道府県を見てみると第5位に富山県が入る(表2)。万葉集の時代の都が奈良にあったため、人々の生活圏は奈良を中心とする近畿地方にあったことから、必然的に奈良県、大阪府、滋賀県、兵庫県、京都府、和歌山県の地名がついた歌が多く詠まれた。しかしその中で近畿地方ではない富山県が第5位となっているのは極めて異例なことなのである。つまり、家持にとって越中という地で過ごした5年間は重要な作歌活動の時間であり、それこそが越中万葉が注目される所以である²⁾。

1. 「万葉のふるさとづくり」事業の経緯

「万葉のふるさとづくり」事業の経緯について高岡市役所生涯学習課と万葉歴史館にて聞き取り調査を行った。

表1 時期別大友家持の詠んだ歌数

時期	滞在年数	歌数
越中時代以前	14年間	158首
越中時代	5年間	223首
越中時代以降	8年間	92首
計	27年間	473首

(小野寛著『大友家持の生涯』有精堂)

表2 万葉集において出てくる地名が

述べ100を超える都道府県

第1位	奈良県	897例
第2位	大阪府	218例
第3位	滋賀県	145例
第4位	兵庫県	142例
第5位	富山県 (+石川県28例)*	140例 (168例)
第6位	福岡県	129例
第7位	京都府	127例
第8位	和歌山県	126例

資料：高岡市万葉歴史館「万葉のふるさとづくりとは」

*大伴家持が越中守であったとき、越中国は射水、礪波、婦負、新川の四群に能登国の羽咋、能登、鳳至、珠洲の四群が併合された大国であった。つまり古代を考慮すると石川県の例を足して越中として数えることもできる。石川県も含めた場合は越中の地名は3番目に多く詠まれたということになる。

高岡における万葉と町の取り組みの歴史を遡ると、高岡は江戸時代から「万葉」に燃えていたと言える。

加賀藩第5代藩主前田綱紀による藩命により、天和3年（1683）射水群の十村役が越中万葉の歌枕を調査したのがはじまりである。この藩命の成果は後に歌碑・故地碑建立につながることとなった。明治時代になっても引き続き越中万葉の文学的研究は行われてきた。

まちづくりの取り組みとして「万葉のふるさとづくり」が姿を現し始めるのは、全国で40圏域のモデル定住圏が制定され、富山県内では高岡射水圏域がモデル定住圏となった昭和54年頃である。高岡市は昭和55年3月に高岡射水モデル定住圏計画を策定した。高岡市の人口現象を食い止め、若年層の定住化を目指すことを目標に、①万葉のふるさとづくり、②個性ある生涯学習環境づくり、③魅力ある職場づくりに取り組み始めた。万葉のふるさとづくりの特別事業として、散策コースの整備、万葉歌碑公園の整備、歴史的文化遺産の開発整備、サイクリングロードの整備、文化的行事として万葉フェスティバルの開催など様々な事業が計画された。

しかしあくまでも計画であり、万葉歌碑公園などは現

在でも存在していない。当時の資料が残っておらず、実際にこれらの計画が実行されたのか、またその効果は不明となっている。平成3年8月、国の支援措置がなくなったことなどから、高岡射水モデル定住圏策定推進協議会は圏域内の連絡調整を主目的とする高岡射水地域づくり推進協議会に名称を変更した。近年では、とやま呉西圏域連携中枢都市圏の形成を推進している。連携中枢都市圏は市町村の連携によりコンパクト化とネットワーク化を図り人口減少・少子高齢化社会であっても一定の圏域人口を有し、活力のある社会経済を維持することを意義としており、高岡射水モデル定住圏のように万葉のふるさとづくりを目指すものではなくなった。

高岡射水モデル定住圏にかわって「万葉のふるさとづくり」の事業を引き継いだのは、高岡市により5年ごとに作成されていた高岡市総合計画である。昭和56年4月の高岡市総合計画第4次計画では万葉のふるさとづくりの推進事業がはじめて盛り込まれた。ここでは具体的推進事業として、万葉資料館の設置、万葉歌碑を中心とした公園・植物園の整備・散策コースなどの整備、家持像の駅前設置（写真1）などが提案された。昭和61年4月高岡市総合計画第5次計画では万葉歴史館の建設、万葉まつりの充実などが盛り込まれ、実際平成2年10月に万葉歴史館がオープンした。平成3年4月高岡市総合計画第6次事業計画では万葉のふるさと推進事業としてラジオウォーク万葉、堅香子の花一株運動、野外音楽劇、万葉集全20巻朗唱の会・高岡万葉まつりなどが盛り込まれ、万葉歴史館事業でも万葉セミナー・講座・シンポジウム等の開催、図書資料収集などが挙げられた。そのうちラジオウォーク万葉や堅香子の普及、野外音楽劇、万葉集全20巻朗唱の会・高岡万葉まつり、万葉セミナーなどは実際に計画が実行された。

第4次事業計画あたりから、「万葉のふるさとづくり」の様々な事業は、以前のように計画のみに留まることなく次々と実現されていくようになるが、その背景には高岡市市制施行100周年記念の存在がある。昭和64年（1989）に迎える市制施行100周年の記念事業は昭和61年からスタートした高岡市総合計画第5次事業計画の「基本構想」において、「これまでの歴史を振り返るとともに、現在の位置を確認し、21世紀への新しい出発を決意する意味を込めて、幅広い市民の知恵と力の結集・行動によって記念式典、記念出版、記念イベント、記念施設から成る事業を実施する」と事業の基本的方向性をまず明らかにし、昭和65年度までの事業計画の



写真1 大友家持のブロンズ像（高岡駅前にて著者撮影）

表3 万葉フェスティバル開催イベント

イベント	開催日	参加人数	主催
われら万葉集inたかおか ^{*1}	H1 9/30-10/1	—	市制100周年記念イベント実行委員会
高岡万葉サミット	H1 9/30	700	市制100周年記念イベント実行委員会
LIVE TALK まんよう	H1 9/30	700	市制100周年記念イベント実行委員会
万葉グラフィティ	H1 9/30-10/1	1200	市制100周年記念イベント実行委員会
万葉の宴	H1 9/30-10/1	450	市制100周年記念イベント実行委員会
ラジウォーク万葉	H1 10/1	6000	市制100周年記念イベント実行委員会 北日本放送
野外音楽劇	H1 9/30-10/1	5000	市制100周年記念イベント実行委員会
第9回高岡万葉まつり ^{*2}	—	—	市制100周年記念イベント実行委員会 高岡万葉まつり実行委員会
万葉まつりパレード	H1 10/1	900	市制100周年記念イベント実行委員会 高岡万葉まつり実行委員会
高岡万葉マラソン大会	H1 10/8	830 ⁴⁾	市制100周年記念イベント実行委員会 高岡万葉まつり実行委員会

資料：高岡市「高岡市市制100周年記念事業記録誌」

^{*1} われら万葉集inたかおかは県内外の万葉愛好者や一般の方も交えて、万葉を楽しく語り集う場として「高岡万葉サミット」「LIVE TALK“まんよう”」や古代食を味わう「万葉の宴」、万葉に関する作品を展示した「万葉グラフィティ」を実施した。

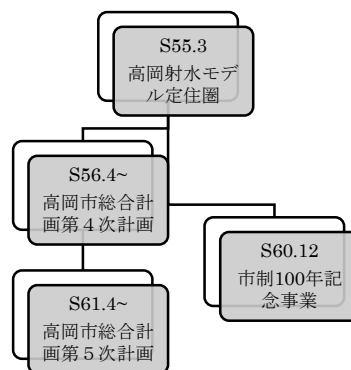


図1 万葉のふるさとづくりの変遷

資料：高岡市「高岡市市制100周年記念事業記録誌」

^{*2} 高岡万葉まつりでは万葉にちなむ多彩な行事が行われ、万葉まつりパレードや、高岡マラソン大会はその行事のうちの1つである。

中で内容を掲示して市制100周年記念事業は高岡市総合計画の中に正式に位置付けられた。記念事業の推進体制を整えるため、市役所各課が連携を図りながら、組織を設置して全庁体制で取り組むこととなった。また市民と行政が一体となって記念事業を実施するため「市制施行100周年記念イベント研究会」を設け、総合計画の示す「高岡イメージアッププラン」のねらいに沿ったかつ市制施行100周年、開町380年にふさわしい記念行事の開催を目指していった。この中で記念事業の目標として「市民の心に火を燃やす」「高岡をアピールする」を設定し市、市民、第3セクターとしての企業、が共同して記念イベントを最大限盛り上げることとなった。

高岡は全国有数の万葉故地として、「万葉のふるさと高岡」を全国にアピールするため、従来から行われていた万葉まつり³⁾に“万葉に集い”“万葉を遊び”“万葉で創る”をテーマに加えた「万葉フェスティバル」が開催された(表3)。

「万葉のふるさとづくり」は高岡が持つ貴重な歴史的・文化的遺産を根底においた文化のまちづくりであり、まちづくりにおいて大切なことは文化的なイベントを市民が毎年繰り返し継続して行う事である。「市制施行100周年記念イベント」としても実施された「万葉のふるさとづくり」であるが、市制施行100周年記念イベント終了後も高岡市総合計画として、万葉歴史館を中心に継続して事業が行なわれている。

Ⅲ 「万葉のふるさとづくり」事業の展開

「万葉のふるさとづくり」は多岐にわたる様々な事業を展開している(図2)。万葉顕彰の催しの開催、町の施

設や商店に万葉や家持にちなむ名前をつけるなど、高岡の街のいたるところに万葉の要素が入れられている。本稿では万葉のふるさとづくりの事業の中で歴史が長い万葉集全20巻朗唱の会と、かつて「万葉のふるさとづくり」の中でキーマン的な位置付けをもち、高岡市民の「万葉集はむずかしい」という一種の万葉アレルギーのようなものからの払拭のきっかけとなった⁵⁾ 野外音楽劇「越中万葉夢幻譚」の2つに関して資料収集と聞き取り調査を行い、「万葉のふるさとづくり」を支えてきた存立基盤や、これらの事業が与えた地域への影響、今後の課題について考えた。

1. 万葉集全20巻朗唱の会

1) 事業の概要

万葉集全20巻朗唱の会は万葉集全20巻、4516首すべての歌を三日三晩かけて2000名を超える人々が歌い継ぐ高岡万葉まつりの一大イベントである。このイベントは今年で第27回目を迎えた。毎年10月初旬に高岡古城公園の特設水上舞台で行われ、約13000名が来場する。このイベントは平成元年「富山県コロンブス計画」の一環として富山県で実施された「県民参加型イベントシナリオコンペティション」の入賞作品であり、その作品を万葉のふるさとである高岡市で採用したことが始まりである。

2) 事業の存立基盤：人的基盤

事業が毎年継続して行われるためには、事業を支える人的基盤が必要不可欠である。万葉集全20巻朗唱の会は「万葉集全20巻朗唱の会にいざなう会」と「高岡万葉まつり実行委員会（高岡市役所観光交流課）」が主催している。万葉集全20巻朗唱の会での聞き取りによると、当日の運営は婦人会や高校、ボランティア団体などからサポートスタッフと合わせて300名ほどの市民ボランティアで受付や衣装の着付け、燈火などを行う。平成27年10月2～4日で開催された第26回万葉集全20巻朗唱の会においては全38団体、総計344名の市民ボランティアが運営スタッフとして参加した。

万葉集全20巻朗唱の会のイベントにおいては朗唱者もまた重要な人的基盤となる。毎年2200名ほどの朗唱者が高岡に集まり会が催される。朗唱者の年代は3歳の子供から90歳の高齢者までと非常に幅広い。割合としてはやはり高齢者の方が多いそうだが、万葉のふるさと地域学習活動の一環として高岡市内全小中学校が万葉集全20巻朗唱の会への参加が必須になっていることから若者の参加者も一定数いるようである。歌の詠い方は自由であるため、幼稚園生や保育園生が万葉歌を童謡にアレンジしてメロディーにのせて詠うということもあるようだ。

①万葉顕彰の催しなど

- 高岡万葉まつり
- 万葉集全20巻朗唱の会
- 万葉マラソン大会
- 高岡野外音楽劇「越中万葉夢幻譚」
- 万葉かるた大会
- 万葉の舞（野村小、伏木小、古府小、国吉小、太田小）
- ラジオウォーク万葉
- 万葉まつりパレード
- 高岡万葉サミット
- カタカゴの花一株運動
- 全国万葉故地ネットワーク

②地域学習活動

- 万葉歴史館
- 万葉セミナー
- 万葉学習講座
- 万葉歌碑
- 植物園の整備

凡例：○現在も行なわれている事業

●現在は行なわれていない事業

図2 万葉のふるさとづくり事業

資料：聞き取り調査ならびに高岡市万葉歴史館「万葉のふるさとづくりとは」

また近年参加者が少なかった大学生の参加者が増加しつつある。「簡単にコスプレを楽しみたい」、「かわいい衣装を着てSNSで共有したい」、「小さい頃憧れだった大人用の万葉衣装を着てみたい」などの意見から万葉集そのものではなく歌を朗唱する際に着用する万葉衣装を楽しむ目的で参加する若者も多いことがわかる。

そして県外からの参加者もいる。県外からの参加者の割合は全体の1割ほどで、北は北海道、南は沖縄まで全国津々浦々参加者がやってくる。県外からの参加者の多くは万葉集愛好家であり、毎年万葉集全20巻朗唱の会に参加しているリピーターである場合が多い。また、県外からの参加者の幅は北陸新幹線開通後から広がった傾向も見られる。北陸新幹線によって関東圏に住む人は高岡へ行きやすくなったが、中京圏に住む人は新幹線が通っていないため、交通アクセスの面でかえって遠くなる現象が発生している。

さらに万葉集全20巻朗唱の会を支える人材の高齢化が年々進んでいることが課題としてあげられる。県外から

の参加者も高齢化が進んでおり、70代にもなると参加を諦めてしまうケースがある。新たに万葉集全20巻朗唱の会を支える人材を確保することが早急の課題となる。

3) 事業の存立基盤：財源的基盤

万葉集全20巻朗唱の会を開催するにあたって、水上舞台設置代、音響代などのハード面や衣装代（衣装のクリーニング代も含む）、当日運営スタッフのお茶・食事代など毎年約2000万円の支出となる。2000万円のうち、1300万円は市からの補助金が、180万円は県からの補助金が充てられており予算の半分以上を市に依存している。また残り500～600万円は市役所職員が地元企業や商店から協賛を募ることで賄っている。平成27年10月2～4日で開催された第26回万葉集全20巻朗唱の会では154社の協賛を受けた。毎年これだけのお金を動かしイベントを開催することは容易ではない。これからイベントを開催し続けるために、以前は無料であった衣装の貸し出し代を200円（但し、高校生以下は無料。北陸新幹線で「新高岡駅」を利用し、領収書または復路の切符を見せると無料）に設定した。しかしながら全部で約300着⁶⁾ほどの衣装のクリーニング代は1着あたり4000円かかり、つまり総額120万円ほど支出することとなる。朗唱者2200名が全員200円で衣装を借りたとしても、衣装のクリーニング代の36.7%ほどしか回収することができないのが現状である。

このイベントは、高岡の人々が万葉歌に親しむきっかけをつくり「万葉のふるさと高岡」を全国にPRすることが主目的であるが、そもそも財源的基盤がなくては実施することができない。現在、全体の半分ほどを高岡市の財政補助に依存している状態であり、高岡市がまちづくりに万葉集をどう活用していくかでこのイベントの今後は変わってくると言える。

2. 野外音楽劇「越中万葉夢幻譚」

1) 事業の概要

高岡野外音楽劇「越中万葉夢幻譚」は平成元年の高岡市市制100周年記念事業の一つとして市民約1500名のスタッフ・キャストにより公演された。越中万葉夢幻譚パンフレットによればこの野外音楽劇は見るもの演じるものに感動を与え、再演を望む多くの声が市民から起こり、高岡市の掲げる「万葉のふるさとづくり」の中核をなす事業として、毎年継続して行われるようになったという。また音と光によって歴史を語るソン・エ・リュミエール方式に当時の最新テクノロジーを駆使した音楽舞台劇であり舞台の広さ、出演者、技術などが野外の音楽劇の中では日本最大規模を誇る地域文化創造事業であった。この野外劇は主催者である財団法人高岡市民文化振興事業

団が運営にあたり、作曲家で音楽劇作家である藤本壽一氏とスタッフが運営への助言と制作監修を行うほか、年間にわたり劇団の指導を担当していた。限られた時間の中でハイレベルな作品を編み上げるためナレーションはプロの俳優が行ったが、他の参加者キャスト・ダンサー約1200名、スタッフ約300名は全て一般から公募した高岡市民であった。市民が主体となり、行政、中央を巻き込んだ越中万葉夢幻譚は日本で最も成功した市民文化活動として高く評価され、1994年に国土庁長官賞、サントリイ地域文化賞を受賞した。しかし、事業費の高さや事業のマンネリ化などの理由から、平成13年に行われた第13回越中万葉夢幻譚を最後に休止状態となっている。

2) 事業の存立基盤：人的基盤

先にも述べたように、越中万葉夢幻譚は財団法人高岡市民文化振興事業団が主催していた。そして藤本壽一事務所と市民約1500名がこの事業に参加していた。市民スタッフとしては過去の出演者やアマチュア劇団関係者などが中心となって演技指導を行い、衣装や小道具などの指示にあたる演出スタッフが年間を通じて越中万葉夢幻譚に関わる核となっていたが、仕事を持ちながら携わる市民がほとんどという条件下で、「万葉のふるさと高岡」を全国にPRするために絶対に維持しなくてはならないレベルに達するスタッフを育てるのが難しく、現実と理想が乖離していた面もあった⁷⁾。一つの音楽劇を作り上げていく中で人と人とのつながりが生まれたり、若い人が新しい発見をしたり、職場や学校では味わえない満足感を得られたからこそ市民が情熱を向けて継続して行ってきたが、アマチュアで毎年同じレベルを保つには相当なエネルギーが必要であり、専門性を持ち作品づくりに深く関わることのできる人的基盤が不足していた。

また、事業展開のマンネリ化が見られ、観客として野外音楽劇を支える人材も不足するようになっていった。万葉関連のイベントが他にも多くあったことや公演内容が毎年ほぼ変化なかったことから、休止間際の越中万葉夢幻譚の公演では全3407席中、2000席ほどしか埋まらない年もあったという。

3) 事業の存立基盤：財源的基盤

第1回越中万葉夢幻譚が行われた1989年はバブルの時代であり、全国各地に“文化振興事業団”ができ企業が活発にメセナに乗り出すなど日本全国で地方に文化を、という意識でみなぎっていた時代であった。その後バブルは崩壊し、日本経済は「失われた10年」と呼ばれる日本経済史最長の平成不況に入ると文化事業を縮小し打ち切る方針に入る地方自治体が多くあった⁸⁾。

高岡市でも越中万葉夢幻譚事業費の高さが課題となっ

単位：万円

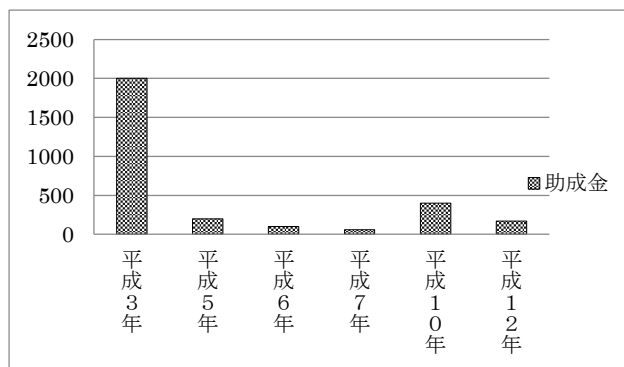


図3 越中万葉夢幻譚における文化財団からの助成金

資料：聞き取り調査ならびに財団法人高岡市民文化振興事業団

た。越中万葉夢幻譚事業費は例年8000万円前後であり、休止前最後となった第13回越中万葉夢幻譚での総事業費は7920万円、うち音源制作や仮設スタンド・舞台設営などの委託料が約6200万円であった。毎年高岡古城公園に“劇場”を設営するところから始まるため音響や照明機材などハード面にかかる費用が3分の2以上にもなっていた。市の補助金、各文化財団の補助金、入場料収入、広告収入など様々な財源的基盤は存在したが、年々演出を強化するため必要となる事業費が上がっていったのに反比例するように、日本経済の不景気により受け取る助成金が少なくなっていく。

3. 「万葉のふるさとづくり」の影響

「万葉のふるさとづくり」の2つの事業について聞き取り調査と資料収集を行った結果に基づいて、これらの事業が地域へ与えた影響、①観光、②高岡市民の万葉集に対する意識変化について考察する。まず①観光については「万葉のふるさとづくり」事業により高岡の知名度があがったということが挙げられる。以前は高崎市や高山市などに間違われることもあったが、「万葉のふるさとづくり」によって「万葉のふるさと高岡」として認識されるようになったことが高岡市の観光業にも影響を及ぼしている。特に、万葉集全20巻朗唱の会や越中万葉夢幻譚のような大きなイベントは全国の万葉愛好家が集まってくるため、観光業が盛んになり万葉集全20巻朗唱の会では、市内のホテルは県外から来た人で満室となる。大勢訪れる観光客のため、万葉集全20巻朗唱の会の開催に合わせて万葉故地巡りバスツアーを実施するなど観光面に力をいれている。また新幹線が開業したことによって関東圏から訪れる人も増えた。2017年春には新たに高岡にビジネスホテルが開業される予定であり、観光業のさらなる拡大が期待される。また頁数の関係上深く触れる

ことはできなかったが、万葉のふるさとづくりの中核である万葉歴史館もまた、単なる万葉学習センターではなく観光の礎となることを期待されている。万葉の愛好家の高齢化は年々進んでおり、万葉の新たなファンを増やすことが必要不可欠となる。「万葉集は高尚だ」と感じている若い人たちにも万葉集を身近に感じてもらえるよう、今年の夏には人気漫画とコラボした特別展を実施し、新規の来館者を増やすことに成功した⁹⁾。万葉歴史館を中心に万葉集の魅力を発信し、高岡に人を呼び込み、経済を動かすことが「万葉のふるさとづくり」事業へ良い影響を及ぼす。

次に②高岡市民の万葉集に対する意識変化である。今回の聞き取り調査でも「万葉のふるさとづくり」事業に関わる人から「高岡市民でも万葉集は難しいと考えている人がいる」という声を何度か耳にした。「万葉のふるさとづくり」事業は市民と行政の万葉集に対する意識の高さが求められるが、万葉集全20巻朗唱の会や越中万葉夢幻譚は万葉集への理解や愛着が深まるきっかけになっている。万葉集全20巻朗唱の会は万葉衣装の提供や、歌の詠い方を自由にするすることで、万葉集に親しみやすくなる工夫がなされている。「万葉集の恋の歌にときめいたり、万葉集に詠まれている高岡の美しい景色を楽しんだりして万葉集の学術的だけではない楽しみ方を見つけてほしい」と担当者は話していた。現在休止中の越中万葉夢幻譚でも万葉集への意識の向上は見られた。越中万葉夢幻譚はタイトルにこそ「万葉」の文言が含まれているが、実際の物語内容は「高岡の歴史物語」が軸であった。しかし公演を重ねるにつれ、「万葉のまちづくり」の一翼を担う事業として万葉や万葉時代の要素をもっと取り入れるべきという意見もでてくるようになったのである¹⁰⁾。越中万葉夢幻譚から得られる感動体験が、万葉集への意識を向上させたと考えられうる。

IV 結びにかえて―「万葉のふるさとづくり」の今後について―

今回の大巡検では「万葉のふるさとづくり」事業の変遷や存立基盤を明らかにし「万葉のふるさとづくり」がどのように地域へ影響を及ぼしたのかを考察した。「万葉のふるさとづくり」事業は高岡市が持つ貴重な歴史的・文化的遺産を活用した文化のまちづくり事業である。文化的なまちづくりは継続的に実施されることに意義があり、毎年繰り返され続けるためにはしっかりとした存立基盤が必要不可欠である。「万葉のふるさとづくり」の主な人的基盤は市役所の職員であるが、市役所は市長が変わるとその都度方針も変化していくため、安定した「万

葉のふるさとづくり」事業を継続して実施することが難しい状況にあることに留意しなければならない。「万葉のふるさとづくり」を主に担当する課や人が数年ごとによってゆくため、その都度事業のコンセプトがずれていく可能性がある。また担当する人によって「万葉のふるさとづくり」事業にどの程度力を入れるかも変わってくるため、高岡市民に「万葉のふるさとづくり」が根付くようになるのは難しいことである。現在高岡市役所は文化創造都市高岡推進ビジョン¹¹⁾を提言し、高岡の歴史的価値と商業的価値を結びつけたまちづくりを推進しているが、この中には越中万葉に関する具体的事業は含まれていない。文学を活用した文化的なまちづくり事業を行うにあたって、高岡のもう一つの売り文句である「ものづくり」のように目で見えて分かりやすいまちづくりを行うのが難しく、また数値化をするのも難しいという課題がある。「万葉のふるさとづくり」が高岡市に人的にも財源的にも依存している状況を考慮すると、高岡市が文化推進ビジョンで高岡から「越中万葉」という要素を手放してしまうということは「万葉のふるさとづくり」事業の終了を意味してしまうことになる。高岡市は大友家持が築いた万葉文化と加賀藩前田家が築いたものづくりの文化の2つの歴史的財産があることが強みである。「万葉のふるさと高岡」と「ものづくりのまち高岡」を融合させる基盤的役割を市役所が担い、高岡らしい独自性を持ったまちづくり事業へと展開してゆく必要がある。

謝辞 今回の大巡検においてお忙しい中聞き取り調査にご協力くださった高岡市役所生涯学習課の皆様、観光交流課の皆様、高岡万葉まつり実行委員会の皆様、万葉歴史館の皆様、財団法人高岡文化振興事業団の皆様本当に有難うございました。突然のお願いであったのにも関わらず貴重な資料をたくさん用意していただき心より感謝申し上げます。

注

- 1) 1988-09. 地方からの報告-54-富山県高岡市 万葉集のふる里づくりに励む越中の城下町. 月刊自由民主 426:212-215.
- 2) 万葉歴史館での聞き取り調査による
- 3) 第1回高岡万葉まつりは昭和56年9月に開催された.
- 4) うち一般339名, 中・高校生491人
- 5) 井口(1997)による.
- 6) うち男性用100着, 女性用100着, 子供用100着. 朗唱者約2200名がこの300着を交換して着回す.
- 7) 中日新聞2002年(平成14年)8月26日記事
- 8) 中日新聞2002年(平成14年)8月27日記事
- 9) 万葉歴史館聞き取り調査より. 特別展来館者の7割から8割が新規来館者であった.
- 10) 平成10年3月「越中万葉夢幻譚検討会議報告書」
- 11) 文化の振興および文化的な産業の強化により都市の活性化を目指す都市のありかた. “Art & Craft City 高岡”を指している. 平成26年3月提言化.

文献

- 筆者未詳 1988. 地方からの報告-54-富山県高岡市 万葉集のふる里づくりに励む越中の城下町. 月刊自由民主 426:212-215
- 井口貢 1997. 地域(経済と市民)と芸術文化の共生. 文化経済学会論文集 3: 1-3.
- 越中万葉夢幻譚検討会議 1998. 「越中万葉夢幻譚検討会議」報告書.
- 高岡市 1990. 高岡市市制100年記念事業記録誌.
- 高岡市万葉歴史館編 2007. 「越中万葉百科」笠間書院.
- 高岡市万葉歴史館編 2013. 「越中万葉をたどる」笠間書院.
- 高岡市役所経営企画部文化創造課 2015. 文化創造都市高岡推進ビジョン.
- 中日新聞 2002. 8月26日記事.
- 中日新聞 2002. 8月27日記事.
- 宮澤仁 2006. 福島県西会津町における健康福祉のまちづくりと地域活性化. 人文地理 58(3): 235-252.

高岡市における子育て環境の地域特性に関する一考察 —自治体、支援者及び当事者への聞き取り調査をもとに—

小原 尚子

I はじめに

2015年から本格的に施行された子ども・子育て新制度を受け「日本版ネウボラ」¹⁾と呼ばれる新しい子育て支援の取り組みが各地で急速に広まりつつある。現在では妊娠期から子育て期にわたるワンストップの支援拠点「子育て世代包括支援センター」も法定化された。これを全国自治体の母子保健事業の仕組みに確実に組み入れるため、児童福祉法の大幅改正および母子保健法等関連の法律の改正も本年6月に行われた。同様の施策である「健やか親子21(第2次)」の基盤課題・重点課題と目標にも「切れ目のない妊産婦・乳幼児への保健対策」として、妊娠・出産・育児期における母子保健対策の充実と各事業間や関連機関間の連携体制の強化、母子保健事業の評価・分析、切れ目のない支援ができる体制づくりがあげられている。各自治体はこれらの施策を実行していくにあたり、社会的文化的な地域特性を考慮し、地域課題に即した事業を展開していく必要に迫られている。

このように多様な支援サービスや各種施策を正しく把握し、個々の親子の必要に応じて適切に組み合わせて提供していくには、支援者側にも相当の専門的スキルが必要となる。また、保健所、産科などの医療機関や児童相談所、保育施設、子育て支援NPOなどの関係機関との連携・協力も欠かせないものである。

今回の調査地高岡市のある富山県は、女性の平均勤続年数全国1位(H27賃金構造基本統計調査)、保育所待機児童ゼロ全国1位(H27厚生労働省調査)である。以前、平野(2004)の東京と富山(富山市と高岡市)に住む母親を対象とした調査によると、富山・高岡は、親との同居率、近居率が高く、保育所待機児童率ゼロ、客観的には恵まれている地域であるが、働く女性はM字型就労を希望する割合が高く、育児・世帯収入を得る目的や、加えて親との同居(うち7割以上が義親)が理由で働きに出る、という、働くモチベーションにおいて東京との差がみられていた。さらに、富山・高岡では夫の育児参加の程度が東京と比べて低く、性別役割分業意識が強く残っている、と述べられていた。12年前ではあるが、東京都と富山県の地域差を育児

不安の関連要因をもとに明らかにした研究である。ここでいう地域差とは、物理的側面のみならず、文化的側面と社会的側面から構成される地域特性のことであり、そこに住まう先人から伝承される規範も少なからず影響していた。地域のもつ特性が子育て世代の子育て観に影響を与えるならば、その子どもたちにも規範が伝承されることになる。現代の富山県における子育て世代は自らの居住する地域の子育て環境についてどのように認識しているのだろうか。

本稿では高岡市の行政側、市民側の施設担当者と子育て当事者への聞き取りから、高岡市の子育て環境にかかわる地域特性について考察する。

II 対象地域の概要

高岡市は本州のほぼ中央、日本海に面する富山県北西部に位置し、人口174,492人(H28年3月末)の富山県第2の都市である。北は氷見市、南は砺波市、東は射水市、北西は石川県、南西は小矢部市に接している。近世以降の文化財、建造物が多く、県内唯一の国宝瑞龍寺がある。高岡銅器や高岡漆器は高岡を代表する伝統産業で、藩政期以来の歴史の中で受け継がれてきた。「ものづくりの技と心」が今なお継承されている。

III 調査対象

本調査では高岡市子ども・子育て課(市役所内)、高岡市健康増進課(高岡市保健センター内)、市内2か所の子育て支援センター(高岡、福岡)、ファミリー・サポート・センターにて資料収集および施設長や各担当者への聞き取り調査を行った。子育て支援センターでは利用者への聞き取りも行った。保育施設Aでは園長と保護者に、市民団体Bでは代表者及びスタッフに聞き取り調査を行った。

IV 妊娠期から子育て期における高岡市の取り組み

1. 母子保健事業における特徴

高岡市健康増進課は市役所内ではなく、本丸町にある保健センター内に配置されている。妊娠すると最初にこちらに出向き、保健師から直接手渡しで母子保健手帳が交付さ



図1 高岡市概要

(出典 H27高岡市)

れる。母子手帳は5か国語に対応。施設内では乳幼児の定期健康診査や保健師による育児相談を行っている。また保健師による家庭訪問のみならず、母子保健推進委員という市長から委託されたボランティアも生後7ヶ月を迎える家庭を訪問し、虫歯予防や事故防止、予防接種について声かけをしている。施設内では定期的に母子保健推進委員による離乳食講座や親子のふれあいの場を提供している。産後ケア事業も行っており、助産院3ヶ所と提携し、デイケア、訪問ケアの両方のサービスを助産師から受けられる(産後3ヶ月未満等、条件付き)。また、妊娠期から子育て期にわたる行政サービス情報をWEB及びスマートフォンアプリで配信している(ねねネットかおか)。

1) 高岡市健康増進課の保健師への聞き取り

保健事業のなかで、母子保健・予防接種担当が母子保健全般を担当している。母子手帳交付時に対面会話及びアンケートを行っており、産前産後における個人的な支援の有無を保健師の立場から確認している。妊婦検診受診率は97%で市政の中でも高い方である。里帰り出産の場合も他市の保健師に連絡をし、協力体制を築いている。産後ケア事業においては妊婦の高齢化に伴い(高岡市の出産平均年齢35歳)、出産育児と親の介護というWケアにも対応できるようにしている。健康相談室や育児相談室は予約の必要なく、身長体重を測るだけでもいいので気軽に立ち寄れるようにしている。出産後はこれまでの交流関係が変わってしまう母親が多いが、各種講座に参加することで仲間づくりにつながっている。母乳育児相談、3カ月健診、家庭訪問を行うと共に、健康増進課での事例検討会を実施、その際には子ども・子育て課(保育所、子育て支援センター、児童館)と連携して支援を続けることもある。保健センターの保健師は各保育園をまわり、幼児の健康状態についての相談や観察を行っている。同時に若い世代の健康検査(19~39歳)にも力を入れており、幼稚園や保育園に通う子育て中の母親にも受診を働きかけ成人の健康指導にも力を

入れている。保健センターの保健師は年間1万人以上の親子を見てきている。誰が面談しても同じ判断ができる。富山県は以前90か所で母子手帳を交付していたが、現在は7か所に集約し、事務職からではなく全て保健師の対面式で交付するようにしている。夫婦で来訪される方も多く、夫のサポートの重要性については必ずお伝えするようにしている。

2. 高岡市の保育施設の概要

H28年4月1日での市内在住の乳幼児数(0~5歳)は合計7,282人(内外国人146人)である。高岡市子育てガイドブック(H28年3月発行)によると、子育て支援拠点は6か所(うち子育て支援センターは高岡と福岡の2か所、4か所は児童館および児童センター内に開設/伏木、野村、西部、戸出)である。また市内の幼稚園は私立幼稚園のみで7か所あり、認定子ども園(幼稚園と保育所の両方の機能をもった施設)は市立が1か所(合計定員85人)、私立が5か所(合計定員846人)である。市立保育所13か所(合計定員1,160人)私立保育所26か所(合計定員3,080人)は全て認可保育園で、認可外保育施設は2か所のみである。病児保育施設は病院内に1か所あり、生後9週から小学4年生までが対象であり、放課後児童クラブ(学童)は29か所で開設している。牧野にH30年に向けて保育園を1か所建設する予定である。

1) 子育て支援センターでの聞き取り(高岡・福岡)

高岡子育て支援センターは市内中心に位置し、商業施設(御旅屋セリオ8F)にある。街の地域活性化の一環としてH23年に移転した。開設約半年で1万組を達成し、H26年に増設、H27年には一時預かり事業を開始した(職員は正規職員3人、非常勤職員9人、看護師2人、うち子育て経験者は11人)。利用者との関わりでは「お子さんと一緒に過ごしてもらう中で、お子さんの発達や姿について気軽に話し相手になりながら利用者の方がどんなことに悩み、困っているのかを汲み取ったり、見守ることを大切にしている。看護師、保健師、保育士などの専門的な立場からアドバイスできるように、専門技術の習得を図ることを大切にしている」とのことであった。利用者の傾向として、商業施設内にあるため土日は市外利用者が多い傾向にあり、お盆や年末時期は県外からの利用も多い。土日は父、母一緒に来所する方が多く、平日は祖父母の利用もある。H28年7月の利用児童数は累計1,904人(うち0歳児と1歳児が1,386人)、保護者は母親1,502人、父親183人、祖父母140人であった。育休中の母親の利用(0歳、1歳児)が多いため、近年は0歳児の利用を対象とした育児教室の種類を増やして開催している。また、2歳児以上の利用者はリビ

ーターが多い。利用者の相談としては特に離乳食や授乳といった食事や発育・発達に関する内容が多く、自分の子育てに対する答えを求める傾向が強い。保育士は「子育てに自信を持ってもらえるようなアドバイスを心がけている」と話していた。聞き取りを行った利用育児休職中かつ保育園入園前の0歳児の母3名は「センター利用で1時間無料駐車券があるので利用する」「利便性が良く、施設が清潔で広く使いやすい」「雨の時は必ず利用する」といった答えが多く、専業主婦で2歳児の母は「日常的に通っているが、子どもが良く動くようになってからは車で郊外のショッピングモール、市外の公園やレジャー施設へ行くことの方が多し」との意見があった。車移動が生活の中心であるため、高岡子育て支援センターもその移動範囲内であることが利用する理由であることも語っていた。県外出身、高岡出身にかかわらず、聞き取りを行った母親4名は「高岡は子育てしやすい街だと思う」と答えた。

一方、福岡子育て支援センターは、中心部から離れた高岡市役所福岡庁舎や総合文化施設内（健康センター）の一角で活動している。施設長を含めてスタッフは3名で、保育園入園前の親子の時間をゆったりした気持ちで子育てしてもらえるように心がけている。利用者は0歳児、1歳児とその母親が多く、普段はほぼ福岡在住者のみが来所している。センター内は飲食禁止のため、午前中センターで過ごし、一旦自宅に戻り、昼食と午睡を済ませて、午後から再度センターに来所する母子も多い。夏休み等の長期休暇になると、射水市や小矢部市といった市外からの実家帰省で福岡に戻ってきた母親が来所する。「スタッフとは顔なじみで、近所のおばあちゃん的存在である」と利用者の一人は語った。育児教室開催や健康相談などの行政のイベント開催、配布物等のハード面での支援内容については高岡支援センターと同様である。

2) ファミリー・サポート・センターでの聞き取り

高岡市ファミリー・サポート・センターは公益財団法人たかおか女性アカデミーが運営している。当財団は、(財)高岡市婦人生活研究所として発足し、高岡市内在住ならびに勤務する女性に、生活に関する調査研究と生活合理化の普及・援助、生活と文化の向上、教育の振興に寄与するなど、45年の歴史がある。平成17年7月からセンターの運営を市から受託、高岡市の子育て支援プラットホームづくりの推進を協働している。平成21年、名称を財団法人たかおか女性アカデミーと改称し、『地域・女性でつくる共創のまち・高岡』をスローガンに、地域に根ざした活動を展開している。例えば、たかおか女性アカデミー（高岡市ファミリー・サポート・センター）主催で、子育て支援ネットワーク講座（子育てサロン）を開催し3年目を迎える。市

内の放課後児童育成クラブ（以下学童）、母子保健推進委員、自治会、社会福祉協議会の協力もあり、2016年は4地区での開催を予定している。8月末の時点ですでに3地区の保育園内で開催済である。高岡ファミリー・サポート・センターでは、仕事や家庭の都合で子育てをして欲しい人（依頼会員）と子育てを手伝いたい人（協力会員）がそれぞれ登録し、依頼会員から援助の依頼があれば協力会員が育児を援助・サポートするよう仲介を行う。子どもを預かる場所は協力会員宅・依頼会員宅・当センター託児室などで、預かり対象の子どもは1ヶ月児～小学6年生までである。7地区に区分された中で、基本同じ地区内の協力会員を紹介する。軽度であれば病児保育も受け入れている（依頼会員632名、協力会員237名、両方会員51名：平成28年7月31日現在）。また、昨年度からの一年間で依頼会員数が約100名近く増加した。11年目に初めてのことである。地区別でみると第3地区（定塚、下関、野村、二塚）の依頼会員数229名と最も多く、次いで第4地区（伏木、能町など）の119名で高岡市東部に集中している。依頼会員登録者は常勤職、パートを問わず、仕事をもつ母親であり、小学生のいる家庭の依頼が圧倒的に多い。依頼内容については学童終了後の子どもの預かり、学校の放課後の子どもの預かり、学校から自宅への送迎、学童から自宅への送迎、子どもの習い事等の援助が大部分を占める（表1）。その際の送迎は協力会員の自家用車での移動が主である。協力会員は50代前半から70代の女性で、母子保健推進委員や自治会など、地域のボランティア活動を兼務している女性が多い。協力会員になるために保育士等の資格は必須ではないが、子育て経験者というだけでなく、子育て支援の一員として研鑽をつみ、協力会員自身の保育の質を高めるため、2016年9月から協力会員登録者を対象とした研修講座（全5日間講習）を開始する。官民学から講師を招き、全講座修了者には認定証を授与する。

V NPO法人・市民活動の取り組み

1. NPO法人幼稚園型保育施設Aでの聞き取り

NPO法人が運営する幼稚園型保育施設Aは、高岡市では数少ない認可外保育施設である。聞き取り調査時点（2016年8月29日）での生徒数は27名（年長6名、年中5名、年少6名、2歳児9名、1歳児1名）の25家族で、教員は園長を含めて4名である。親と教員が協力して園を運営している。保育内容は縦割りで、モンテッソーリ教育を取り入れている。また、子どもたち3～4人の縦割りグループづくり、1～1ヶ月半ごとにメンバーを変えてコミュニケーションを図っている。

表 1 主な年間依頼内容 (合計依頼件数 1,640件中)

平成27年度 主な援助活動内容	件数
①保育施設の保育開始前や終了後の子どもの預かり	16
②保育施設までの送迎	73
③学校の放課後後の子どもの預かり	398
④学童終了後の子どもの預かり	412
⑤買い物、外出の際の子どもの預かり	64
⑦その他	
・小学校から自宅への送迎	383
・学童から自宅への送迎	33
・子どもの習い事等の援助	196
・保護者の急病や急用の場合の援助	54

(ファミリー・サポート・センター配布資料より筆者作成)

1) 園長への聞き取り

通常の保育は教員が行うが、保育目標については親が主権、教員はアドバイスをするというスタンスであり、昭和52年創立から変わっていない。子どもたちが主人公であり、親たちは園の中心的存在である。家族がいつでも園に自由に入出入りすることができ、保育・指導にも参加できる。親は、我が子も他の子も同様に、全ての子がより良く成長するために、子どもに体験させたい、学ばせたいと思うことを教員と協力し、実現していく。親たちと教員たちが、自分の経験や知識を出し合い、理解し合いながら信頼を深めている。子どもだけではなく、親も学び育つ貴重な活動の場になるように努めている。園の活動に日常的に参加しているのは母親であるが、父親の参加率も高い。イベントや行事も親との話し合いによって決定しており、率先して協力している。毎月1回1時間～1時間半ほど親とのミーティングを開催している。フルタイムで勤務する母親もいるため、時間帯も考慮して決めている。園児の居住地は高岡市内のみならず、小矢部市、射水市、遠方は富山市から通園している。園は高岡市中心部にあり、もともと木材屋の敷地跡であった。現在は住宅地に囲まれているが、売りに出された当時は工場や長屋に囲まれた場所であった。現在の高岡中心部はドーナツ化、少子高齢化が進んでおり、ご近所も高齢世帯であるため、やさしい会に招待する等、ご近所つきあいには普段から気を配っている。母親は車送迎をするため駐車場の敷地も確保している。また毎週水曜日は地域の未就園児の会を開いており、予約なしで参加できる。

2) 保護者への聞き取り

座談会形式で6名の母親にお話を伺った。母親の背景は県外から結婚して高岡に移住している方、高岡で生まれ育ち、一度大学等で高岡を離れ、結婚後（出産後）高岡にU

ターンした方、高岡市から出たことがない方、さまざまであったが、全員が口をそろえて「高岡は子育てしやすい」と答えた。医療費も子どもが中学生まで無料であるといった行政のサポートにも好評価であった。園については「保育園はいっぱい30人に1人の先生というのは質的にどうなのか」という疑問の声もあった。園と教員と運営することについては、「最初は別の幼稚園へ子どもを通わせていたが、高岡市の幼稚園は早期教育に偏っている園が多く、疑問を感じ、子どもの無理をしているようだったのでA施設に転園した」「働きながらでもできる範囲内で園に協力している」「冷暖房が壊れた時は歴代の卒園生からの寄付で補えた」「遠足場所も親が決められる。例えば食材のできる過程を子どもにみってもらうため養鶏場や牧場への希望を出し、先生が連れて行ってくれた。年長だけでの登山やお泊まり保育、星空観測など、年齢に即した保育を提供してもらえる」「義理両親からこの園をすすめられた。夫も卒園している。義理両親はずっと働いており、自分たちは子育てに専念できなかったから、子どもが小さいうちは働かなくてもいい、と嫁（私）が子育てに専念することを応援してくれている」などの意見があった。

2. 子育てひろば主催団体への聞き取り

代表者は高岡市出身で保育士資格をもつ元幼稚園教諭で自身も2歳の乳幼児をもつ子育て当事者である。「子育て」「保育」の社会的評価を高めたい、という理念のもと、2015年から富山市を中心に高岡市等でひろば型子育て支援、イベント、託児を行っている。代表者、スタッフともに共働きの両親の元、幼少期を祖父母に育てられた経験をもつ。代表は幼稚園教諭として勤務しながら、現代の母親たちと祖父母世代の育児観の違い、保育の質といった子どもの環境と保育者の社会的地位の両側面に目を向けている。各地域で子どもを同伴でき、広さも担保されたカフェスペースを利用し、既成の玩具は使用せず、創作中心で子どもも母親も自由に遊びが展開できるひろばを開催している。大きなイベントを行う際にはクラウドファンディングで寄付を集い、東京の市民団体との協賛で富山市において支援イベントを開催する等、地域活動に広く貢献している。代表は「イベントへの参加者は核家族かつ専業主婦とその子どもが多く、なかには保育園に入れなかった家庭もいる。参加者から育児相談を受けることもあるが、“まだ大丈夫”と自分で何とかしようとする傾向があり、実際に行政の窓口相談を利用していない人が多いように感じている。（私たちへの）相談内容も育児に対して確実な答えを求める傾向ある。理屈ではなく子どもたちと一緒にまずは母親が遊びを体感し、自ら楽しんでもらえるような遊び

の場を提供したい。」と胸のうちを語ってくれた。

ひろばへの参加者は専業主婦が多い。彼女たちもまた祖父母世代が現在も共働きであることが多く、両親(祖父母)に子どもを預かってもらうことが困難な場合が多い。富山は女性の就業率は高いが、夫が育児に日常的に参加することも少なく、男性も女性も20代で結婚し、家を建てて一人前とみられるような保守的な側面が未だにある。富山市、高岡市では近年郊外に新興住宅地ができたことから、今後ますます核家族化が進んでいくであろうことを彼女たちも示唆していた。

VI 考察

本調査は文献および現地での聞き取りを中心としているが、現地滞在期間が5日間と限られた時間であったため、発達支援、障がい等、特別な支援を必要とする児童を見守る家族と支援者からの聞き取りは含まれていない。そのため、高岡市の子育て環境全体を包括して調査したとは言い難い。しかしながら、今回の聞き取り調査で子ども子育て課、健康増進課といった関連部署では支援に必要な情報を丁寧に共有し、適切な援助体制を構築した事例もあり、当事者への配慮を考えて既存制度との整合を図っていることが窺えた。また、ファミリー・サポート・センターをはじめ、母子保健推進委員や自治会といった地域市民による活発な活動が、地域の人が地域の子育て世代を支えており、その支援体制は10年以上前から行われているが、現在は市民が支える保育の質をも強化しようとする試みが行われていた。国の打ち出す「日本版ネウボラ」の内容を網羅した制度、保健分野と保育分野の施設は別であるものの、両方で支援する市民ネットワークが広く活用されていることが高岡市の地域の特徴である。

現在の高岡市における子育て世代の傾向としては、専業主婦や核家族世帯が増加傾向にあり、先行研究や文献等でみられた3世代同居率も減少傾向であることが、当事者ならびに支援者双方の語りの中からも明らかに出てきた。祖父母世代(50代後半から60代)は子育て期から現在まで共働きが多く、母(実娘や嫁)は子どもを家族に日常的にみってもらう環境が昔に比べて少なくなっている。また、実際に義理母から「子どもが幼少期の間は子育てに専念したかったら(専業主婦になって)子どもたちの傍にいてあげてもいいのよ」と言われたことのある母親が数名いた。祖父母世代のなかには自分たちが若い頃、3世代同居かつ共働きで子育てに専念できなかった想いを伝えており、またその子どもである今の子育て世代は「おじいちゃん子、おばあちゃん子」だった時の幼い頃の想いから、専業主婦を希望して選択するきっかけとなっていた。

子育て世代の女性の働き方に変化が見られるようにも見えるが、実際には高岡市中心部から離れた新興住宅地では保育園入園希望者は増加しており、2年後には新たに増園予定もある。少子化傾向にあり、将来的には建物だけが残ってしまうという懸念もあるなか、「まずは市民のニーズに応えたい、今の子どもたちを待機児童にしない」という行政の方針がみてとれる。これまで保育園を全て認可で運営し、継続して保育環境を整えてきた高岡市の強みであり、特性ともいえる。

今後は保育園と幼稚園の機能をあわせもつ認定こども園への統合も検討されており、家族の働き方や生活に応じて保育時間を決め、子どもを預けることが高岡ではより可能となる。核家族化が増加傾向にあるなか、これまで与えられきた公的保育支援や属する保育環境・地域について、子育て当事者自身がより一層意識を向けることが課題であると考ええる。

子育て環境の評価について、待機児童率ゼロというような数値的な側面だけでみるのではなく、その地域の特性に焦点をあてることも必要である。大人だけでなく、そこで育つ子どもたちの環境の評価にもつながる重要な視点である。

VII まとめ

高岡市においては母子保健事業、子育て支援事業ともに高岡市管轄の別施設で、それぞれの専門を活かし、当事者ニーズに沿った支援に取り組んでいた。必要に応じてお互いが情報を共有し、包括的な支援体制を築いている。産後～育児支援においては、母子保健推進委員という市民による地域ボランティアの力が多く活かされていた。高岡で醸成された祖父母世代による地域ボランティアは、妊娠期から子育て期にわたり多くの母親たちを支援し、今の高岡の子育て環境の力となり、地域の特性となっている。核家族化が進む高岡市でも、ひろば型子育て支援やNPO法人の保育活動は、母親個人の生き方や各家庭の子育て方針に対応する場にもなっていた。

注

- 1) ネウボラとは・・・フィンランド語で“ネウボ(neuvo)＝アドバイス”“ラ(la)＝場所”という意味。妊娠から出産、子どもが生まれた後も基本的には6歳まで切れ目なくサポートを提供する総合的な支援サービス。フィンランドでは、どの自治体にも「ネウボラ」という子育て支援を行う施設がある。ネウボラには保健師や助産師がおり、ネウボラで支援をするための特別な教育も受けている。

謝辞 本調査実施にあたり、快くご協力していただいた高岡市福祉保健部子ども・子育て課保育・幼稚園室主幹 坪坂真弓様、高岡子育て支援センター所長 立浪千恵様、福岡子育て支援センター所長 中谷純子様、高岡市福祉保健部健康増進課 嘉指美徳様、(公財)たかおか女性アカデミー代表理事 辻やす子様、A幼稚園園長ならびに保護者の皆様、子育てひろば主催団体の代表ならびにスタッフの皆様、子育て支援センターでのインタビューにお答えくださった子育て中のお母様方、皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

文献

- 久木元美琴・由井義通・若林芳樹 2014. 郊外NP0による子育て支援施設の役割と可能性-高蔵寺ニュータウンのひろば型拠点を事例として-. 都市地理学 9, 78-87.
- 平野順子 2004. 育児不安の関連要因にみられる地域差-東京都杉並区と江戸川区, 富山県富山市・高岡市を対象として-. 家族関係学 23, 38-48.

富山県高岡市における多文化共生 ー外国人児童生徒に対する学習支援の現況と課題を中心にー

崎濱 奏子

I はじめにー多文化社会の背景

本報告は、高岡市における外国人住民を取り巻く現状を確認し、彼／女らが困難に直面した際にどのような支援を受けることができるのか、また、どのように対処することができるのかを明らかにするとともに、外国人児童生徒に対する支援のあり方について、高岡市を事例にして報告するものである。

グローバル・マイグレーションの時代と言われる今日、急速に進んだグローバル化と国境を越える人々の移動により、日本の多文化状況は拡大しつつある。オールドカマーと呼ばれる韓国籍、朝鮮籍、中国籍（台湾籍を含む）の人々に加えて、ニューカマーと呼ばれるブラジル籍、ペルー籍、フィリピン籍、タイ籍、ベトナム籍など南米やアジア諸国からの外国人の増加及び長期滞在化・定住化により、日本の各地に新たなエスニック・コミュニティが誕生している。

法務省によれば、2015年末現在における在留外国人の数は、中長期在留者¹⁾と特別永住者とを合わせて223万2189人であり、前年末に比べ、11万0358人（5.2%）増加した²⁾。山根（2013）は、このような在留外国人の増加の背景にある国の政策を、その性質によって以下のような4種類に分類している。

第1に難民受け入れであり、特にベトナム戦争後のインドシナ（ベトナム・ラオス・カンボジア）難民の受け入れは1995年まで続き、およそ1.4万人が日本に到着した。近年ではミャンマー難民の受け入れが行われた。

第2に教育関係として、日本で学ぶ留学生や、小学校・中学校・高等学校で語学指導に従事する外国語指導助手（ALT）、地域において国際交流活動に従事する国際交流員（CIR）、スポーツを通じた国際交流活動に従事するスポーツ国際交流員（SEA）を挙げている。

第3には中国帰国者及び日系人関係とする。1972年の日中国交正常化による中国からの帰国者や、1990年の出入国管理及び難民認定法（通称「入管法」）改正による日系人の来日などである。入管法の改正で日系3世までは定住・就労することが認められるようになったことで、

ブラジルやペルーから主に労働目的での来日が増加した。

第4は実習生・看護師・介護士関係であり、技能・技術・知識の習得、また中小企業、第一次産業の従事者や、医療従事者の人手不足解消から、1993年に技術実習制度が発足した。

これらを背景に、日本の多文化社会化が顕在化している、それが外国人児童生徒の増加にもつながっていくのである。母国で学校教育を受けてから来日するバイリンガルの子どもや、日本で生まれ育った言語文化的多様性を持つ子どもは、どのような困難を抱えるのか。それらを解消あるいは低減するための支援はどのように行われ、今後どう変化するのか。また、母語・母文化と日本語・日本文化の狭間で生きる彼／女らを育てる上で、保護者はどのような困難に遭遇し、どのように対処することができるのか。本報告では、これらの問いについて、高岡市の実践を通して考察する。調査方法は先行研究及び資料による分析と、高岡市内での聞き取り調査及び参与観察である。聞き取り調査は、2016年8月28日から同年9月1日まで市内に滞在し、高岡市役所、高岡市を中心に活動する日伯交流ボランティア団体「富山日伯交流友の会」代表・副代表、高岡市内の外国人中学生・高校生に学習支援を行う市民団体「アレッセ高岡」代表及び講師4名に対して、半構造型のインタビュー形式で実施した。

なお、本報告では「外国人児童生徒」を「日本の学校に通う外国人の子ども」を指す言葉として用いている。同様の表現として「多文化の子ども」、「外国につながる子ども」、「多様な文化的背景を持つ子ども」など多様な呼び方があるが、ここでは、それらとほぼ同義のものとして「外国人児童生徒」を使用する。また、同地域に居住する外国人、例えば彼／女らの保護者などを「外国人住民」と呼ぶ。

II 高岡市における外国人住民の現況

1. 高岡市の概要

高岡市は、富山県北西部に位置する県内第2の市である。加賀藩主前田利長が築いた高岡城の城下町として発展し、高岡城の廃城後は商工業都市として発展した。伝

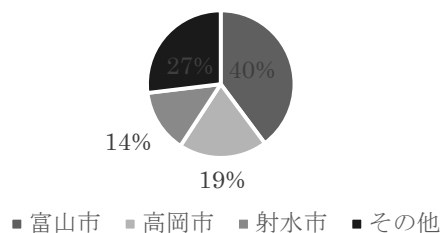


図1 富山県の外国人登録国籍別人員の割合
(富山県国際課)

表1 高岡市の外国人登録国籍別人員の推移

	総数	ブラジル	中国	フィリピン
H17	2,967	1,897	421	314
H18	3,139	1,984	556	250
H19	3,282	2,008	626	271
H20	3,356	1,953	758	279
H21	3,263	1,846	781	269
H22	2,880	1,516	742	268
H23	2,871	1,442	736	323
H24	2,858	1,345	728	355
H25	2,619	1,094	713	332
H26	2,478	983	713	269

(高岡市市民課)

表2 富山県3市の外国人登録国籍別人員 (H27)

市名 総数	富山市 5,426人	高岡市 2,645人	射水市 1,893人
ブラジル	239 4.4%	958 36.2%	353 18.6%
中国	2,310 42.6%	726 27.4%	320 16.9%
フィリピン	641 11.8%	312 11.8%	343 18.1%
朝鮮・韓国	679 12.5%	102 3.9%	71 3.8%
ベトナム	473 8.7%	233 8.8%	90 4.8%
パキスタン	96 1.8%	51 1.9%	336 17.7%
ロシア	247 4.6%	36 1.4%	160 8.5%

(富山県国際課)

統工芸の高岡銅器に代表される鋳物の生産が盛んで、豊かな水と電力を背景にアルミニウム工業も発達している。

高岡市の外国人住民数は、住民基本台帳上の外国人住民数によると、2645人（現在）であり、これは富山県内の市町村において二番目に多い数である。県内で外国人住民数が最も多い富山市、人口に占める外国人住民の割合が最も高い射水市と合わせ、この3都市で県全体における外国人住民数の7割以上を占有している（図1）。だが、この3市における国籍別の居住状況は大きく異なっ



写真1 高岡市内のある団地のゴミ捨て場

（ゴミ捨てのルールについて「違反」「逮捕」「監視カメラ」とインパクトの強い表現を用いた警告看板が設置されている様子。多国籍の住民が共に暮らす際、ゴミの分別に関するトラブルが持ち上がることは少なくないが、高岡市もまた例外ではないようだ。市によると、このような看板は住民ら自らの取り組みによって設置されているものである。日常空間

ている。富山市では中国国籍者が半数近くを占めるのに対し、射水市ではブラジル国籍者が多く、またパキスタンやロシア国籍者が他の地域に比べて多い。高岡市は、射水市同様にブラジル国籍者が多く、その数は県内最多であるとともに、外国人住民全体に占めるブラジル人の割合も県内で最大となっている（表1、表2）。

2. 行政による外国人住民に対する支援の現状と課題

ここでは、高岡市役所、及び市民団体日伯交流友の会での聞き取り調査に基づき、高岡市における外国人住民を取り巻く状況について報告する。

現在、外国人住民に対する行政による支援は、市民生活部共創まちづくり課多文化共生室が中心となっているが、高岡市で初めて国際交流を担当する係が設置されたのが1977年のことであった。1994年に「国際室」となり、2015年に現在の「多文化共生室」へ名を変えた。外国人住民も日本人住民と同じ高岡市民として捉えるという意図から、市民生活部に設置されている。

市の広報紙「たかおか市民と市政」Takaoka Shimin to Shisei」は英語、中国語、ポルトガル語の3ヶ国語で提供されており、生活ガイドブックやゴミ分別の案内など生活に必要な情報を外国人住民に届けている。こういった外国人住民に向けた資料をどこで入手できるかについては、高岡市のホームページにアクセスすることで知ることができる。「ホーム>暮らし>外国人市民向け」のページには、英語、中国語、ポルトガル語の3ヶ国語で、資料の配布場所や問い合わせ先などが掲載されている。

一部の資料はPDFデータとして手元にダウンロードし、即時的に情報を得ることができる。

また市は、外国人住民へのサポートに関する新たな試みとして、2016年夏から試験的にフェイスブックの運用を開始した。これは外国人住民のインターネットの普及を背景に、有事の際、すぐに情報を求めることができる場所としてフェイスブックを利用してもらうことを期待して開始したものである。平常時は、イベントの告知などの関心を得やすい情報の発信を中心に行っており、まずは情報源としてのフェイスブックで認知度を高めることを目的としている。

市の相談体制としては、市庁舎1階において外国人住民を対象とした生活相談コーナーが設けられている。生活相談コーナーの担当者によると、税金関係や、外国人登録、戸籍関係、児童・子ども手当などについての問い合わせが多いほか、日本人から地域の外国人との対応について相談を受けるケースもあるという。市役所職員によると「市役所で午後に相談コーナーをやっているということはもうだいぶ浸透している」といい、実際に生活相談コーナーにおける相談件数の推移を見ると、2006年から2010年の5年間で外国人登録者数は約3000人で推移していたにもかかわらず、相談件数が約500件からその4倍以上に増えたことから明らかであろう。この相談コーナーはポルトガル語（平日）と中国語（水曜日のみ）で運用しているのが現状で、よりサポートを厚くして相談体制を強化していくことを課題としている。

また、今後重点的に情報を発信していくべき分野として、防災が挙げられる。富山県は全国でも地震の少なさではトップを争うほどであり、住民の防災に対する意識は決して高いとは言えないそうである。2011年に発生した東日本大震災の教訓を踏まえて、より防災意識を向上させなければならない。新潟県中越地震（2004年）や能登半島地震（2007年）などを経験してきたこの地でも警戒を怠らず、日頃からどのように対策を行い、有事の際にはどのように行動すれば良いのかなど、防災に関する情報を効果的に発信していくことを課題としている。

Ⅲ 高岡市における外国人児童生徒の現況

ここでは、高岡市役所、及び市民団体アレッセ高岡での聞き取り調査に基づき、外国人児童生徒の置かれた現状について報告する。さらに、支援の現場の実例としてアレッセ高岡の活動である「学習支援教室」への参与観察の成果についてまとめ、報告する。

1. 教育をめぐる問題

文部科学省の調査「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成26年度）」によると、富山県内の日本語指導が必要な外国人児童生徒数は296人で、都道府県別で18位である。また日本国籍で、同様に日本語指導を必要とする児童生徒数は41人である。従って、富山県は比較的外国人児童生徒数の多い県であると言える。市役所職員及び市民団体日伯交流友の会によれば、富山県が製造業の盛んな地域であることに加えて、現在日系外国人の定住化が進んでいることが背景にある。高岡市の外国人児童生徒の在籍数は県内市町村の中で最多であり、200名前後で推移している。国籍別で見ると当初からブラジル人児童生徒が多く、現在も7割を占めているが、近年では出身国や母国語の多様化が見られ、フィリピン、パキスタンなど約10カ国に及んでいる。富山県多文化共生推進プラン改訂版（2010年）によると、高岡市内の外国人児童生徒数に占める、日本語指導が必要な児童生徒の割合は7割を超える。

日本語を母語としない子どもが直面する学習での困難は小学校に入学した時点から始まり、小学校や中学校の段階で中退してしまう例もある。日本人児童生徒と異なり、小学校・中学校が義務教育でない外国籍の子どもは、学習での困難に突き当たった際に法によって守られることなく、学校からドロップアウトしてしまうのである。これが将来的に深刻な就業問題へと繋がる上、さらに次の世代へ連鎖する危険性もはらんでいる。富山県においては、射水市で2008年に実施された学齢期の子どもの不就学調査の結果、小学校の就学率94.4%、中学校の就学率82.6%と、それぞれ5.6%、17.4%の外国人児童生徒が不就学の状況にあることが明らかになっている。

このような状況のもと、高岡市の学校現場では加配の常勤教員や外国人児童生徒の母語を話せる外国人相談員（外国人支援員）が、1997年より配置され（富山市では1993年）、児童生徒に対する日本語指導及び教科指導、翻訳・通訳等の対応が行われてきた（平成27年度配置人員：ポルトガル語対応8名、中国語1名）。日本語指導が必要な児童生徒を市が計算し、必要数の支援員・相談員を配置する。しかし、日本語指導が必要な外国人児童生徒が1校につき数名という状況であり、各学校に散在する子どもたちへの支援は、外国人相談員の巡回という形では効率がよいとは言えず、不十分と考えざるをえないのが現状である。また、外国人相談員はその語学力を基準に選出されることが主であり、日本語指導や教科指導の高いスキルを必ずしも要求するわけではない。そのため、日本語指導、教科指導、翻訳・通訳、保護者対応など、ニーズは様々であるにも関わらずその多様なニーズに一

律に対応しようとしていることでひずみが生じているのではないかと指摘がある。

高岡市では隔週土曜日に、日本語指導・母語保持教室を実施している。母語保持教室については、在籍数の多いブラジル人児童生徒へのポルトガル語を対象とする。日本での生活が長期化した児童生徒、また日本生まれの児童生徒が増加しており、そういった子どもは家庭内で保護者と母語で会話することを通して生活言語を身につけるが、読み書きは十分にできないことも多い。また、何らかの理由で母国へ帰国した場合に、母国語の習得が不十分なために母国での就学に支障をきたすケースを考えると、日本語指導のみならず、子どもたちの母語保持のためのサポートもまた不可欠である。このような市による学習教室が利用者のニーズに引き続き応えていくためには、様々な背景を持って暮らす子どもたちのニーズを適切にすい上げる必要がある。

また、日本語での日常会話に支障がなくても、学習用語の習熟度が低いことで、学校の授業についていけなかったり、母語教育での学力を問いたくても、そもそも母語での教育を受けていなかったりと、日本語も母語も十分に使えず、どちらの教育も満足に享受できない子どもたちもいる。対面での日本語会話がどんなに流暢であっても、日本語で思考し、学習していく力は身につけていないというケースは少なくない。たとえ難解な言葉を簡単な日本語に置換して説明しても、言葉の基礎力が不足しているため教科学習が困難となるのである。

学習での躓きが、子どもにとって自己否定感を助長するという指摘も見逃せない。勉強ができない自分はダメな人間だと考え、やる気や向上心を自ら埋めてしまうという傾向がある。

2. 外国人児童生徒に対する支援の現場

ここでは、市民団体アレッセ高岡での聞き取り調査及び、「学習支援教室」での参与観察に基づいて報告する。報告者は今回、火曜日に実施された学習支援教室を見学させて頂いた。また、スタッフの方々に対して、教室の開始前におよそ1時間程度のインタビューを行った。

アレッセ高岡は、日本語を母語としない外国人中学生の高校進学を支援することを主たる目的として、青木由香氏が2010年4月に立ち上げた市民団体である。週に2回(火曜日と土曜日)、「学習支援教室」を開室し、国語・数学・英語・理科・社会・日本語について学習指導を実施しているほか、教育や進学に関する情報を提供するため、県内で活動する他の市民ボランティアとの協働により、外国人生徒及びその保護者を対象とした高校進学説

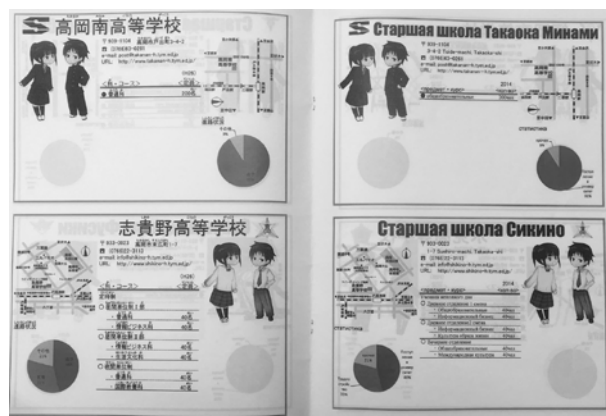


写真2 高校進学説明会資料

「富山県の高校リスト ロシア語版」

(富山県内の高校について、所在地、科・コース、定員、制服のデザイン、卒業後の進学・就職率などを掲載している。)

明会を開催している(写真2)。富山県では、私立高校を滑り止めとして受験する生徒が多いが、外国人児童生徒の保護者にはそういった知識がない。内申書のことや受験方式のことなど日本の教育制度・受験制度について、1～2年生のうちに参加して知識を得てほしいとの思いから開催されているが、自らの危機に早い段階で気づける生徒は多くないという。この高校進学会は、高岡市、富山市、射水市から始まったが、今年は県内全市の中学校に対して説明会を案内する資料の配布を予定しているなど年々規模が拡大してきており、今後が期待される活動である。

現在アレッセ高岡には、中学生・高校生他約20名が在籍しており、11名の講師及び事務スタッフがその活動に携わる。学習支援教室は講義形式ではなく、いわば生徒が同じ部屋に集まって、講師を囲みつつ、それぞれが自主学習に取り組む形で実施され、おおよそ1～5名の生徒に対して講師が1名付いて指導を行う様子が見受けられた。休み時間には和気藹々と会話を楽しむ様子が印象的であった。日々の学習内容や時間割は、講師と生徒が相談して決定している。

月謝は3000円である。当初、月謝は500円としていたが、運営継続が困難な状況になったため父兄会を開催の上、合意の上で金額を変更したという経緯がある。このような父兄会を通して保護者とのコミュニケーションを取る機会を設けることは数少ないが、生徒の学習状況などについて保護者と双方向的に連絡を取り合い、生徒のアレッセでの過ごし方や学習状況を知ってもらうために、年に3回、担当講師から学習状況についてメッセージを送る連絡帳を使っている。通室期間は、長い生徒だと2～3年という生徒もいるが、数回来て終わることも少なく

はないという。しかし、表立ってサポートを求めない生徒こそ、「求められない」という実情も少なからずある。支援を必要としていると思われる生徒に対して、このような支援の場を提供しようとしても、生徒本人が学習そのものを嫌がってしまい、支援の届かない場所へ行ってしまうような場合である。こういった意味においては、学習支援教室に来室している生徒たちは、通室する意志が少なくともあり、3000円の月謝を支払えるという状況にある生徒たちだと言える。この月謝の値上げは、確かに父兄会における合意に基づくものではあったものの、月謝を滞納し支払いがかさんで足が遠のいてしまうケースや、子どもの方が親に遠慮して参加に二の足を踏むケースを生じさせてしまった。経済的な理由で支援を受けられない状況を作らないようにすることと、会の運営を維持することとの両立をどのように図っていくかを、団体として現在模索している。

アレッセ高岡で実施している学習支援は、基本的に中学生・高校生を対象としたものに限っている。これは学習段階の途中でドロップアウトしてしまう生徒や、高校受験の厚い壁に立ち向かう生徒のサポートを急務として活動しているためである。しかし、聞き取りを通して、こういったサポート以外の学習サポートを必要とする子どもたちの存在もまた、熱意を持って子どもたちのために心を砕くスタッフらだからこそ、大きく問題意識として共有されている様子が窺えた。支援を必要とする子どもたちの存在に突き動かされ、手の届かない子どもたちの姿にもどかしさを抱えながらも、今日も地道な活動を通して、外国にルーツを持つ子どもたちのこれからの支援を考え続けている。

IV おわりに

今回、高岡市の多文化状況を確認し、外国人住民の困難と、いかなるサポート体制を設けているのかについてその現状と課題をまとめた。また、外国人児童生徒を取り巻く状況を踏まえ、市民団体の実践の聞き取り調査を通して、子どもたちへの学習支援の必要性を報告した。最後に、多文化共生を志向する日本社会の使命ともいうべき事柄について述べたい。

外国人の定住化及び滞在の長期化が進む中で、外国人住民自身が日本の社会制度や生活習慣への理解を深め、日本語を習得する努力を促すとともに、日本人住民もまた外国人住民と一時的滞在者としてではなく地域住民として出会い、ともに生きる地域づくりを進めることは、この国のあらゆる場所、あらゆる場面において極めて重要な課題となっている。ある局面で、疎外されたマイノ

リティへの喫緊の援助が必要な状況であれば、支援を必要とする集団に特化したアプローチが当面の課題になるが、その場面で、例えばコミュニティ・ワークが展開する初期段階において当事者集団に対して働きかけ、社会につないでいくことに重点を置くとき、受け入れる側の意識や制度が受け皿として機能しなければ、実効性を損なうことになってしまう。また、一つの政策や一つの施策が、マイノリティの直面する課題をすぐさま解決することはなく、完全なる“特効薬”は存在しない。マジョリティにとって「見えにくく」、あたかも「一部の人たち」の課題のように感じられたとしても、それらは紛れもなく私たちの社会が抱える課題であるし、マイノリティの存在は決してマジョリティに「受け入れてもらう」ものではなく、「認めさせる」ものにもならない。エスニシティ、ジェンダー、セクシュアリティ、インペアメントなど様々な局面において私たちはマジョリティとマイノリティを揺れ動き、そう言った意味において社会はすでに多文化であり、常に多文化である。その中でどのように共生を成し得るかは、私たちがともに生きる市民として「共通の課題」や「公共的な事柄」をともに議論し合い、実践を共有し、連帯する関係を構築できるかどうかにかかっている。

謝辞 今回の調査にあたりまして、高岡市市民生活部共創まちづくり課担当者さまのご厚意のもと、このような調査を実施させて頂きましたことを心より感謝致しております。そして、快くインタビューに応じてくださいました日伯交流友の会のお二方、そして、アレッセ高岡代表及び講師陣の皆様に御礼申し上げます。

注

- 1) 「中長期在留者」とは、入管法上の在留資格を持って日本に在留する外国人のうち、次の（ア）から（エ）のいずれにも当てはまらない者を指す。
 - （ア）三ヶ月以下の在留期間が決定された者
 - （イ）短期滞在の在留資格が決定された者
 - （ウ）外交または公用の在留資格が決定された者
 - （エ）上の3つに準じるものとして法務省令で定めた者
- 2) 男女別では、女性が1,182,119人（構成比53.0%）、男性が1,050,070人（構成比47.0%）となり、それぞれ増加した。

文献

- 綾部恒雄編著 2003.『文化人類学のフロンティア』。ミネルヴァ書房。
- 小倉利丸編 2013.『富山における外国人の子どもたちの教育』。

CEAKS調査報告書.

山根(吉長) 智恵 2013. 岡山県の外国人児童生徒に対する日本語及び教科指導・支援の状況と課題—本学が関わった事例を踏まえて—. 山陽論叢 20: 89-106.

山脇啓造 2003. 多文化共生社会をめざして(上)(下). 国際人流2003年5月号, 法務省入国管理局.

吉富志津代 2008. 『多文化共生社会と外国人コミュニティのカーゲットー化しない自助組織は存在するか?』現代人文社.

URL

法務省 平成27年末現在における在留外国人数について
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00057.html (最終閲覧日2016年10月21日)

文部科学省 「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(平成26年度)」の結果について
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357044.htm
(最終閲覧日2016年10月21日)